
プッチンプリンと俺の願い

やさきは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プッチンプリンと俺の願い

【Nコード】

N2306P

【作者名】

やさきは

【あらすじ】

全ては、あの日のプッチンから始まった……

巻き込まれ型トラブルメーカーな秋乃は、プリンに責任を感じて大きな旅をする。

そして帰って来た時「時間を操る能力を手に入れた」などと意味不明な発言をし、さらに毎日のプリンを欠かさない俺まで巻き込まれていく。

女店員とは一体何者？ 能力を使いバトルロアリアル？

そんなファンタジーが始まります。

※2／27　ぷろろーぐから七話までを大幅改稿しました。

ぷろろーぐ（前書き）

皆さんこんにちは。やさきはでございます。本作品、2／27をも
ちまして大幅改稿いたしました。

それでは、始まります。

ぷろろーぐ

「んんっ、いい天気だな」

ちよっと見晴らしのいい丘の上で、ちよっとひなたぼっこ。ちよっとなだらかな斜面で、ちよっとお昼寝。なんてほのぼの、なんてぽかぽか。

やっぱりこれが五月の醍醐味かな？

私は両足を高く上げて、それを振って上半身を起こす。すると気持ちのいい風が私の顔を撫でて通り抜ける。目に入る風がこそばゆくて、片目だけは閉じた。

残った片目で広がる町の景色を見渡す。明るくて元気な町。私はある一点に視線を止める。

ずっと遠くに見えるのは、車が一台通れそうな一本の道路。日当たりはよくて、車はなさそう。

「ねえ、ミラ。どっかにいる？　ねえミラミラミラミラ」

「はい、そんなに呼ばなくてもきちんといます」

スツと、私の斜め後ろに気配が表れた。

「おお、相変わらず早いねえ。さすが堅さナンバーワン」

私の斜め後ろに現れた気配に、振り返らずに話す。

別に早く来てもらわなくても怒らないけど。ミラは真面目すぎるからな。きびきびしすぎ。

「ところで、——なにかご用でしょうか？」

「まあね。用がなかったら呼ばないしね」

「……それは意外です」

あれ？ 私ってそんなにミラのこと呼びまくってる？ 意外です、
って……

思い返してみても、思い当たることはあんまりない。

「……ま、気にしないのが一番。ところでさ、例のアレのソレなんだけどさあ……ついにあと四人になったんだよ！」

「それはそれは。おめでたいですね。ようやく八割が埋まりましたか。……まあ、知っていましたか」

うう、寒い……。

陽気なお日様が、雲に隠れた気がした。

「つれないなあ、そこは知らないフリでしょ。テンション下がる……。まあいいや。それで、今週中に残り四人も見つけておきたいんだけど、どうかな？」

「今週中に四人、ですか……。そんなに都合良く見つかるでしょう

か？　ここまでくるのに一年かかったのに」

困ったような声を出すミラ。

一年もかかったのは私がサボったせいもあるんだけど……。もしかして皮肉られた？

「多分大丈夫でしょ。そんなことよりさ、あそこ見てよ、あそこ」

私は今までずっと見ていた場所を指さす。日当たりの良い一本道。左右には一軒家が建ち並ぶ。

「あそこは言われましても。距離が分からないので……」

「確かに分かりにくいね。ここから五キロくらい向こうの一本道。見える？」

「――見えませんね」

そりゃそうだって。ミラにそんな能力ないし。っていうかあげてないし。

私がアハハと笑うと、ミラは黙ってしまった。

我ながら、イタズラがすぎたかな？

「ゴメンゴメン、見せてあげるから。ちょっとこっち来て」

「はい」

ムスツとした声がした。私は後ろを振り向かず、肩の上から手招きする。

「ほら。私の肩、さわってみ。ほらほら、遠慮せずに」

右手の指で左肩をつんつんとつつく。

「遠慮はしないでですけど……。それでは」

トン、と私の肩にミラのでのひらが置かれる。大きな白い手。

「――あ、見えました。あそこですね」

どうやら見つけたみたい。こんなに早く……

「さすが。私の分身だけあるね」

そう言うのと、ミラはまた少し黙ってしまった。

「……そんな高貴なものではありません、私は」

ぼそっと、独り言のようにミラは言った。

……やっぱり堅いかな。

「あの……。あの場所に誰か来るのですか？」

「まあね。十三分後に来る。んで、ミラミラへの用は分かった？」

「はい。……ミラミラって誰ですか？」

ツツコミが遅かった。

分かってるクセに。にしても照れないな、ミラは。

「そんなことよりさ、あの女の子は凄いのよ。泥棒を自分で捕まえるんだから」

これから、あの道に現れる女の子。なんだろう、今回は当たる気がする。

「そうですか。それより、あの女の子とは誰ですか」

「十三、じゃなくて十二分後にあそこに来る子」

気づかないうちに時間が過ぎていた。

私も細かいなあ……。

「そうですか。それでは、私は行ったほうがよろしいでしょうか？」

「そうだね、お願いするよ。そのために呼んだんだから」

ミラにしか出来ないことだしね。

ミラには見えてはいないだろうけど、私は笑みを作った。

「それでは、あの……」

私に何かを聞くのに、ミラは戸惑っている。

「そうだな、じゃあ私はこれからバイト行ってくるから」

「バイト……ですか？」

「うん、バイト。だからそっちはよろしく」

「はい、分かりました」

ミラはお堅い返事をする、ミラが私の肩から手を離す。そして私の前に歩み出た。

「うし。それじゃ、行ってらっしゃい。気をつけてね」

「はい。それでは」

キビツとした返事をする、私から遠ざかっていった。少し下に降りたミラは、丘の斜面で少し助走をつけて――飛んだ。

私は今日初めてミラを見た。背中に翼はないけど、その翼で飛んでいる。長い金色の髪が二つに束ねられていて、風になびいている。その姿を見送ってから、私は一気に立ち上がる。

行き先は……コンビニがいいかな。

面接で落ちたこととか考えて、それはそれで面白そうだと笑った。私は周りをぐると見回して、澄んだ空気をしっかりと吸い込んだ。

「ふう。――さてと、久しぶりにたのしくなりそう」

誰でもない、青空に向けて言った。

ぷろろーぐ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

前書きでも申しました通り、本作品はぷろろーぐから七話（元八話）を改稿しました。ただ、一話〜七話までの『前書き』『後書き』は変えていないので、そこは歴史を感じてください。少々黒歴史ですが（笑）

今回は謎の一人称でしたが、次回からは玉石翔の一人称でお送りいたします。

一話

窓から太陽の光がさんさんと射してくる、そんなうらかな正午。三連休の終わり。

家の扉を開いたその先には、自身に満ちた顔をした女が立っていた。

サラサラの肩下まで伸びた黒い髪に、半袖半ズボンのラフな格好をしている。春としては少し早い服装だ。見つめる黒い瞳は深く、身長は俺より少し低い。

別にコイツが現れたからといって驚きはしない。よく知った顔だ。

俺は「何か用か？」と聞こうとしたけど、コイツは俺に言葉を発する時間を与えてはくれなかった。

コイツは開いたドアに体重をかけ、自身に満ちた顔を崩さずにこう言った。

「翔、お前のプリンを返しに来たぞ」

……と。



二日前。

三連休の初日。時刻は三時。天気は穏やかな晴れ。

人々は何をしているだろうか。寝ていたり、遊んでいたり、色々な人がいると思う。三時ぴったりの時間にプッチンプリンを食べている人もいると思う。

三時のおやつにプッチンプリンを食べる。そんな人間の一人に、俺もなるはずだった。

だが、なれなかった。ささやかな、俺の平凡な日常破壊されたのだ。

俺のプリンを、俺のプリンを……

「一体どうしてくれとるんじゃあああああ！」

「うぐっ……す、すまん」

時刻は三時を少し過ぎた頃。俺は目の前で正座をしている秋乃（あきの）に向かって、恨み、怒り、妬み、憤り、苦しみ……その他諸々の感情を様々な負の感情をぶち込んでいた。

秋乃はジーンズの半ズボンにTシャツというラフな格好をしている。いつものドデカイ態度とは違い、今は殻の中に入ってしまったカタツムリのように身を小さくしている。

珍しく申し訳無さそうな顔をしているが、んな事は知らん。

謝罪？ 反省？ んなもん知るか！ 今日に限り、俺は一切の悪を絶対に許さない！

こんな事になったのは全てコイツのせい。

思い出すだけでも、はらわたが煮えくり返りそうになる、その事件が起きたのは数分前の事だった。

時はさらに数分前にさかのぼる。

俺は我が家自慢の振り子時計により、時刻が二時五十七分を回ったことを確認した。

小さな机を見る。それは古い木製の机で、その上にはプラスチックのスプーンと、白に細い青のラインがプリントされた小皿が置いてある。窓からそそぐ光に、道具が照らされている。

これで道具の準備は整った。

何をしているかって？ そんなことは決まっている。プッチンプリンを食べるんだ！

プッチンプリンは三時のおやつ。そんなことは俺の常識だ。

うららかな春の午後。窓から差し込む日差しが気持ちいい。そん

なことを考えてから、俺は気を引き締める。

プリンを食べる手順は、まず五十五分から冷凍庫に入れておいたプッチンプリンを取り出す。次に裏に付いている凹凸を倒し、出来るだけ香りを逃さないように開封。『プッチン』を成功させるのだ。

ここで重要なのは、五分前に冷凍庫に入れ、凍らない程度に冷やすこと。一連の作業を迅速、かつ滑らかにこなすこと。プリン一つにも自分なりの工夫があるのだ。

プリンを食べることは、毎日三時、もう十年以上前から毎日欠かさず続けてきたこと。

ここまでくると、もう生理運動とも言えるんじゃないだろうか。しかし、俺は決して手は抜かない。

そう。今日も俺は、プッチンプリンをより美味しく食すための努力を惜しまない。

……おっと、もうこんな時間か。

時計を見ると、三時まであと三十秒しかない。大変だ。

俺は小皿を視界の隅に確認すると、冷凍庫の取っ手を握る。

あと十秒……

五、四、三、二、一、……

「よし！」

かけ声と同時に冷凍庫を開ける。俺は長年かけて習得した秘技、奥義を余すことなく使い、作業に取りかかる。

途中、玄関からドアの開閉する音が聞こえた。が、そんな事は気にしてられない。してはいけない。俺の集中力を揺るがす訳にはいかないのだ。

取り出して、空気穴を開けて、開封！

よしっ、後はプッチンだけだ！ と、そう思ったその時だった。

「翔、大変だあああ！！」

耳をつく、聞き慣れた声。

叫びながら、厄災の塊が玄関と台所の間にあるドアを蹴り開いたのだ。いや、今のアイツを形容するのには厄災という言葉だけでは足らなさすぎる。

姿が見せたソイツは物凄い形相で走ってくる。……だけなら、どれだけ良かっただろうか。

あろうことか、ソイツは俺の目の前でつまづきやがって……

……そう。それは『プッチン』の擬音語で言う、『プ』の部分だったと思う。

秋乃の手が、プリンのカップの端を器用に突き上げた。プリンは

容器にくっついたまま飛んでいく。

空中で回転し、黄色のプリンはカップから飛び出た。

そして俺が言葉を発する間もなく『ベチャッ』と言う悲惨な音を立てて砕け散った……

「それで、どうしてくれるんだあこれ!？」

「本っ当にすまん。このとうりだ。許してくれ」

借金の取り立てみたく怒鳴り散らす俺に、土下座までして謝る秋乃。

秋乃とは、家が隣で年が同じで付き合いも長い。

とはいえ、婦女子である秋乃をプリン一つで土下座させているなんて、俺以外のヤツらならないだろう。見られたら周りにボコボコにされるに違いない。

土下座してる本人もどうかと思けど……。プライドはどこにある。

だが、んなもん知るか! プリンを天秤にかけたら、命でも置かない限り釣り合わない俺の脳味噌が許さない。

「お前プリン舐めてんじゃねえぞ……土下座したって許さねえよ」

——と、これが二日前の出来事である。そのあと秋乃は家から追
い出してやった。

かなり感情的になったかといえば、その通りだ。今は、すべてで
はないが熱は冷めた。許す許さないという観点ではなく、怒りが消
えていった。

そして今日この時、連休最後の正午。

帰ってきた秋乃が俺の家に上がりこんだ。冷蔵庫のある、台所の
ある、プリンが潰れたあの部屋だ。

ぼんやりとした青白い光。目の前で起こっている意味不明な出来
事に、俺は二日前のことを思い出していた。

思い返せば、あの日に言った気もする。

俺のプリンを返せと。

俺のプッチンを返せと。

俺の積み上げてきた日々を返せと……

でも、

「何これ？」

「何って、お前にプリンとプッチンと積み上げてきた日々を返す為のだなあ——」

「いや、そんな事はもうどうでも良いから。……だからお前、何で手が光ってるんだ？ 発光現象が起きてるんだ？」

「これか？ だから、お前にプリンとプッチンと積み上げてきた日々を返す為の——」

「それはもう分かった。分かったから、何で手が光るんだよ！」

「何度言えば分かるのだお前は。だから、これはお前にプリンとプッチンと——」

ダメだ、会話を成り立たない。

同じ様な事ばかり話す秋乃に、半分呆れて半分困惑している。

その半分の困惑の現況となっているのは、テーブルの上の青白い光。秋乃の手から発せられている。

部屋の明るさはあまり変わらない、ぼんやりとした光。秋乃の手が青白く光り、テーブルだけが薄い青に染まっている。

プリンの事件から二日経った今日だが、実は俺が怒鳴った後から今まで、秋乃は行方不明となっていた。

殺しても死ななさそうなヤツだからあんまり心配しなかったし、むしろ反省してるのかなあと思って感心していた。

高校が休みだったせいかな大事にもならず、秋乃の父親も週に一度しか帰って来ないから特に探しに行く人はいなかった。

そうそう、秋乃の父親には本当にお世話に……じゃなかった。

秋乃が行方不明となっていたんだけど、そんなヤツが今日ひよこつと俺の家に現れて、さっきの発言。

「お前のプリンを返しに来たぞ！」

って。

プリンを返すとは、二日前に潰れて飛び散ったアレのことだろうか？

普通に考えて弁償、または同じ物を買うことを返すというんだろうけど……。コイツはいったい何をするつもりなんだ？

極々普通の高校生である俺には、手が青白く発光するなんて言う怪奇現象が信じられる訳がない。

魔法とかも、あったらいいな、程度で本気で信じていないんだけど。

変わらずに光り続ける手は、そこだけ別の世界にあるようだった。

「なあ、秋乃。お前何か変なもの食べちゃった？ 変なキノコとか」

「一体私を何だと思ってるのだ。今日は塩昆布しか食べてないぞ」

それもまた凄いな。

「じゃあ、その塩昆布が光ってたとか……」

「いや、そんなことはない」

「じゃあ、実はそれが塩昆布じゃなくて、だし昆布だったとか」

「毎日の塩昆布を欠かさない私が塩昆布の味を間違えるとても？
そもそも塩昆布とだし昆布を間違える阿呆がどこにいるのだ」

そうだな。コイツの塩昆布愛は俺でも少し引くくらいだからな。
きつと、今日も右ポケットに入ってるんだろうな……

聞くと、秋乃は『塩・塩・昆・布』を食べたという。『塩・塩・
昆・布』は、秋乃がよく食べる塩昆布の一つだ。塩加減が絶妙らし
いけど……光とは関係なさそうだ。

そんな事どうでもいい。

改めて、空間に手をかざす秋乃を見る。

「ううむ……もう少しだな」

秋乃が呟いた。

秋乃の手は、もう十分近く光り続けているが、未だに何の変化も
見られない。

本当に何かあるのか？

「もう少しって、あとどれくらいだ？」

「あと、二時間程……かな」

よし、撤収。こんなことに二時間もかけてられない。

俺は古い財布をポケットに入れて、玄関に向かおうとした。

「おい、待て。どこへ行くんだ翔」

「馬鹿か！ 二時間も待ってられねえよ！ 俺は明日のプリン買って来るから。ほら、お前も早く出てけ」

しっしっ、と手で秋乃の立ち退きを命じる。

二時間もまってるかってんだ。時は金なり。時間を無駄にするのはもったいない。

しかし出ていけとは言ったが、秋乃は自分の手を見つめたまま鼻で笑うだけで、そこから動く気配を見せない。

「そちらこそ阿呆だな。誰が二時間も待てと言った？ 三十秒あれば十分だ」

「はあ？ 二時間なのに三十秒？ 意味が分からん」

どこか得意気笑う秋乃。よく分からないけど、三十秒ならと、また光に目をやる。

何度見ても不思議な光で、見つめていると吸い込まれそうな感覚に陥る。青白い光がただ光っている。

「……怪奇現象だな。お前、この二日の間に何があったんだ？」

青白い光から秋乃の顔へと視線を移す。化学とか光学とかその他の理屈を差し置いて、それが気になった。

「話すと長くなるが……」

「じゃあ要約してくれ」

「ああ、分かった」

秋乃は軽く返事をした。そして一呼吸置くと、いつになく真剣な表情を作ってこちらを向いた。

「実はな……」

あまりにも真剣な雰囲気、息を呑んだ。

秋乃は色々なことを考えるように、静かに自分の手を見つめた。

そして俺の目をしっかりと見て、

「実は……時間を操る能力を手に入れたのだ」

秋乃は豆腐のテイストのごとく、あっさりと言った。

じかん。それって……あの時間？ 「もうあの頃には戻れないの！ 」っていう、あの時間？

一分が六十秒で、一時間が六十分で……えっと……三千六百秒が一時間の、あの時間？

時は金なりで有名な、あの時間？

「凄いだろう」

鼻を高くする秋乃をさらに困惑しながら見ていた俺は、はっとした。

まさか、その能力で俺のプリンを！

「ははは。その顔だと理解してくれたみたいだな。もう少しだから、よく見とけ」

秋乃はフンツ、と鼻を鳴らす。

その言葉には魔力でも込められていたのだろうか。俺はその言葉通り、秋乃の手から溢れるように光る青白い光をまじまじと見つめた。

俺がこんな不思議不可解極まりない話を信じたのは、秋乃の手が光っているからである。

あともう一つ、コイツが嘘をつけるようなヤツじゃなかったからだ。密かに魔法を信じていたのもその一つかもしれない。

「もうすぐ来るぞ！」

おお、ついにか！

秋乃の手がかざす空間を見つめ、その神秘的の事象の前座に胸を高鳴らせる。

何もない場所に、何か特別なものを感じる。

そしてついにその時は来た。

光る掌の先の空間に黄色い物体が現れた。……プリンだ！

本当に突然だった。だんだん見えてくるのかなあ、と思っていた俺は、ポン、と出るように現れたプリンにかなり驚いた。

「「おお！」」

と感嘆しながら、穴があきそうなくらいプリンを見つめていた俺と秋乃。だけど、当のプリンはその視線が恥ずかしく感じたのだろうか？ 重力に逆らわず、逃げるように落ちていった。

当然そこにお皿なんてない訳で、そのまま『ベチャッ』なんて音が聞こえてくるのは当たり前のことであって――

「……って、おい！ ダメじゃねえか！」

「はっ、しまった」

テーブルの上で潰れたプリンは、周りにも飛び散った。床に、服

に、顔にまでプリンとカaramelが飛び散って、なんていい光景だ。

ああ、なんという。二日前と同じような光景がここに……

少し戸惑っていた秋乃の顔に、焦りの表情が見え始める。

「……………さ、さあ、食え」

「食うかあああああああ！」

「ま、まあ、なんだ。……元気出せ」

「お前が言うセリフじゃねえだろ！ ……まあ、別にいいけどさ。
過ぎたことは気にしない」

俺の肩に遠慮気味に置かれる秋乃の手を、軽く払う。

でも気にしないと云ったのは本当のことだ。だってそうだろう？
プリンは三時に食べるものだ。別に二日過ぎてから貰っても嬉しくもなんともない。次は許さないけど。

今はそんなことより、改めて考えてみよう。突然秋乃に宿った能力について。

少し冷静になってみれば、今の出来事の現実性のなさすぎる事がよく分かる。問題はプリンが飛び散ったことではなく、プリンが

ここに現れたこと。秋乃の手が青白く光ったこと。

この二日間で何があったのだろうか？ 想像もできない、という言葉の使いどころがよく分かった。

それにしても、いったいなぜ……？

すべての理由を、秋乃は知っているのだろうか？

気づいた時には、俺の生活が日常ではなくなっている気がした。

一話（後書き）

やさきはです。

ちよつと読み返してみたんですけど、なんだか始まり方が地味なような……。読者を引きつけるには、派手な方が良いらしいですね。最近知りました。

物語はまだまだ始まったばかりです。それと、急に加速するようなことにはならなさそうです。

感想、批評、意見などがあればお願いしますm（　　）m

二話

秋乃の能力について考えるのに抜かせないのは、やっぱり空白の二日間。なんとって何も知らないからな。

ここに何か秘密がある。

……でも、いくら考えても何が起こったかなんてわからない。

そこでだ。少し原点に帰ろう。

そもそも秋乃を追い出したあの日。なんでコイツはあんなにも急いでこの家に来たのか。

本題には関係ないかもしれないけど、気になってしまったらどうしようもない。人間だからな。

「なあ、秋乃……ってあれ？」

……いなくなってる。

この短時間でいったいどこに行ったのか。この部屋には俺一人しかいなかった。

あたりを見回してみる。

家にはテレビに冷蔵庫、パソコンに洗濯機、電子レンジなどなど。様々な家電が完備されている。

この中のすべての物が十年以上前であること、パソコンが動かな

いこと意外はなにも問題ない部屋。気にしない。

そういえば最近、木製の床がきしみ始めたような……。これも気にしない。

ひととおり見回したけど、秋乃はどこにも隠れていない。そんな能があるとも思えないし。

「……………」

することがなくなったてとりあえず冷蔵庫を開けたけど、そこには麦茶とプリンが一つしかなかった。

むなしい。そして腹が減ってきた。

どうすればいいのか分からなくなった時、玄関からドアの開閉する音が聞こえた。

戻ってきたみたいだけど……。いつ出てったよ。忍者かお前は。

「翔、待たせたな」

待ってないし。

帰ってきた秋乃見ると、手に丸まった新聞紙を持っている。

わざわざ隣にある自分の家から持ってきたと。俺が新聞とってないから……

「なあ、これを見てくれないか」

自分の貧乏を思い知らされた俺をよそに、秋乃は持っていた新聞紙をテーブルの上に広げる。地方新聞社だ。厚さからして夕刊だろう。

「……なんだこれ？　でっかい写真だな」

まず目についたのは、トップを飾る大きな写真。写真の横の小さな文字で俺たちの町の名前が書いてある。この近くの写真らしい。いかにも『これから家が建ちます』といった感じの場所だ。

そして写真の隣には一回り小さい写真、二階建ての一軒家の写真がある。

「なんだこの写真？」

「これかのことか？　これはだな。つい先日起きた……そういえばお前には話してなかったな」

秋乃は「むゝ」とうなると、勝手に頷いて話し出した。

「これは二日前の話だ。距離はこの家から一キロ程。ある一軒家が全焼したというのだ」

「全焼、か。……全く知らなかった。消防車も来てなかったし」

「当然だろう。消防車が来る必要などなかったのだからな。だが驚くのはまだ早い。いいか、驚くなよ？」

驚いて良いのか悪いのか分からない。しかしあえてそこにはツツ

こまず、秋乃の話に集中する。

「これが不思議なことなのだが……その家はただ燃えたんじゃない。一瞬で燃えたんだ。跡形もなくな」

「はあ？ 火事だよな、それ」

もう一度新聞を見てみると、なるほど、と分かったことがある。あの二つの写真はビフォーアフターだ。小さな写真が燃える前の、何もない台地が燃えた後の。

記事の題名には『一軒家が一瞬で燃えた？』と書かれている。

「どんな火事だよ」

「いや、違う。実は火事ではないそうさ。目撃者は皆、口をそろえてこう言ったそうさ。『天にも届きそうなでっかい火柱が立ったんだ！』……とな」

秋乃の言葉。どこか凄みがある。

「火柱……。それってすごいのか？」

「……分かん」

重い沈黙が俺の部屋に訪れる。俺も秋乃も「なんか凄いことが起こったらしい」くらいにしか知らないらしい。

だけど、これで秋乃が二日前に俺の家に来た理由が分かった。よくするにこれを伝えに来たわけか。野次馬予備軍だったのか、コイ

ツは……

「そこで、なのだがな……」

秋乃が一気に椅子から立ち上がる。

「どうだ、今から一緒に行ってみないか」

「はあ？　なんで？」

秋乃の目がキラキラと輝いている。悪い予感しかしねえ……

「なんでって、当然、見てみたいからだろ。なんせでっかい火柱だからなあ直径十メートルはあったらしい。こんなのだ」

両手を上げてぴょんぴょんと飛び跳ねて、その凄さを伝えんとしている。残念だけど、これだとむしろ小さいものしか想像できない。

まあでも、仕方ないか。秋乃も実際に見たことはないだろうし。

「それで、なんで見に行くんだよ」

質問をする俺を尻目に、秋乃はカメラやらノートやらをカバンに詰め込んでいる。

「っておい、見に行くだけなのに、なんでそんな物まで持って行く！」

「ははは、まったく馬鹿だなあ翔は。こんなことがあったのに、わざわざカメラにおさめないでどうするのだ。研究するんだよ。そし

てあわよくば私も火柱を作りたい！」

「馬鹿はお前だろ！ 気付けよ、それが無理だってことに！」

秋乃は俺の話など聞いていない。大体、カメラなんて俺の家にはない筈なのに……。いつの間に持ち込んだんだか。

じゃないだろ！ 理由が理解不可能だから！

「さっさと行くぞ」

ブォンブォンとエンジンを鳴らすバイクのように、まだかまだかと俺をせかす。秋乃の目がキラキラしすぎて眩しい。

「俺は明日の学校の予習があるから無——ってわぁ！」

「旅は道連れ世は問答無用ってやつだ。さぁ、行くぞ！」

秋乃、それは違う！ 世は情けだ。そこまで酷くない！

まるで犬の散歩でもするかのように、俺の右手を引っ張る秋乃。今なら飼い主に無理矢理に引っ張られる犬の気持ちがよく分かる。……分かりたくはなかったけど。

「はぁ、仕方ないか」

「ほお、やる気満々だな」

「そう見えたのなら、良い外科医を紹介するけど？」

「むう、それは遠慮したいな。痛いのと苦いのは勘弁して欲しい」

そう言いながらも、握力を弱めない秋乃。「ガキかよお前は」と毒づく俺も、なされるがままに連れて行かれ、ついには家の外に出た。

俺はもう諦めた。人生諦めも肝心だ。

それに火柱に興味があるのは否定出来ないし。実際この二日間は何も出来なかった。ちょっと気晴らしさ。うん、そうだ。

……ところで直径十メートルの火柱って……凄いの？　かっこいいの？

危険な臭いがするような、しないでもないような……



「一キロって、そこそこあるよな？」

「さあな。歩いていればそのうち着くだろう」

なんて無責任発言なんだか。一キロくらいだから文句は言わないけど。

俺と秋乃、例の火柱が立ったという場所へと向かっていた。さすがにもう手は離してもらっている。

家を出てから正直どこへ行けばいいのか分からなかったけど、秋乃の持っていた新聞の写真を見て、なんとなくの場所は掴めた。少し探せば着くだろう。

ところで、ここに来てまだ謎のことがある。秋乃の能力についてだ。

まだ四分の一も来てないけど、ここに来るまでに何度かその能力を見せてもらった。

それはまた驚きの連続だった。

秋乃の放つ青白い光は、ブロック塀をキレイにし、俺の服のしわを取った。

いやまあ、しょうもないことばかりしてるんだけど、これは本物だ。ブロック塀については少し黒ずんでいたけど、一部だけキレイになって逆に目立った。

これを見て、あとで家の家電全般を新しくしてもらおうと密かにおもった。実に万能能力であつたわけだ。

ただ、今はそれよりも聞きたいことがある。

「秋乃、一つ聞いていいか？」

「ああ、なんでも聞くぞ」

「そうか。それなら、俺の家を出て行ってからのことを聞きたいんだけど」

そう問いかけると、秋乃は手を顎につけて「むう」とうなった。

「少し長くなるが、いいか？」

「そこらへんはお構いなく。最初から最後まで頼む」

さっきみたいに、ぱつぱりと説明されても困るし。

「ふむ、分かった。じゃあ、この家を出てすくまのこの話なるな」

秋乃は歩みをそのままに話し始める。

「もう言ったと思うが、私はプリンを返すための旅だっただろ？」

「そうだったんだ……」

動機が意味不明だった。コイツの失踪は旅をしていたからだった。

「だがな、家を出た瞬間に……スリに遭ってな」

「流石、秋乃だな。お約束を忘れない」

秋乃に訪れる定番にして定石パターンの出来事に、ただうんうんと頷く。

「むっ、失礼だなあ。たまたまだろう。まあいい。それで、仕方な

くソイツを追う事にしたのだ」

財布をスられたのなら当然か。真っ昼間からスられるなんて、ど
んだけヌケた顔をしてたんだか。

でも秋乃の財布の中なんてたかが知れてるんだけど。千円札とポ
イントカード以外は、何も持ち歩かないらしいし。

「まったく。私から塩昆布を奪うとは、いい度胸だよな」

財布じゃないのか！

それはスった人も驚いただろうな。お金じゃなくて塩昆布だった
んだから。

「それにアイツ、私が追いついた時に何をしていたと思うか？ 私
の塩昆布を『ふざけるな！』と言って、思い切り地面に叩きつけた
んだぞ！」

ああ、うん。気持ち分かる。勇気を出してスった物が塩昆布だっ
たら……確かに投げ捨てたくなる。

「勿論ボコボコにしてやったがな」

鼻を鳴らして、自慢げに語る秋乃。

そこまでする必要はなくね？

それに塩昆布が関わった時の秋乃は最強だし、容赦ないし、その

人もただで済んだとは思えない。救急車を呼んだ方がいいかも。…
いや、もう遅いか。二日前だっけ。

「自分で取っておいて、捨てるとは。塩昆布を愚弄するのにも程がある！ だいたい、塩昆布は――」

「おいおい、話がズレてるよ。それで、ボコボコにして、そのあとどうなったんだ？」

「あ、ああ。そのあとなんだが……実は道に迷ってしまってたな」

「迷った？ いや、いくら何でもここらへんの地図くらい覚えてるだろ」

いくら秋乃でもそこまで馬鹿か？

「そりゃそうだが、アイツが逃げるものだから……」

「ああ、そういうことか。それを追っていたら迷ってしまったと」

「うむ。その通りだ」

秋乃は開き直るように頷く。違う、そこで開き直っちゃダメだろ。

それで行方不明か。でも、それだけで二日も帰って来れなかったのか？ 少なくとも人に道聞くとかすればなんとでもなると思うけど……。

「そこでな、せっかく迷った事だし、どうせなら行けるとこまで行ってみようと思ったんだ」

「はぁ!？」

秋乃の意味不明な発言に、思わず大声をだしてしまった。

「なんでだよ!」

「理由はさっき言ったろう?」

「え? ……ああ。そうだったな。プリンを返すためか」

旅にでるのとプリンを返すという理由とは直結してないけど、それで旅に出るって覚悟は凄い。俺には理解は及ばない。

でも、時間を操るって、人間をはずれるのもいいとこだぞ。一体何が……

「続き、話していいか?」

「ああ、うん」

取り敢えず、なんでそんな能力を手に入れたのが気になる所。黙って聞くことにしよう。

「よし。えっと……迷った所まで話したか。そうだな、正直それからが辛かったんだ……」

秋乃はどこか遠くの空を見つめながら話し出す。

「これまた珍しいな。お前が辛かったなんて言うのは……」

「ああ、そうかもな。でも崖登りをした時は本当にキツかったな。手足が棒になりかけたぞ。後は火山が噴火して、岩石やら粉末やら火山なんか降ってきたり。そして飼い主のいない猛犬達に襲われたりで大変だった。それに、大グマに襲われた時はかなり危なかった。死ぬかと思ったぞ。まあ、なんとか――」

「ちょっと待て、待てよ止まれよおかしいだろ絶対！ その話って作り話じゃないの？ そんな少年マンガみたいなことがありえるのか？」

「一言一句、間違えてないぞ」

「どんだけ波乱万丈なんだよ！ よく生きて帰ってこられたな。」

驚きながらも少し感心する。いくら秋乃でも、ここまでの不運はそうあるものではない。

「それで、大グマとはどうなったんだ？」

「倒したさ。絶壁に追い詰められた時はもうダメかと思ったが、死んだらもう塩昆布が食べれなくなるといったら……不思議と力が湧いてきた。……不思議だな」

……ホントに不思議。

てか『死んだら塩昆布が食べれない』なんて考え方すれば、コイツ無敵じゃね？

「迷子になって崖登り。噴火に遭い猛犬に襲われ、さらには大グマ

に出くわす。そんな波瀾万丈、不幸満載な旅も……秋乃なら有り得なくもないか」

「本当に失礼だな。たまたまだろう」

「まだそう思ってるのか？ いい加減認めたらどうだ？ そういう星の下に生まれたんだって」

「そんなことあってたまるか」

そう言う秋乃だけど、実際は悲しい程巻き込まれ型なヤツだ。

退屈しない人生だから悪くは無いと思うけど……。最終的には生きてるし。

コイツは俺やその他を巻き込むトラブルメーカーでもあるけど、実際巻き込まれてる方が多い。

……俺には分からない悩みてことか。

普段は穏和、というか馬鹿な秋乃だけど、これについておちよくり続けるとさすがに怒る。

「それからの一日の事に関しては、割愛させていただこう。なにも（・・・）無かったからな」

秋乃は明らかなアクセントをつけて説明する。

あったんだな、色々と……分かりやすすぎて対応に困る。

俺は平然を装う。

「で、だ。その後、やっとのことで砂漠を抜けたんだ」

なんで砂漠？ 話飛びすぎだろ！ しかもこの地方にはそんなもの無いし。一体どこまで行っただよ……

「本当に長く、厳しい道のりだった。……ふう、やっとここまで話したな。あと少しだぞ」

秋乃は小さく息を吐くと、また話し始める。

「しかし、いま考えても、あそこにいるとは思わなかったなあ。コンビニ……サー○ルKにいるとは」

「それだけ沢山のものを超えてたどり着いたのがサー○ルK!？」

いろんな意味で近すぎる！

「気になったのもそうなんだがな。丁度腹も減っていたし、取り敢えず入ったんだ」

確かに、そんな所に場所にコンビニがあれば、俺でも気になる。

それに、腹減ってちゃな。……ん？ 今考えたら秋乃ってそれまでの二日間何も……いや、塩昆布を一袋だけしか食べてないのか？

山の奥地で塩昆布をしゃぶる……浮かんで来る映像が悲しすぎる。

「一応、そこで塩昆布を三袋買おうとしたのだ」

まだ食うのかあああ！

胃袋や舌の前に脳がイカレてるのではないか。

「しかし、塩昆布をレジに出した時に、何故かその女店員に大爆笑されてな……」

それは当然じゃね？

……？ いや、違う。確かに塩昆布を三つ買う人間は変かも知れない。けど、初めて見る人間がそんな事思うのか？ 買い溜めをしているだけに見えるんじゃないか？ しかも大爆笑って……

「あまりに笑うものだから『何がおかしいんだ？』と聞いたんだ。そしたらその女店員が『君ってよく塩昆布だけで生きてられるよね』と……」

……？ それは少なくとも、秋乃の旅を見ていないと分からない筈……まさか！

「ずっと見られていたのか！」

なんだよそれ。監視か？ ストーキングか？ どちらにしろ普通じゃない！

「その店員が笑い終わると、今度は私を見て言ったんだ」

秋乃の瞳に鋭さが増す。そして、その女店員の言ったであろう言葉の口にした。

「『君は神様を信じる?』……と」

二話（後書き）

なかなかストーリーが進みませんね……

次の次くらいでしょうか？　ちょっと物語が動き始めます。

更新が速くない理由は、書くスピードが遅いこと、推敲に時間がかかること。きっとどちらも致命的。

こんな感じですが、どうかよろしくお願いします。

三話

……神、か。

正直言うと、俺は信じていない。もしいるとしたら、もっと世の中平等だろうし。

例えば……。俺も貧乏じゃなくなったり、色々な運がよくなったりとか。結局、幸せまでもが平等じゃない。

ったく、もっと俺に金と幸せをよこせよ。

……など、おおいなる神様を批判をしている内に、写真にあった目的地に着いたみたいだ。

「ここ……なのか？」

「ああ、間違いないぞ」

新聞に載っていた、焼け焦げたらしい家の場所まで来た。家から本当に一キロくらいの場所にあった。

「あの旅よりこちらを優先すべきだったかもしれないな」

あの旅とは、例の能力を得た旅のことを言ってるのか。どちらも優先されるようなことじゃない、とは言わないでおく。

秋乃の生体については、塩昆布を中心に生きていること以外は謎だらけ。十年來のつきあいの俺でも全てを予想することは不可能、

つてくらいに。

いや、この際秋乃の生体などはどうでもいい。そんなことより……これはどうということだ？

「どういふことだよ。家の面影どころか、消し炭一つ残ってねえじやんか」

俺達の目の前には、火事のあった家など見当たらない。家が建つ前の土地のように、小石や草があるだけ。

よく警察が使ってる『立ち入り禁止』の標識も見当たらないし、この場所に家があったなんて到底思えない。

見た目はただの空き地。本来なら庭一面に茂っていたであろう草々も、土地の中心から、まるで円形脱毛症のように消えていた。火柱が立ったのは本当なのかもしれない。

「跡形もなく、とは書いてあったのだが……。むう、これは予想以上だ。これでは調査にならないじゃないか」

「調査じゃないだろ……。それに人の不幸を調査なんて、最低だつて」

「なあに、私が火柱を作れるようになったら恩を返すさ」

火柱を立ててどう恩返しすんだよ。むしろ仇で返してるんじゃないか？

秋乃のふがいなさにため息をつくとき、同時に「ギュルル」とお

腹まで鳴ってしまった。

……三時まで待つか。

冷蔵庫の中の悲しいリアル。プリンが一つしがない現状。

今日の三時に一つ食べるとして、明日からの分が無い。これはかなりまずいことだ。何回か言ったけど、三時のおやつはプリンと決まっている。色々な事情から、明日の分は今日買わなければならない。

秋乃が帰って来たとき、実は丁度買い物に行こうかと思っていて……忘れてた。

その時からずっと財布は持っていたんだけど、さっき確認した財布の中身は八十二円。三個百円で売っているプリンは買えそうになり。

そういえば秋乃って財布持ってたよな？ コンビニで塩昆布を三袋買ったらしいし。

……借りるか。

そうと決まったら早速行動だ。確か、こういうのを善は急げって言っただけ？

「なあ秋乃、金持っていない？ ……ってあれ？ どこいったんだ？」

少し目を離れた隙に、秋乃は風のように消えていた。いや、やっぱり盛りのガキみたいに、の方が合ってるか。

秋乃め、一体どこに行った……。……。あつ、いた。あの土地の中か。

どこから持ち出したんだか、凄いでっかいムシメガネで何か観察してる。帽子を被ればどこかの探偵みたいになるかも。

お前の頭じゃ何やっても無駄だって、なんて言っても効果は無いだろうし、止めはしない。

「秋乃、なんか見つかったか？」

しゃがみながらムシメガネを覗いている秋乃に聞く。あくまでも無駄だとは言わない。効果無いから。

「ああ、少しな。これだ、この小さいのが見えるか？」

秋乃は落ちていた物を摘むと、それを手のひらの上に乗せた。それは光に反射して白く光っている。

どこからどう見ても、ただの砂。秋乃さん。砂っていうものがなんなのか、じっくりと説明して差し上げましょうか？

光るものは全て怪しいとカウントされるのだろうか？

秋乃のアホっぷりを見て絶対に何も見つからないと確信した俺は、さっさと本題に入ることにする。

「なあ秋乃。お前金持ってたよな？」

「金? ……ああ、そういえば持っていたな」

秋乃がズボンのポケットに手を入れると、コイツには絶対似合わない、かわいいピンクの財布が姿を現した。しかもかなりミニサイズ。

「流石秋乃だぜ。んで、いくら持ってるんだ?」

「ふむ。……十九円」

全ての希望が砕けた。

両膝から崩れ落ちるようにして倒れ込み、地面に手をついた。漫画だったら、俺の周りを黒いオーラが渦巻いる所だろう。

82+19=101

100+消費税>101

……足りない。

だが、そんな俺などいざ知らず、秋乃はムシメガネを覗き込んでいる。

「おお、十円が落ちている」

「よこせえええ!」

秋乃の拾い上げた十円を、早速取り上げる。

「なんだ、そんなに欲しいのか」

「そりゃもちろん。そして秋乃、お前の持ってる十九円もくれないかな？」

「それだけでいいのか？ 私のかまわないが」

「いいのかって、十九円しか持っていないヤツが言う言葉じゃないだろ。まあ、ありがたく頂戴するけどな」

「ははは。翔にはプリンの件があるからな、断るわけにはいかんだろ。いいぞ、その十円はやるよ。なに、気にするな。これでチャラってヤツだ」

秋乃は、グッと親指を立てる。

チャラだ？ 随分と安いプリンだな、と少し怒りを覚えたことは無視しといてやる。ありがたく思え。

「ああ、ありがとう」 明日お前の家から塩昆布が消えてないといいな。

心の中でそう毒づいて、この場を後にすることにした。

秋乃が「おお！」やら「何!？」やら叫んでいるけど、もう何も気にしない。



昼時だというのに、カラスはせこせこゴミを食い漁っている。

カラスに散らかされた生ゴミの臭いに顔をしかめながら、俺は早足でゴミ捨て場を抜ける。

焼け焦げたらしい家の跡地を出発してから約十秒。勿論気分はあまりよろしくない。

臭いんだよ！

とりあえず、ゴミの管理くらいは徹底してほしい。何やってるんだ町内会。

秋乃に貰った金は財布に入れた。落とすのはもったいないし。

俺は歩道のない、小さな車道の端っこを歩いている。

ここは一軒家が立ち並ぶ住宅街と言ったところだ。ちなみに、俺と秋乃の家はこの一帯のはじっこにある。

この一帯は整備された歩道が少ないから、車やらなんやらに気をつけるのがすごく面倒くさい。雨の日だと、車に水をぶっかけられることもしばしば。……秋乃と歩けば、の話だけど。

それにしても今日は天気がいい。柔らかく吹く向かい風が、この季節にはぴったりだ。髪を持って行かれるこの感触もけっこう好きだ。

そんなことを考えながら、車もまだらなのどかな道を歩いている

と、前方遠くに二人組が見えた。

右側にいるのは背の小さい女の子。黒の髪で、ロングヘアーだったからすぐに分かった。

右側は……デカくて、丸刈りで、男で、スーツ着てて、黒いサングラスかけてて……ってSPかよ！

一つ際だって目立つのは、あの二人の身長差。五十センチはありそうだ。

……ちよつと観察しすぎたかな？ 女の子はまだしも、坊主の方を見続けるねはアレだったから、俺は視線を下にした。

気にすることでもない。別に襲われるわけではないし。利益なさそうだし。

考えすぎかな、と心のなかで呟いて歩き続ける。

しばらく歩く。彼らとの距離感は分からないけど、俺は自然と道の隅に寄っていた。

もうすぐすれ違うか――

「うっ」

俺は立ち止まった。

いや、立ち止まらなければぶつかっていた。

なぜなら俺より顔一個分低く、そして俺の顔からリング一個分の距離。そこに顔が現れたからだ。

下を向いて歩いていた俺の目の前には、いきなり現れたの形となつて、内心かなり驚いた。

この子は、さっきの女の子だ。黒髪を肩の下まで伸ばして、なかなかかわいい女の子。

近くで見ると、そこまで小さくはないことに気づく。

……よかった。目の前にいるのが強面じゃなくて本当によかった。

「えっと……こんにち——」

「とりあえず離れて貰えませんか？」

「あ、はい」

無表情のまま追い返された。何知れない圧力に押されて、一歩さが

つていうか、なんで俺敬語使ったんだ？

妙に違和感を感じたけど、考える前に顔の筋肉が固まったのを感じた。

俺はぞっとした。

見下ろしている……。身長二メートルはありそうな、黒サングラ

スの坊主頭。そいつは確かに俺の方を向いていた。

「あ、いや……無罪ですよ俺？」

少女と大男を交互に見る。その身長差から、片方に見上げられ、片方に見下げられている。

……俺、何かしたっけ？

三話（後書き）

テンポが速い、文章が下手、ストーリーがつまらない……など
など、感想、批評等あれば、是非お願いします。

甘口から辛口まで、なんでも大丈夫です。そして死ぬほど喜びます。

四話

「すみませ〜ん……」

さすがにこの状況には耐えられない。俺はひっそりと少女の横を通りぬけようとする。間違っても、大男の横だけは通らない。

「ガイモン」

「はいっ」

少女の一言に機敏に反応する大男。俺はすみません謝る時間すら与えられずに捕まった。

大男の動きは速すぎる。これで飛んだらゴキブリだよ。

なんで俺を捕まえるのさ。肩の上で抱えてるのさ。何か怒らせるようなことをしたか？ いや、初対面のはずだけど。

その大男、ガイモンというらしい。いやあ、実に堅実で忠実な声と雰囲気。クラスい一人はいる真面目キヤラって所か。

対して少女の方は、見た目は十二、三歳くらい。肩下まで伸ばした黒の髪はかわいらしい。声もかわいらしくて本当にどこかの令嬢のようなオーラを醸している。

ってか令嬢なんだろうな。見た目に似合わずしっかりしていそうだ。ガイモンとやらとの上下関係も分かった。

「あのゝ。わたくしは一体どうなってしまうのでしょうか？」

「ねえガイモン、コイツで間違いないの？」

無視ですか。

「はい、お嬢様。我々、とは言っても今回は少数ですが、入念に調べておきました。時空の歪みは、確かにこの少年の家から発生しております。時間がありませんでしたので、この少年についてはあまり調べることが出来ませんでした。ですが、時空の歪みが発生する前に家への出入りはなかったそうです。ですので、必然的に能力を使った者がこの少年と判断しました。あと余談ですが、先ほどここから北北東に五百八十キロメートルの地点で、同じく時空の歪みを発見いたしました。場所はコンビニだったそうです。ですが心配はご無用です。そちらには残った二人を調査隊として――」

「ああ、もう！ もっと短くまとめられないの！」

確かに長かった。

「はっ、申し訳ございません。私の不手際でございます。以後、気をつけます！」

ピシッと頭を下げるサングラスの男。堅いイメージに似合わず、意外と若い声をしている。

「あのゝ、僕はどうすればいいのでしょうか？」

「まあ、次から気をつけるのことね。今回はモンブラン五つで許してあげる」

「はいッ。ありがとうございます」

また無視ですか。

「それなら帰りにあのケーキ屋に寄りましょう。ガイモンがいればお父様も何も言わないでしょうし」

少女は急に晴れ晴れとした表情をして、目を輝かせた。

モンブランが好きなんだ。

「屋敷のシェフには任せないのですか？ 最近はお嬢様は私のケーキが嫌いなのだろうか、落ち込んでおりましたが」

「悪いけどモンブランはあの店が一番だから。料理がマズいわげじゃないわよ」

「そうですか。それならば後ほど伝えておきます。シェフもさぞ、喜ぶことでしょう。それでは、帰りは少し遅くなると、そう連絡を入れておきます。ケーキ屋のことは秘密です」

「うん、よくやったわガイモン。それじゃ、早速行きましょうか」

「はい、お嬢様」

「あのー、すみませーん」

俺はおどおどとした声で言う。なんとなく入っちゃいけないような空気に入るものだから。

「え？ あなた誰？」

顔を少し傾けるお嬢様。同義語として偉そうな少女。

なんと、捕まえられたのに忘れられたってのか。所詮俺などその程度の存在だと、態度で示された。

しかし、こんなことでめげる俺じゃない。これは逃げるチャンスだ。

さっきからコイツらの会話を聞いていたから事情は分かった。

時空の歪み、俺の家、コンビニ……。決まりだろ。秋乃のことだよ。

どういう経緯でか、秋乃が能力を手に入れたことは知っているようだ。ただ、顔と名前は知らないようで、能力を手に入れたのを俺だと決めつけているとは。イジメか！

コイツらの情報によると、俺の家への出入りは無かったらしい。でもそれはおかしい。なんたって、秋乃が俺の家に入ったからだ。秋乃は例の能力を使って帰ってらしいけど、ついた場所俺の家の前で向こうの死角だったのかもしれない。

町中に監査カメラを設置する訳にもいかないだろうし、アニメみたい、人工衛星を介して監視されていた可能性も……。

一体どこから、そんな金がくるのだろうか？ うらやましい限りだよチクショウ！

「お嬢様。モンブランの前に、この少年を運びましょう」

「誘拐の間違いでしょう？ でも犯罪には手を染めたくはないし…
…。本人の許可があればいいんだけど」

そう言って、チラッと俺の方を見る。

勿論、断固拒否する。

「許可するなんて、鼻から牛乳が出るくらい、ありえないですよ」

「鼻から…：…なんですって？ 見かけ通りの下品なヤツね。ガイモン、このハナクソみたいなのを、さっさと連れていきなさい」「了解しました」

ほう。ハナクソ…：…。牛乳とハナクソ、どちらが下品か争うことになりそうだ。

ガイモンは長い腕で俺を抱えながら、百八十度の方向転換をした。そしてそのまま歩き出す。

だがしかし、そんなことで焦りはしない。情報ならこちら側が有利だし、助かる方法ならいくらでもある。

こんなときこそ落ち着いて…：

「あんたらさ、なんで俺を捕まえる」

さっきよりも強気な態度で望む。逃げ腰では勝ち目はないからな。

「目的地に到着次第、伝えますよ。大体の事は察して下さい」

ガイモンは答えると、来た道へと歩みを進めた。

察して下さいか。おそらく、俺が時間を操る能力を持っていると思っ
ているコイツらは、何か時間を戻したい物があるのだろう。

あれは人間を超えた便利すぎる能力だ。狙われるのもよく分かる。
第一、俺も欲しい。

「分かった。詳しくは聞かない。でも、それなら俺を連れてっても
意味ないよ」

「変なことを言わないでくれませんか。言う通りにすれば悪いよう
にはしないから。それとも何？ 耳に百円玉でも突っ込んで欲しい
ですか？」

耳に百円玉。是非お願いしたい……ってそうじゃない！

頭の中に住み着いた変な虫を追い出し、頭を冷やす。

「ははははは」

俺はいきなり高笑いを始める。勿論、これは演技だ。ちなみにモ
デルは秋乃。

「な、何？ いきなり笑い出して……。へ、変態なんですか？」

リアルに驚く少女。変態はこんなものじゃないから。思うツボ

と言えばそのとおりだけだ。

「いきなりどうしたのでしょうか」

少女よりも落ち着いてはいるものの、ガイモンも動揺を隠せない様子だ。

馬鹿かコイツら。

予想通り過ぎる反応に、笑いをこらえる。こらえきれなかった部分は、しかし、それがまた不気味な演出をだしていたらしい。二人はさらに困惑と怪訝の目を俺に向けていた。

「いやいや、俺が能力を使えるなんて、一言も言ってないし。っていうか使えないし」

「「……………ッ！」」

ガイモンの俺を締め付ける手に、より力が加わった。

少女の方も、目を大きく見開いて驚いている。

ついさっき感じたことだ。

いきなり笑い出すヤツには、絶対何かある！ 秋乃の言っていた店員も然り。俺には何もないけど、そう思わせることなら出来る。

「お嬢様。騙されてはいけません。時空の歪みを発見した場所は、確かにこの少年の家でした」

「わかってる。でも……」

「俺の家には、もう一人いたってこと」

俺の演技は止まらない。外から見れば、不思議ちゃんにでも見えているのかもしれない。それに演技なら得意な方だ。俳優だって夢じゃない！　ってくらいに。

「しかし、情報によると、最後に出入りがあったのは二日前だそうです。そんなことはありません！」

「はあ……。頭堅いですね。能力を使えるのがもう一人だと仮定して下さい。能力を使えば、誰にも見つからずに帰ってくるなんて、そんなに難しいことじゃないのですか」

「でも、あなたは能力に関してよく知ってるじゃない」

少女が言った。

なかなか鋭そうなことを言ってくれる。

「正直あんまり知らないけど、能力の中身は想像しただけ。ただソイツは、二日をかけて旅をしたらしい。けど、帰りは一瞬で俺の家まで帰ってきた。これが事実。……そういえば、コンビニで能力を貰って、その能力を使って帰ってきたらしいけど……」

ピクッと、ガイモンの体が動いた。抱えられている俺には、その振動がよく分かる。

「アイツが現れたのは、多分玄関前ですし。家への出入りはなかつ

たつて言っていましたけど、実はそこまで監視出来ないんじゃないですか？」

「……その通りです。よく御存知で」

ガイモンの足が止まった。横を歩いていた少女も、それにつられた。

「どうやって調べたんですか？ 時空の歪みとか、俺の家とか」

「企業秘密です。すみませんが、それにはお答えできません」

……まあいいや。法律とプライバシーだけは守って欲しいけど。

「ねえ、お兄さん」

少女が、ガイモンの肩の上にいる俺を見上げる。

「能力を使えるのは、あなたじゃないって本当？」

「まあね」

「じゃあ証拠はある？ さっきの説明が嘘ではないことの証拠、あなたの作り話でない証拠はあるの？」

「ああ。あるよ。——俺、馬鹿だから」

状況的に胸は張れなかったから、代わりに鼻を高くておく。

二人は、しばらくの間キョトンとしていた。

ガイモンが、どこから流出してしまったのか俺の悪成績を暴露すると、少女は「なるほど」と頷いた。

要するに、一瞬でストーリーを作り上げるくらいの頭を、俺は持っていないのだ。

馬鹿って言われても落ち込まないよ。慣れっこさ。

「分かったろ？俺は無関係だから。それと、能力持ってるのは、向こうの空き地にいるから。早く解放してくれよ」

俺はさりげなく秋乃を売って、解放を訴える。

一番重要な二人はというと、どういう訳か、アイコンタクトをとっていた。

俺には分からないけど、何かが通じている。

そしてしばらく見つめ合った後、二人が同時に頷きあう。会議の末、何かが決められたようだ。

「決まったわ。あなた、私達をそこまで案内してくれます？知り合いなんですよね、その人と」

「知り合って……そうだけど、自分たちだけで行ってよ」

俺の元来た方角を指差す。

「いい？ガイモン」

「ええ、お嬢様。決まりですね」

二人は再び頷き合う。少女は笑みを浮かべると、俺が示した方角へと歩き出した。ガイモンもそれに続く。

「あれ？　どうしたの？　ちょい、離してくれよ」

なんで俺を抱えたまま行く！

「申し訳ありませんが、ご同行をお願いします」

「大丈夫。悪いようにはしませんから」

今からイタズラをする子供のような顔をするな！

「離せよ、俺が何をしたってんだよ」

無駄かなあとは心で思っているけど、やっぱり抵抗はする。さっきの余裕で不思議ちゃんな俺は、穴の開いた風船のようにしぼんで飛んでいってしまった。

カァーと鳴くカラスすら、俺を助けてはくれない。

「ふふっ。ごめんなさいね、お兄さん」

全く悪びれずに、かわいらしい声で謝る少女。

「お許し下さい」と、堅く言うガイモン。

二人共。謝るのなら離してくれよ……



歩くこと、約一分。秋乃のいる場所に到着、もとい連行された。

「……アイツなの？ 時間を操る能力を持っているのは」

「分かりません。しかし……一体、何をしているのでしょうか？」

「ああ、本当に何してるんだらうね」

少女、その隣のガイモン、ガイモンに抱えられている俺の順番で、それぞれの感想を述べていく。俺達に共通しているのは、目の前で起きている現象が意味不明なこと。

その中で、少女が一步踏み出した。

「そのあなた、これを見なさい！ この人質を殺されたくなければ、大人し——」

「ははははは、やっと完成だ」

「……………え？」

そこには高らかに笑う人影が一つ。秋乃以外のなんでもない。少女の言葉を完全スルー。

そういえば、俺は人質だったのか。しかし、なんと不思議なことか。

ただの空き地だったこの場所も、秋乃に任せるとどうでしょう？
なんと、ミステリーサークルのある空き地へと大変身！

「って何やってんだアイツ……」

呆れてため息も出ない。

少女とガイモンを見ると、二人はこんな生物は見たことがないと、
ただ困惑の視線を送っていた。

その反応は正解だと思う。

「ほ、本当にあのカエルの卵みたいな人が、能力者なの？」

「残念ながらそうだよ」

カエルの卵なんて気持ち悪く、更に全体的をえていない比喻表現
は気にしない。というより、お嬢様なら少しは自重してほしい。

そしてガイモン、お前は叱れよ。

「おゝい、何やってんだ秋乃」

「ん？ おお、翔じゃないか。お前こそ何をしているのだ？」

「俺？ 俺は今捕まってるんだ。っていうか助けろよ！ 今ピンチだから！」

「おお、そうか。新しい友達が出来たか。ははは、それはよかったなあ」

「違えよ、友達じゃねえよ、捕まってるんだよ！ アイツら敵なんだよ！」

「ふむ、そうか。いやそんなことよりだなあ、この円を――」

「ちょっと待った！」

俺と秋乃の会話を少女が無理矢理止めた。

少女は、鷹のような目で秋乃を睨む。

「そこのアナタ、時間を操る能力があるって本当なの？」

「ああ、そうだぞ。そんなことより見てくれ。遂に完成したんだ」

秋乃はそれをあっさりと認め、更にそれをスルーした。そして、謎のミステリーサークルを指差す。

もしかしくなくても、あれで火柱を立てる気なのだろ。直径が十メートル程ある。

あれって魔法陣のつもりか？ 呆れて声も出ない。

「よし、始めるか」

と、秋乃がミステリーサークルに近づく。そして両手をパンツと合わせて、それから呪文のような言葉を発した。

魔法なのか錬金術なのか、よく分からない儀式をしている。秋乃

が知る、あらゆる知識を総動員したのかもしれない。

……いや、よく聞くと「塩昆布、塩昆布」と、極めて自分勝手な詠唱を唱えている。

ガイモンの肩の上から横にいる少女を見ると、こちらは緊張した顔をしている。

「デカいのが来るわよ！」

いや、何にも来ないから。

「心配はいりません。このガイモン、お嬢様の体には傷一つ、つけさせません！」

いやだから、何も来ないから。

少女をかばうように、ガイモンが前に出る。肩の上の俺に、二人の緊張感がピリピリと伝わってくる。

そして、俺を担いだまま「守る」とか言うなよ。もし何かあれば、明らかに巻き添えくらうじゃん。

三人の視線が秋乃へと集中する中、秋乃は不意にフツと笑った。

「全ての準備は整った」

厨二病全開の発言に、二名は身構えて、一人は呆れた。こちらとしては聞くだけでも恥ずかしいってのに……。

秋乃はミステリーサークルの外に出ると、両手を青空に向けた。

「ガイモン！」

「分かっております」

更に緊張を高めるガイモン。

恐らく、何も分かっていない。あと、身構えるのなら俺をおろせよ。

「いくぞおおお！」

と秋乃。そして鼓膜が破れそうになる程の砲口を上げた。いや、鼓膜ごとふさいでしまいたいくらいの恥ずかしい声を上げた。

「「「……………?」」」

「……………」

この状況の中、三人は数多の疑問符を浮かべ、一人は呆れてため息をついた。

「な、んだ…………と」

ミステリーサークルの前で、呆然と立ち尽くす女が一人。痛々しい。

そもそも、秋乃の予定ではどうなる筈だったのだろうか？　そこ

で火柱が立ったら死ぬぞアイツ。

「何故出来ないのだ！ 翔、どういことだ！」

どういことだよ。疑問の弓矢は俺に向けられた。

「何故に俺に聞く！？ んなもん自分で考えろ！」

ガイモンの肩の上で言う。

すると、秋乃はムカムカしたようで「いいから来い！」と俺に掌を向けた。

うわゝ、何やってるのアイツ。とかわいそうな目で見ただけ、それもすぐ止めた。

俺の視界が少し青を帯びて、次の瞬間、俺の視界の全てが変わった。

景色がパツと入れ替わる。

「……え？」

どういことだ？ 少し離れた所には、秋乃ではなく、少女と体制を崩したガイモンがいる。

俺のすぐ隣には「何故だ、何故なんだ！」とほざく秋乃がいる。

何がどうなったんだ？

静かになった空き地に、秋乃の声だけが響く。

「え……あつ、人質に逃げられた！」

「なっ！ この一瞬で！」

ハッとしたように、少女とガイモンが騒ぎだす。

人質に逃げられた？ 一瞬で？

とりあえずは助かった……らしい。

「男の方は逃がしちゃダメよ！ ガイモン、捕まえなさい！」

「はい！」

急な事態にもかかわらず、百メートルを九秒台ではしれそうなほど速くガイモンが走ってくる。

そして何故俺が狙われる！？ 捕まえるなら秋乃だろ！

「おい、秋乃。逃げるぞ」

「そんなことをしなくても大丈夫だ」

刻々と迫り来る大男などまるでいないかのように、余裕百パーセントの顔をする秋乃。

秋乃の手が、スッとガイモンに向けられる。

が、速い！ 間に合わない！

ガイモンのその巨体は、虎のように俺に飛びかかった。

「ぐわぁ！」

……………？ なにも感じない。

「ガ、ガイモンッ！？ どうしたの！？」

不思議なことに、悲痛な声を上げたのは俺ではなくガイモンだった。

ガイモンは少女の隣で、頭を押さえてのたうち回っている。頭から地面に、思い切りぶつかったのか。

「フンッ、こんなものさ」

秋乃は鼻を鳴らして得意げに笑う。そして砂埃もついていない手を払う。

「一体……何がどうなったんだ？」

「分からん！」

それを胸を張って言うなよ秋乃。

しかし、何はともあれ助かった。

「おし。今度こそ逃げるぞ」

「よし、帰って食い寝しよう」

俺はせかせかと、秋乃は堂々と、帰路につこうとした。その時、

「させない！」

少女が叫んだ。

何事かと振り返ると、少女は両手を重ねて、それを頭上に挙げていた。

そしてその手をを地面に向けて振りおろす。

直後に発生した異変に、俺は気づいた。いや、気づかない方がおかしい。

足元を見ると、俺達の周りには赤黒い円が広がっていた。

「秋乃！」

頭の中で、サイレンが鳴り響く。理由はない。純粹な危険を感じ取った。

横で何も気にしていない秋乃を抱いて、思い切り横に跳ぶ。

秋乃を庇い、背中から落下した。小石が背中に、首に突き刺さり、体が確かな痛みを感じる。

その状況下で、俺はさっきまで俺達が立っていた場所を視界に捉えた。

そこには、地獄の火山が噴火をしたかのように、天高く火柱が立っていた。

五話

「な、なんだあれ!？」

青空さえも突き破りそうな赤黒い火柱が、俺の前で立っている。
熱い空気がと伝わってきて、目が焼けるように痛い。

「避けたわね。死にかけのバツタみたいなヤツッ」

少女が呟くように言った。

本当にどこかのお嬢様？　　ってぐらいの、低レベルな比喻表現。
少しは自重して欲しい。

「くっ。誰だっ、離せ！　私に触れるな！」

言うまでもなく、これは秋乃だ。周りが見えていないのか、俺の上でギャーギャー騒いでいる。

全く、迷惑極まりないヤツだ。

「落ち着け！」

「ごわあっ」

救われない馬鹿に、拳で一撃。

「うう……。おお、なんだ翔か。驚かすなよ」

「……………」

どうやら我に返ったようで、真下にいる俺にやっと思つた。

「驚かすなよ」と言う秋乃だけど、どちらかといえば俺が驚かされたんだけどな。

にしてもムカつく。一体誰が助けてやったと思ってるんだよコイツは。

「おい、そこの…………えつと…………少女！ 何するんだよ！ 危ねえじやねえか！」

「あら、ごめんなさい。逃げられないように力づくで、ね」

少女は少し頭を下げてから怪しく笑う。不本意ながらもかわいらしい。

「大丈夫、安心して。死んだりはしないわよ。大火傷くらいで済むと思うから」

…………とても安心出来ない情報だな。

「アホが。大火傷なんてしてたまるかよ」

「それじゃあ、大人しく捕まってね」

「誰がっ！」

片目を閉じてウインクをしてみせる少女。

ふざけんな、冗談じゃない！　っていうか、何故俺が捕まらなきゃいけない！

「残念ですね、お兄さん。じゃあ次こそは……はずさないわよ。フンッ！」

少女が小さな両手を振り下ろす。すると、俺達の足下に直径二メートルくらいの赤黒い円が出来る。

「ん？　うわぁ！　なんなんだこれは！？」

これを初めて見た秋乃は慌てふためいている。正直な所、俺だっ
て驚いている。

「ってアホ、早くどけて！　俺が動けないだろ！」

秋乃が俺の上に乗っかっているせいで、起き上がろうにも起き上がれない。

早く逃げないと……早く――

「む？　そういえば、何故お前がここに？」

よし、諦めよう。

俺は一瞬で思考を切り替える。

まず両足で秋乃を円の外へと蹴り飛ばす。思っていたより軽々と飛んでいった。

そして両手足に全力を注ぎ、その力で地面を押し出して赤黒い円から――

クソッ、間に合えっ！

空中に跳んだ直後、左足に熱気が伝わった。

「熱っ」

足に集中力を持っていかれて、着地が成功するわけがない。腕と膝に小石が刺さり、地面との摩擦で露出部分が熱い。

痛みをこらえながら目を開くと、そこには火柱が立っている。次いで足を見ると、靴の底の部分が焼け焦げていた。

俺の靴……。危なかった、ギリギリか。

これなら軽い火傷で済むかな。安堵のため息をつくと、全身の感覚を確かめるようにゆっくりと立ち上がる。手足に力が入りにくい。

「おい、大丈夫か！」

いつの間にか消えていた火柱の向こう側から秋乃が走り寄ってきた。

「見ての、通りだよ」

「……うむ。大丈夫そうだな」

「んなわきゃねーだろ！ 見ての通り重傷だよ」

重傷ではないけど、全身が痛い。

「何！？ よく見ると血だらけではないか！」

すり傷でな。

「すまん、今なんとかする」

秋乃が俺に手を伸ばす。ほんわかと光る青白い光が、俺の全身を包み込む。

「させないわよ！」

不意に少女のかわいらしい、けれども意志のこもった声が聞こえた。俺たちがその方向を見ると、少女の両手はすでに地面に向けられていた。

足下に違和感を感じて下を見る。何度か見た、あのクソ忌々しい円ができている。

クソッ、まだやるのか。少しくらい休ませろよ……！

俺は急いで円から出ようとする。――が、

「うっ」

うまく歩けない。体に力が入らない。足が上がりず、一歩目でつまづいてしまう。

「おい、しっかりしろ！」

倒れかかった俺の腕が秋乃の手に掴まれて、引き戻される。

「馬鹿野郎……。早く、逃げるぞ——」

掴まれた手で。逆に秋乃を引っ張る。やっと進む重たい一歩。

しかし次の瞬間、俺達を中心に火柱が立った。



青い空が見える。白い雲も見える。……。俺は仰向けで寝ているのか。

体中の傷からか、視界の隅に見える家が少し青みを帯びている気がする。

……視覚がおかしくなる程の重傷を負ったのか？ いや、考えてみればあの火柱が直撃したのかもしれない。

という割には、体の傷はそこまで痛まない。むしろ痛みが引いていくような……

「翔、大丈夫か？」
聞き慣れた声だ。

声のした方へと顔を傾けると、案の定と言うべきか、そこには秋乃がいた。

「……あれ、ここは？」

ここは……さっきの空き地ではなさそうだ。またさっきとは違う場所にいる。

「大声を出すなよ」

秋乃は唇と人差し指で十字を作って、聞こえるか聞こえないかわらぬ小声で言う。

俺が無言で頷くと、何故か秋乃も俺に頷き返した

「まあまあ酷い怪我だな。だが、任しておけよ」

秋乃の掌は俺に向けられていて、俺の体は青白い光に包まれていた。

痛みが引いていく理由がよく分かった。怪我まで直せるって、ほんだけ便利な能力だよ。

「スマンな」

「気にするな。これもプリンのお詫びだ」

静かに笑う秋乃。

安いプリンだな、なんて言えないな。むしろ高すぎるプリンかな。

「そういえば、お前は大丈夫なのか？ 火柱で火傷とか」

秋乃の体には、火傷どころか怪我すら見当たらない。

「ギリギリで逃げたさ。私を馬鹿にするな」

無用の心配だったようだ。また能力で逃げたのか。

っていうか、俺も最後の火柱はくらってなかったのか。

「じゃあ、あの二人は？」

「あの二人とは、強面のサングラスと、かわいらしい女の子のことだな」

俺が頷くと、秋乃は笑いをこらえるようにニヤケ顔になった。

「あれを見てみろ」

そして俺から見て左側の方向を指差す。

言われた通り、秋乃が指差した方向を見ると……

「……どっかのお嬢様とガイモンじゃん」

「ふうむ。アイツ、ガイモンと言うのか」

少し離れた所にあの二人がいる。あそこが空き地の上だとすると、ここは空き地の前の歩道か。

ここから見えるのは後ろ姿で、むこうはこちらには気づいていないようだ。妙に慌てているのは、俺達を見失ったからだろうか？

騒がしい会話が聞こえる……

「ガイモン、お兄さん達どこにもいないわよ……。やっぱり灰になって死んじゃったんじゃ……」

「だ、大丈夫でございます。え、えっと……殺人の証拠何も無いですから。何せ火柱で——」

「や、やっぱり火柱で死んじゃったの？ 私に殺しちゃったの？」

「あ、いえ、そういう意味ではなくてですね……」

「ど、どうしよう……。目的も達成出来なくて、おまけに人を殺しちゃったなんて……もしかして死刑!？」

「た、多分大丈夫でございまた！ たしか、青少年保護法？ とか言ったような法律が——」

「せ、精少女は保護されないの？」

「あ、いえ、そういう訳では……」

「どうしようどうしよう、明日からどんな顔をして生きていけばいいの？ 人を殺しちゃったのよ！ ねえ、ガイモン。助けてよ」

「はいっ！ しかしどうやって……いや、お嬢様のためならこの命など誰にでもくれてやります」

「えっ、ガイモンが死刑！？ だ、ダメよ。死んだらダメよガイモン！」

あたふたしながら話すガイモン。怯えている少女。

……なんと言うか、話の内容がぶっ飛びすぎてツツコミ所がありすぎだな。大体、精少女って何だよ。

「……うう、泣かせてくれるじゃないか。あのガイモンとかいう少女、よく分からないが大変そうだな」

「全てに関して激しい勘違いしすぎだ秋乃！ 絶対今の話理解できてねえだろ！」

どこにガイモンなんて名前の少女がいるんだよ！

「ん？ どういう意味だ？ って阿呆！ そんな大声を出すな、アイツ等バレるだろうがああああ！！」

お前の声の方がデカイ！

「バレる……？ もしかして私の事がもう警察に……ってあつ、あなた達！」

あゝあ、見つかったじゃん。

「ほら見ろ、バレたじゃないか阿呆」

「半分はお前のせいだ馬鹿野郎」

半分と言わず、八割は秋乃が悪い。これだけは譲れん。

「ちょっとあなた達、よくも私を騙したわね！」

片手を腰につけ、もう片方の手の指で俺達を指す少女。ガイモンの方も、無表情ながら計り知れない怒りを感じる。

ちょっと待て。俺達が一体何をした！

「もう許さない。この私に恥をかかせるなんて、アリを踏み潰すように殺してあげるわ！」

「人を殺しちゃったとかわめいてたくせに、今更殺せるのか？」

俺は立ち上がり、ニヤケながら言う。

「そんなの私の知ったことじゃないわ。死刑だってなんだって受けてやるわよ。……ここにいるガイモンが」

「ええ！ 私がですか！？」

「おいおい。さっきは『死んだらダメよガイモン』とか言ってたじやねえか」

似てないながらも、少女の声真似を試みる。

「うるさいミジンコ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る少女。

そしてその隣では、幸せでとろけてしまいそうなそんな顔をしているガイモン。「死なないで」の一言が相当嬉しかったのかな。男って単純だわ。

そんなガイモンの表情を見てか、少女はさらに激怒する。少し大人びているようにも見えたけど、今はいかにも子供らしい。

「みんなみんな殺してやる！」

両手を振り上げる少女。

また火柱だ。体は……もう痛まない。大丈夫だ。

「どうする秋乃。相手は『殺す』の意味も知らなさそうなガキんちよだけど……逃げるか？」

「まさか。人様に一方的な攻撃をしたんだ。いくら小さな女の子でも、覚悟はしてもらいたい」

「おお、怖い怖い。泣く子も逃げ出しそうだ」

秋乃は「私はそんな強面じゃない」と言うと、フツと笑って少女を見据えた。

少女が頭上の手を力任せに振り下ろす。それに連動するように、俺達を中心に赤黒い円が出来る。もう……いい加減見飽きたな。

「それじゃ、秋乃。また頼むぞ」

「ああ、勿論だ」

秋乃の放つ光が俺達を包み込む。

そして火柱が立ち上る一瞬前、俺達はその場から消えた。



全く、気が利きすぎだ。移動した先が、またしてもあの二人の後ろだとは。

秋乃がこんな高等技術を駆使出来るとは、わるいけど思ってない。たまたまだじゃないか？

しかしどうしたものか。後ろをとれたのはいいんだけど、次に何をすればいいのがさっぱりだ。

考えてみなくても、ガイモンを倒すのは無理だろ。後ろから二人で襲いかかっても、全く勝てる気がしない。

かといって距離をとっても、少女の火柱に一方的にやられる。突っ込んで殺されるだけだろうし。

さて、どうしようか……。そもそも、何をどうすれば俺達の勝ちなんだ？

無い頭で考えて浮かんだ答えは、少女を捕まえて降伏させること。殺したり怪我をさせるつもりは無い。そんなことしても意味がないし。

不利になりそうだけど、こちらには秋乃のチート能力がある。どんな怪我也治して貰える、どんな保険より安心できる能力が。しかも、前より発動までの時間がかかなり短縮されている。これは強い。そういう訳で作戦は決定だ！ ……あれ？

不意に下を向くと、そこにはあの円が……

「って何でええええ！」

地面を蹴って円から離れる。やっぱり見慣れたくはないな。

後ろから、すさまじい熱気を感じて背中が熱い。

「あ、危なかった」

逃げて今更だけど、冷や汗がにじんでくる。それと着地した時に

気づいたけど、怪我だけではなく、焼け焦げた靴までもが元通りとなっていた。

「なんだよ、今度はもう見つかったのかよ」

「馬鹿にしないでよ。同じ手を何度も食らうわけないでしょう」

前を見ると、鼻を鳴らす少女と、その隣でボディガードのように立っているガイモン。

確かに少女の言う通りだ。浮かれてた俺が馬鹿だったな。

「翔、何をぼうっと突っ立っていたのだ。阿呆か」

いつから隣に立っていたのだろうか、秋乃が声をかけてくる。

「うるさいな。これからどうするべきかを考えてたんだよ。どうだ、珍しいだろ。どうせお前には無理だろ、そんなこと考えるの」

「何を言う。そんなの簡単じゃないか。倒せばいいんだろ？」

よかった。秋乃に任せなくて正解だった。

「馬鹿か。俺達が二人で行っても、あの二メートル超えてそうな巨体には勝てないだろ。それに火柱も危険だし」

「……ふうむ、それもそうか」

秋乃は少し考えた後、顎に手を当てて頷く。

「そこで、だ。力の弱い少女を、今度は俺達が人質に取る。俺が捕まえるから、お前は俺の援護をしろ。単純だろ？」

「ああ、分かった」

「本当に理解したか？ 念のために言っとくけど、火柱が来たりガイモンが襲ってきたら俺を守れよ」

「……ああ、そっちな」

危なかった。言わなかったら死ねてたかもしれないな。一体何をするつもりだったのか……

「お兄さん達。作戦会議は終わった？」

少女の声が聞こえる。

「ああ、たった今終わった。……お前、意外に不意打ちしてこなかったな」

「どうせ逃げられるんだし意味がないでしょう？ それに、こちらもう少し時間を貰えた」

ガイモンと目を合わせて、不適な笑みをこぼす少女。

なるほど。あちらにも策があるらしい。余裕たっぷりだな。

「それじゃあ、始めましょうか」

「そんな楽しいものじゃ——」

「望む所だ、ガイモン！」

俺の言葉を遮るなよ。

「用意バッチリ、って感じね。さあガイモン、行きなさい！」

「了解致しました！」

少女への返事と同時に、疾風の如く走り来るガイモン。

「仕方ねえな。秋乃、頼むぞ」

俺はそう言いおくと、ガイモンをかわすため、大きく回り込むようにして少女の所まで走る。

すると俺の動きを見たガイモンは、やはり俺の方へと方向転換してくる。

「秋乃！」

「おお！」

あつという間にガイモンとの距離が縮まる。どんだけの速さだ、と思った時には、青白い光と共にガイモンの姿は消えていた。消えたガイモンは気にせず走り続ける。

「うおおあ！」

後ろで秋乃の声がする。首だけをひねって後ろを見ると、空に伸びる火柱と逃げている秋乃が見えた。

むこうも本気みたいだ。……サポートは期待できないかもしれないな

いな。

再び前を向いて走り始めようとしたが、目の前にガイモンの巨大が飛び込んでくる。

ヤバイ、と思ったけど、次の瞬間にはガイモンの姿は消えている。

俺の進む先に赤黒い円が出来たと思えば、軌道を変える前にそれは青白い光に包まれて消える。

振り返りはしないけど、秋乃は忙しく動いているみたいだ。なんだかんだ言ってアイツは土壇場には強い。こういう時は何より信頼できる。

「もうっ、しつこいのよ！ ハッ！」

前に見える少女が、腕を振り下ろす。さらに続けて二回。

「おい、三回もかよ！」

間髪入れずに、三つの赤黒い円が、俺と少女を遮るように広がる。

火柱の円は消え——ない？ 秋乃は大丈夫か？

火柱に突っ込むわけにはいかなりから、進むのをやめて一度振り返る。

「私は食えないぞおお！」

「食べはしませんので大人しく捕まって下さい！」

秋乃はガイモンに抱えられながら、手足をばたつかせて抵抗している。秋乃は捕まっていた。

「ガイモン、早く。もう一人も捕まえて火柱に！」

ガイモンは「はいっ」と返事をする、秋乃をかかえたままこちらへ走ってきた。

上にいる秋乃は急な動きに反応出来ていない。

「んな訳にはいかねえよ！ 秋乃、ガイモンをどっかに飛ばせ！」

「私は死なんぞ。もっと塩昆布を食わなければ！」

無理な体勢で体をひねって、ガイモンに手のひらを当てる。秋乃の手が青白く光ると、ガイモンの体も青白い光に包まれる。

しかしガイモンは止まらない。

「馬鹿野郎、こっち来るな！」

「ガイモン、早く！」

何と叫んでも、ガイモンはどんどん近づいてくる。

ヤバイ、逃げ道がない！

後ろでは赤黒い円が三つある。もうすぐ世界一高い壁になる円だ。

ほんの少しだけよそ見をすると、ガイモンはすぐそこまで来ている。

た。

そしてその大きな手を伸ばせば届きそうな距離にまで縮まって――フツと消えた。

今までガイモンが見えていた視界には、民家の立ち並ぶ背景となつた。

支えをなくした秋乃は速度をそのままにして落下する。そして、丁度俺の上に落ちてきた。

「うおおおぐほあ！」

ひ、肘が腹にい……

予想していたのとは違う方向からの痛みに、体を丸めて座り込む。

「ああ痛かった」と肘をさすっている秋乃に殺意がわいてくる。痛いのは俺だ！

怒鳴ろうか。そうしようとしたけど、その前に響いた叫び声が俺のそうさせてくれなかった。

「ガイモン早く、早く逃げて！」

少女が必死になって声を上げる。

「なっ！」

その状況に先に気づいたのは秋乃だった。

なんだ？　　と思って秋乃の視線を追って振り返ると、さっき少女がつくった三つの円の中に、何かが見える。

それがなんなのかが分かった時、俺はぞっとした。

そこには、消えたガイモンがうつぶせで倒れていた。

ガイモンは地面の異変に気づくと、両手足を使って体を少し浮かし、足をバネのように使って少女の方に飛ぶ。

立ち上った火柱でその姿は見えなくなった。

ガイモンが火柱を避けたかどうかは、分からない。

視界に炎の塊が広がる。目が焼けそうで、目を細めてしか見ることができない。

秋乃が立ち上がったのか、俺にかかっていた体重は消えた。俺も続いて立ち上がる。

火柱が消えて、熱気だけが残った。

聞こえるのは悲痛な叫び声。

「うう……ああああああっ！」

「ねえ、ガイモン大丈夫！？」

火柱の向こに、両足を焦がしたガイモンが見えた。少女はその隣

で肩を揺らしている。

なんだよあれ……。大火傷どころじゃすまないのかよ、真っ黒焦げじゃないかよ！

「大丈夫か……。秋乃、あれ狙ってやったのか」

「いや、私もよく分からないのだが……」

なんだよそれは！

「あれほつといたら死ぬぞ！ 早く助けないと」

「あ、ああ」

生返事をする秋乃の前を走ってガイモンの元へと駆け寄る。

「来ないでよ！」

「「は？」」

少女の、腹の奥からしぼりとったような声に押されて立ち止まる。

両手の拳を握りしめ、齒を食いしばりながら少女は立ち上がった。

「よくも、ガイモンを……。！」

「いや、だから、俺達はそのガイモンを助けようと――」

「うるさい！ 許さない……」

もう止まらなさそうだ。握り拳をふるふると震わせて、キツとこちらを睨みつけている。

「助けてやると言ってるだろ。何が不満なのだ」

「うるさい、うるさい！」

これは、聞く耳なさそうだな。

少女は我を失っている。その反応に秋乃は「なんなのだ」と額に皺を寄せる。

「おい、あんまり刺激すんなよ。怒らせても意味ないだろ」

「あ、ああ。すまん」

……とは言ったけど、どうすればいいか。

「許さない……死んじゃえ、二人とも死んじゃえ！」

少女は両手を上げた。俺はいつでも走り出せるように少し腰を落とす、周りに目を配る。

少女は右手を振り下ろし、次いで左手を振り下ろす。

赤黒い円が二つ。——三つ、四つ、……は？　なんだこれ!？

直径二メートルくらいの赤黒い円が、どんどん増えていく。

「このミジンコッ、ミジンコッ、キノコッ、ツチノコ！」

少女は一回や二回では終わらせず、声とともに右手、左手、右手、と交互に振り下ろし続けている。

その姿は振り下ろすと言うより、空気をずたずたに引き裂こうとするような、地面を叩きつけるようだ。

こんなに出せるのかよ……

「これって、逃げられるのか？」

俺は分かりきった疑問を口にして、秋乃を見る。

狂ったように手を動かし続ける少女。目は血走っていて、足下のガイモンも見えてないかもしれあに。

赤黒い円は増えて重なり、広がってやがて、空き地の中に巨大な円を形成する。地面に穴が開いたようで、足下に草や土の色はない。

「これって……。あ、秋乃、逃げるぞ。早く瞬間移動してくれ」

「あ、ああ。分かっている」

秋乃が手を前に出すとその手は青白く光り。俺の視界も同じ色に染まる。

狂ったように手を動かし続ける少女を、ガイモンが上半身だけを使って必死に止めようとしている。

それだけならまだ自然だ。……だけど何か、何か違和感を感じる

——あの二人も円の中にいる！

ここまできて俺達はあるの二人が円の中にいることに気づいた。

多分ガイモンは気づいているんだ。だからあんなにも焦っている。
当たっただけで体が黒こげになる火柱なら、全身やられたら即死か。

けど遅かった。助けないと、と思った時には、俺達の視界は変わ
っていた。

なんだよこれ、これはどういうことなんだよ……

まだ火柱が立ったわけじゃない。少女はまだ腕を動かし続かして
いる、あの二人も無事だ。

でもこのままだと……

「翔、あの二人を早く助けなければ！ おい、聞いているのか、何
とかしろ、早く！」

秋乃が俺の肩を思い切り揺らす。性別詐称をしているのかと疑わ
れる力で揺らされて、頭がガンガンと痛い。

それでも、俺は別のことを考えていた。

「おい秋乃……下見ろ、下」

少し怯えた声になってしまった。でもこれは仕方がないというか、この反応が普通だと思う。

普通じゃない俺の声に気づいたのか、秋乃は焦りながらも下を向く。そして驚愕の表情を露わにした。

「な、何故だ！ 何故私達が円のだ真ん中にいるのだ！？」

そんなこと俺が聞きたいくらいだ。

なんで俺達まで赤黒い円の中にいるのか、意味が分からない。

けど、ただ一つ、ここにいる全員が危険なことだけはよく理解できた。

どこかで火柱が立った。

五話（後書き）

あけましておめでとうございます。やさきはです。

このあいだ、当のサイトの小説検索で「ファンタジー」「プリン」
「週間ユニークアクセスの多い順」で検索してみたら、この小説は
最後から四番目にありました。悲しくなんか……はい。ありますね
（笑）

……ただでさえここまで読んで下さった人は少ない（いないかな
？）というのに、こんなことを書く意味はあるのでしょうか？

これは気にしたら終わりですね。取り合えずば完結目指します！

もしここまで読んで下さった読者様がいれば、可能なら、その趣
旨を伝えて頂きければ嬉しいです。元気出ますので。

p.s, プロローグから、準々に改稿中です。

六話（前書き）

大変お待たせいたしました。……別に待ってないですよ。いろいろな意味で。

ようやく実力テストが終わり、これから部活の大会に向けて忙しくなりそうな予感です。さあ頑張ろう。

御労力をおかけすることは承知ですが、感想や評価など、待っています。

そういえば、評価って二回目以降は前の評価に上書きされる形になるようです（最近知りました）

何が言いたいかと申しますと、お気軽に、そして是非とも評価の方をお願いします。ポチッ、ポチッ、という感じで。

六話

「おい、翔！　なんとかしろ！」

自分達の状況を知ったが、秋乃は解決策を見いだすではなくさらにあわてている。

瞬間移動をしたはいいけど、円の中から逃げるどころかど真ん中に来るって。秋乃の能力は、俺が思っているほど万能ではないのかもしれない。それともコントロール出来ないのか、もしくは……

「聞いているのか！　早くなんとかするのだ！」

馬鹿か俺は、そんなことを考えている場合じゃないだろ！

「馬鹿か！　何とかできるのは俺じゃなくてお前だろ！　もう一回、もっと確実なのやれ！」

「何故私がっ！　……いや、私か」

こんな時にボケてんのか。

秋乃が顎に手をつけて頷く。そのあと手を地面に向けるが――

「うわぁ！」

背後からの凄まじい熱気。俺と秋乃は体制を崩す。秋乃の光かけた手はもとに戻ってしまった。

後ろを見ると、大きな火柱が一本。そして右にも左にも……火柱が次々と立ち昇る。

クソッ、時間の問題ってことか。

一つの大きな円が出来ているけど、それはたくさんの円の集合体だ。一斉に立ち昇る、というわけじゃない。

もう一度前を見ると、少女が気が狂ったように腕を動かし続けている。まるで何かに憑依されたみたいに……。

その下で足を焦がしたガイモンが、手だけを使って少女を止めようとしている。

しかしそれが見えたのを最後に、新たに立った火柱が俺達とあの二人を遮った。

「熱っ。何だよこれ。秋乃、何でもいいからなんとかしてくれ！」

左右の火柱から熱気が伝わってくる。

「もう時間が足りないのでは……ああもう、なんでもいい！」

目の前に火柱が立ち上がり、視界がが赤黒く染まる。

暑いではなくて熱い。熱気で目が痛い。たまらずに目を閉じたけど、体が冷めるはずもない。

そんな中、黒い視界が明るくなった。まぶたの向こう側から、確かな光を感じる。

まぶたを薄く開くと、そこには太陽のようにまぶしい光。 秋
乃の手から発せられていたその光は、今までのような青白い光では
ない。なによりも真っ白な光だった。

それは今までのぼんやりとした青白い光ではなく、とても強くて
眩しい真っ白な光だった。

太陽の光のような眩しい光に、俺は反射的に目を瞑った。



もうすぐ夏だというのに、体に風が当たって少し寒い。走ったり
火柱の熱をあびたりして出た汗からか。早くも夏を経験した気分か。
……もっと熱いか。

びしょびしょに濡れたシャツは、もうほとんど乾いてきた。

俺は少し前に火柱がも立った空き地を一別してから、目の前の二
人に視線を戻す。

「あ、あの……本当に、ごめんなさい」

「誠に申し訳ありませんでした」

身長差が五十センチ以上ありそうな二人が、ぺこりと頭を下げて
いる。

これぞまさに凹凸コンビ。俺の秋乃の平行線とは格が違うな。

「ごめんなさい。私としたことが、死にかけのアリのように暴れる
なんて……」

「まあいいよ。最終的には全員無事のハッピーエンドだったしな」

俺は笑顔を作る。それからいつもの顔に戻して。

「それより、その下品な言葉遣いはやめたら？」

今思った。アリとかミジンコとか……このお嬢様は、案外庶民派
なのかもしれない。

「少しお待ちください、玉石（たまいし）さん」

頭を下げていたガイモンが首だけ使って頭をもどす。ちなみに玉
石とは俺の名字だ。なんやかんやで調べられたのだろう。

「お嬢様の言葉遣いにどこか問題がありましたか？」

いや、問題っていうか、なんていうか。お嬢様としてどうなのか
なんだけど。……俺の偏見か？

ガイモンの言葉は純粹なる疑問系。ガイモン自体がなんとも思わないから、少女の言葉遣いは直らないんだと思った。

ガイモンの質問には答えるのが面倒くさかったから「分かりません」とだけ言って適当に流した。考えてみれば、言葉遣いが正しいとかおかしいっていう問題じゃない気がする。

……どうでもいいか。ふう、と息を吐き出すと、横で座りこんでいる秋乃に目を移した。まだ少しだけ息が荒い。

さっき秋乃が出していた白い光。炎熱地獄の中で見たあの白い光は、それまでの青白い光より能力が発動するまでの時間がかなり短かった気がする。光ったのは一秒もない。

あの光は直視出来なくらい眩しくて、それでいてどこか神秘的だった。もともとよく分からなかった秋乃の能力だけど、これはもっと分からない。

あのあとのことだ。光と熱気が消えたのを感じて目を開くとそこに火柱はなかった。ただ、少し前と変わらない空き地が広がっていた。これの前にも、火柱が消えたことはあったけど、何かが違う気がした。

少し離れた所に、力を使い尽くした少女と両足を真っ黒に焦がしたガイモンが倒れていた。

俺がそれに気づいて駆け寄ろうとした時には、秋乃はもう二人に手をかざしていた。

今度はまた青白い光で、二人のケガはすぐに治った。おそらく時間を操作してるわけだし、戻った、と言った方が正しいかもしれない。

秋乃の行動は早かった。あとで聞いたら、ガイモンより少女の方が危なかったそう。能力の使いすぎか？

能力を使うのも楽じゃないのか。二人の治療を終えた秋乃も、今までにないくらい息を切らしていた。

何はともあれ、全員無事だったんだ。秋乃の手柄かな。

馬鹿で、覚悟しろやら倒すやらと言っていた秋乃だけど、本当に大事な物は知っている。ただの馬鹿じゃない。良い大馬鹿だ。

ところで、さっきガイモンから彼らの目的を聞いた。それは、時間を司る能力を持った秋乃をかつさらい、家にいる病気の犬を治して貰いたかったらしい。

俺たちは犬のために襲われたのか……。と思ったけど、どうやら少女が二、三歳頃からずっと今まで飼っていて、凄く懐かれていたそう。

特別な思い入れがあって当然ってなのかな。あんまり想像できないけど。

ここで「話し合いをすれば良かったじゃないか」って聞いたら、

それはある人物に禁止されていたらしい。何が重要かって、その禁止したヤツが名前も知らない人間で、ソイツに火柱の能力も貰って……。

ソイツは黄土色のコートにフードを深くかぶっていた男で、『旅人』と名乗ったそうだ。

秋乃に聞いた女店員の話と妙にかぶるんだけど……。彼女らは男の旅人と言っていたけど、俺達の知る『女店員』と何か関係があるのだろうか？　そもそも、このご時世に旅人なんているのか？

それともう一つ。時空の歪みとか俺の家の周りの状況を知っていたのも、その旅人のくれた機会によるものだという。

まったく迷惑だな。プライバシーもなにもないな。……ってか旅人ってそんなたいそうな機会を持ってるものなのか？

彼らの目的も何も分からない。神の遊びだと決めれば納得は出来るけど、それはただ逃げてるだけだ。

一体何がしたいんだ……

「ふう、少し疲れたな。翔、塩昆布持ってないか？」

不意に横から声がかかる。意識を秋乃に移したけど、わざわざ答えるのが面倒くさかったから心の中だけで「持ってるわけないだろ」と呟く。

俺の沈黙をどうとったのかは知らないけど、秋乃はそれ以上聞いてこなかった。見たところ、息遣いはだいぶ落ち着いている。

「あの、秋乃さん。助けて頂いたこと、私のわがママを聞いて頂いたこと。感謝いたします」

少女が改めて秋乃に頭を下げる

「なんてことないさ。無理な話ではない」

秋乃は微笑みをみせて顔の前で手を振る。

「それから……犬を治せばいいのだな。私はどこへ行けばいいのだ？」

「あ、はい。ランなら私の部屋にいます」

犬の名前はランというのか。ひそかにだけど『アリバッタ』みたいな名前をつけてるんじゃないかと期待してた。

「さっきも言った通り、ランは病気なのでここに連れてくることは出来ません。ですからこちらに来ていただけるとありがたいのですが……」

「いいぞ。どうせ、やることはないしな」

秋乃はそう言いながら伸びをして、ゆっくりと立ち上がる。

「どうもすみません。それとこんなことしかできなくて申し訳ないんですが、我が家のシェフにご馳走を用意させます。腕は確かなので」

……ん？ 今いいことを聞いたような……。

頭の中で打算する。

確か冷蔵庫の中身はプリンが一つ。いや、あれはおやつ。冷蔵庫に食料は無く、俺は今月ピンチだ。節約で命を繋いでいる状態である。そこで、今日の晩御飯もかねての食事をさせて貰おう、と。…気にしたら腹が減ってきた。そういえば昼にもまともな物は食べてなかった。

「あのさ、えーと……お嬢様？」

「私は城野（じょうや）小春こはる—といいます。自己紹介が遅れて申し訳ありません」

「ああ、うん。俺の名前は……知ってたっけ」
ガイモンが知ってたんだから、知らないことはないか。

「ところで城野……小春ちゃん。俺も秋乃と一緒に邪魔しちゃうダメかな？」

「城野さん」とか「小春ちゃん」で迷ったけど、大きくても小学生高学年にしか見えなかったから「小春ちゃん」と呼ぶことにした。

「そんなこと、全然大丈夫ですよ。むしろ大歓迎です」

とんでもない、とばかりに反論してくれる。その心遣い、本当にありがたい。

「玉石さんにもご迷惑をおかけしましたし。あの旅人の言っていた

言葉ですが『闘わないと望みは叶わない』ってきつと嘘ですね」

なんて暖かい言葉だ。今までの印象は結構悪かったけど、実際は純粹でいい子なんだ。むこうの俺達への認識が変わったかもしれない。

「そうですね。ずっとここにいても始まらないですし、そろそろ行きませんか？　少し離れた所に車がありますので」

「へえ、歩いて来たんじゃないんだ」

二人は車で来たらしい。最初に会った時は歩いていたから、ずっと徒歩なのかと思ってたけど、いやさすが、そこはお金持ち。

「そうしよつか。あつ、その前にちょっと用事があるんだけど、いいかな？」

「はい、大丈夫です。時間が無いわけではないので」

いやあ、本当にありがたい。俺は一言お礼を言って道路に向かう。

つと。忘れちゃいけない。もう一つやらなきゃならないことがあったんだ。

さっきから考えていたことがある。それは、二日前に立った火柱はいったい誰がやったのか、だ。

聞いたところ、小春ちゃんが能力を貰ったのは一日前だそうだとすると必然的に彼女は白。火柱が単体で時を越えることはさすがにないと思うし。

彼女らの言う謎の旅人がやったとも考えられるけど、もっと簡単なこと線がある。

さっきのごたごたで何本も立った火柱のうち、何本かは立つ前に消えた。最後の大きなのも同じだ。では、その消えた火柱はどこに行ったのか？ そんなことは馬鹿な俺でも、なんとなくは予想できる。

「塩昆布はあるかなあ……」

隣から聞こえる、のほほんとした声。

「なあ、秋乃」

「……おお、翔か。何か用か？」

「その通り。聞いてくれないか？ お前に頼みたいことがあるんだけど——」

俺は秋乃に用件を伝え、俺は急ぎ足で目的地に向かった。

「はあ、はあ……ごめん、待たせたな」

俺は右手にビニール袋を一つさげて戻ってきた。

「おお、翔。戻ってきたか。うむ、速くも遅くも無かったぞ」

ようするに、普通ということか。多分誉められた。

だいたい、十分くらいで戻ってこれたかな。これでもなかなか早かったとは思うけど。

「悪いね、待たせて」

「いえいえ、全然です」

小春ちゃんが小さく笑うのを見て、俺も返す。

「それから秋乃。ご苦労」

「どういたしまして。それにしても……はあ、これは疲れるな」

「悪いな」

それだけ言って、俺は目の前の家を見上げる。よく見ると汚れも見えるけど、まあ結構な新築だ。白い壁にシンプルな窓とドアがついている家だ。

さっきと同じ場所だけど、ここ空き地は見当たらない。そこには二階建ての家が復建していた。

俺はさっき、秋乃に二日前燃えた家を元に戻すように頼んだ。この家が燃えたのは多分、さっきの戦闘で秋乃が火柱を過去に飛ばしたからだと思う。理屈が通らないのは能力のせいとして、多分自分達で燃やしたんだから、自分達で元に戻さなきゃな。秋乃に任せっ

きりだったけど。

それにしても……

「こんな家があったような、気がするようないような」

あまり通らない道だけど、改めて見てみると、こんな場所もあったような気もする。塀（へい）についているプレートには、ありふれていそうな名字が彫られていた。

「私もそろそろ腹が減ってきたのだが……。行かないか？」

へえ、ちゃんと話を聞いていたんだ。

「俺も……減ったな」

必死になっていると感じないけど、考えてみると急に腹が減るのは不思議なものだ。

自分のお腹が大きく鳴ったけど、幸い誰も気にしていないようだった。せっかくのことだし、無かったことにした。

「車はこの先のコンビニに停めてあります。歩いて五分もかからなかったと思います」

小春ちゃんが言った。多分、俺がさっき行こうとしていたコンビニだろう。

いやはや、よかったよ。コンビニに行っていたらわざわざ高いプリンを買うところだった。

「では、行きましょう。こちらです」

ガイモンがしばらくぶりに口を開いた。

道中、俺は小春ちゃんの話聞いていた。コンビニまでの道にひ細い歩道しかないので、いつの間にか二人づつで並んで歩くようになった。そしてこれはまた何の因果か、秋乃とガイモンが前、俺と小春ちゃんが後ろとなって歩いていた。

前の二人は、何やら熱く語り合っている様子であった。いや、もしかしたら何かの議論を交わしていたのかも。まあ、どうでもいいことかな。

それと小春ちゃんから、ガイモンとのことについて聞いた。

「五年前の話なので私自身の記憶が曖昧なので、実質お父様とガイモンから聞いた話です。ガイモンがそれまで住んでいた場所は、五十メートル以内には他人の家はなかったそうです。わたしはそんな田舎には行ったことがなかったので、ガイモンに連れていってもらうまでは想像もできませんでした。そこは田んぼと山ばかりでした。それからガイモンの家からは五十メートルの範囲には、本当に他の家がありませんでした。それから――」

小春ちゃんはすごく楽しそうに話していた。

そして俺は、適当な相槌をうちながらその話をきいていた。

「——なんです。それで私のために働くことになったんです。私はいま十一歳なのですが、ガイモン働き始めたのは三年と少し前で、当時は気合いだけが空回りしていました。足が早いのと虫や植物に詳しいことだけがとりえでした。……それでも、そんなガイモンでも、私にとっては新しい世界ばかりで、花が咲いたような毎日でした。本当に楽しい毎日でした。勿論、今も……」

城野ちゃんが話終えた時には、彼女達の車が停めてあるコンビニに着いた。

黒くて細長い高級車を勝手に想像していたけど、実際は薄いグリーンンのセダンだった。最近話題のハイブリッドカーらしい。例のお父様がエコに凝っているそうだ。

どんな人なんだか。小春ちゃんといい、お金持ちなイメージがあまりしない。

ガイモンに勧められて車に乗ろうとした。その時、車の下からひよいと出てきた黒猫が姿を現して、俺達を横切った。気づいたのは俺一人だけだろうか。誰も気にしている様子はない。

全員が車に乗り込んだ。何故か秋乃が助手席に座っている。

別に黒猫が横切ったからって、どうってことはない。俺が抱いた感想は「こういうのってアニメの中だけじゃないんだなあ」と「なんかちょっと縁起が悪いかも」の二つくらいだった。

どうってことはない。そんなものは、初詣の日のおみくじで末吉をとるのと同じようなものだ。一分としないうちに忘れる。

その証拠に、ほら。隣でガイモンの事を話す小春ちゃんは幸せそうで、それを聞こえてないフリして聞いているガイモンもまた嬉しそうで。

小春ちゃんの笑顔は、雲一つない青空のようなものだった。眩しいくらいの笑顔だった。

七話

目の前に、俺の背丈の二倍、横幅にあたっては十倍近くある黒い柵のよう門がある。それを挟んだ向こう側には、雲一つない青空の下に青々しい芝生と白を基盤とした立派なお城が……じゃなくて家が建っていた。

こんなに大きな家、テレビ以外で初めて見たよ……。庭も含めて「東京ドーム〇個分」でくれそうなくらい。

実際聞いたら八分の一倍らしいけど、家としては十分にデカかった。

「着いたか。……ああ、そうかあ、これがかの有名な——ホワイトハウスか」

「翔、お前は阿呆か。どう見てもピラミッドだろう」

「いやいや、ピラミッドさお墓だから。ミイラとか出てくるから。」

「お二方。ここは城野家の屋敷です」

そりゃ知ってるけど。ガイモンの言葉に「そうですよね」とだけ答える。

この家は、城とかピラミッドっていうより洋館に近いかもしれないな。

「さあ、早く入りましょう」

車から歩いてきた小春ちゃんが俺達を促す。

「この鉄格子（てつこうし）って、自力で開けるの？」

「そんな訳ないじゃないですか」

小春ちゃんはクスツと笑い、そのまま門の前まで歩く。スツと手を上げて、門の左上を見て軽く振る。

すると門の左上に付いているランプが青く光り、誰が動かすでもなく、門は自動で開いていった。

「すげえ、こんな門がこの国にあったなんて……」

なんとということだ。謎の少女、城野小春は魔法の国から来た魔法使いだったのだ！ いや、冗談だけど。

「さあ、どうぞお入りください」

「うむ。それでは失礼するぞ」

「え、あ、おい……」

通るのも遠慮したくなる高価な門を、秋乃は堂々と歩いていく。少しは遠慮してもいいと思うけど……。

入っているのか悪いのかわからないでいた所を、ガイモンが手で促してくれた。

庭は外見から想像するよりいくらか大きい。門から玄関まではレンガ模様の石が敷き詰められていて、周りには葉の茂る木々が庭を囲むように植えてある。左右の花壇には青や黄色の花が咲いていて、良い香りがしてくる。

聞くと、周りの木はすべて桜の木で、春始めにはまた違う庭が顔を見せるらしい。難しいことはよくわからないけど、この庭は素直に綺麗だなと感じれた。

花壇から家に目を移すと、秋乃と小春ちゃんが早くも扉の前で待っている。待たせてる気がしたから、俺は小走りで二人の所に向かった。

長い。まさに長い。

城野家の食事どころに入った俺がまず疑問思ったのは、なぜテーブルがこんなにも長いのか、だ。横幅は俺の家の物の二倍、縦に関して言えば十倍はある。

真っ白なテーブルクロスは、床にも届きそうなくらいに垂れ下がっている。……なんて無駄な。

離れて座るのもよそよそしいと言われて、俺達三人はテーブルの片端に座っている。残りの無駄に空いたスペースはどうするのか……

一番端に小春ちゃん、その左右に俺と秋乃が座る配置だ。小春ちゃんの斜め後ろには、黒スーツに黒サングラスを身に着けた、坊主

頭のガイモンが立っている。まるで……スパイのような。いや、S Pかな？

「優秀なシェフですので、十数分もしないうちに美味しい料理はできあがると思いますよ」

「ああ、ありがとう」

秋乃が答えると、小春ちゃんは穏やかに笑う。春が来たような、という言葉がよく合いそうだ。

さっきは下品だのなんだね言っていたけど、こういう笑い方もできるじゃないか。何より家に入ってから着替えた、青を基盤ドレスがさらに上品さを醸し出している。

こんな丁寧なもてなしとはさすが。目の前には、ナイフとフォークが光っている。見ているだけでよだれが……。

……！ もうすぐ三時。

「すみませんガイモンさん、今何時ですか？」

「あ、今ですか？ ええと……二時五十七分です」

オーケー、間に合った。俺は持っていたビニール袋から、プッチンプリンを取り出す。

「さっきはそちらを買いに行かれたのですね。翔さんはプリン好きなのですか？ 良ろしければお出ししますよ」

プッチンプリンのスタンバイが終わると同時に、小春ちゃんに聞かれた。

「それなら大丈夫。プッチンプリンは俺を裏切らないから」

「……え？」

小春ちゃんは間の抜けた声を上げた。ついでにガイモンもこちらを見ている。サングラスをかけているから、表情は伺い知れないけど。

……そんなに変なことを言ったのか？

「あ、ガイモンさん。小皿を一つ貰えませんか？」

「はい」

ガイモンは返事を一つする。三秒で小皿がやってきた。

早いな……。一家に一台ガイモンがあると便利そうだ。

俺は早速プリンを皿の上にプッチンする。

「二人とも。翔とプリンに関しては理解をできる範囲に無いと思うぞ」

秋乃は呆れたようにため息をつく、何かあわれなものでも見るような視線を向けてきた。

できればやめて欲しいが、まあ仕方ない。俺はプリンを口に運ん

だ。

一口、また一口と、口に運んでいく。プリンのカケラが大きくもなく小さくもないのは、長年かけて編み出した技ってところか。

ついにプリンはなくなった。

プリン食べている間の俺の心はここにはない。そんなものだから、他の三人の会話もさっぱり分からなかった。

食べ終わったあとの状況として、秋乃が『博多産、塩使用！ 塩昆布』と書かれたビニール袋を持っていた。

ガイモンか誰かに貰ったのかな。もしそうなら、相当なレア物なのか。

それにしても……なんて幸せそうな。秋乃の目は都会のネオンのよりも輝いている。

少しぼやけた意識で秋乃を見ると、雑談をしていたらしい小春ちゃんとガイモンが、プリンを食べ終えた俺に気づいた。

ガイモンがゴミごと引き取ると言ってくれたので、それにはお言葉に甘えることにした。

「見ろよ翔、これを見ろよ！ 博多限定だぞ！」

向かいでは、相変わらず秋乃がわめいている。

？無視するか？、さすがにやめておこう。っていうか、秋乃は博多

が何なのかすら知らないんだろうな。

「それは美味しそうだね」

作文を読み上げる小学生のような棒読みで答えた。

興奮する秋乃から目を離したとき、不意にドアが開く音が聞こえた。

「料理が出来上がりました」

白い服に白く細長い帽子を被った、自分シェフですよ的なオーラをばんばん出した男が入っていた。銀色のワゴンは二段構造になっていて、合わせて四つの料理が置いてある。銀のふたがしてあって、中身が分からない。

「これはまた、随分と早かったわね」

「大丈夫です。手を抜いてはおりませんから」

「それくらい分かっていますよ」

小春ちゃんシェフに笑いかける。このシェフ、速くて旨いが売りらしい。それにしてもこんなにはやいのか。本当に手を抜いてないのか？

「皆さん、どうぞお召し上がりください。ガイモンさんもどうぞ」

料理がそれぞれの前に置かれる。ついでに俺の隣にも。これはガイモンの分らしい。

……なるほど、だから四つか。

「これは……。どうもすみません」

「いえいえ。本日はまた、お疲れさまでした」

軽く頭をさげ合う二人。どこことなく貴族的な雰囲気を感じるのは、二人が住む家柄からだろうか。

ガイモンが俺の隣に座るとシェフは料理を並べ始めた。

すべてが並び終わると、ついに料理が顔を出す。

瞬間俺は息を呑んだ。

こうばしい香りが鼻を通り抜けてくる。

大きな白いお皿の上にはハンバーグが、もう一つの小さなお皿には野菜のスープが入っている。ほわほわと白い湯気がたって、光に反射してキラキラとしている。

「こちら、和風ハンバーグと季節野菜のスープとなります。まだお昼時ですので、あっさりと仕上げさせて頂きました」

シェフの説明も聞こえなかったくらいに、俺の意識は料理に集中していた。なんとも言えないこうばしい香り。光を受けて輝くソース。見た目に香りと、俺の今までの人生で最高級。

「どうぞ、召し上がってください」

名も知らぬシェフは、そう言って部屋の隅に行ってしまった。気づくと、スプーンとフォークに加えてナイフが手元に置かれていた。食べても……いいんだよね？

恐る恐る、スプーンに手を伸ばす。

それを手に持って、まだ湯気のたっているスープをすくって、一口。

「——ッ!!」

なんだ、なんなんだこれは！ 旨い、旨すぎる！

口のなかに広がる良い香り。かむたびに汁が飛び出してくるような野菜達。名前も知らない材料達のすべてがぐっと迫ってくる。無駄のない、けれども贅沢な味。

手が止まらない。口が止まらない。体がぼかぼかとする。

「旨い……」

口が勝手に動いた。

ふと見ると、スープはもう残っていない。残っているのは、和風ハンバーグ。

それにしても、なんて美味しいスープだったんだ。無くなってしまったのがもったいなすぎるくらいに。

そう思いながらスプーンを置いて、ナイフとフォークに持ち替える。……あれ？ ナイフってどっちの手で持つんだっけ？

右手左手と何度か持ち替えて、結局右手に収まった。右利きの俺だったけど、ナイフよりフォークの方がしっくりくる。

震えるナイフでハンバーグを切り分け、フォークを使って口まで運ぶ。

そして一口……

「……ッ!!」

スープだけじゃない、ハンバーグまでもが絶品じゃないか！ 何から何まで美味しい。いいのかこんなに美味しくて！

世の中捨てたもんじゃないよ。貧乏でもいいことあるって。……本気でそう思えた。

ほっぺたの代わりに涙がこぼれ落ちた。



白いエプロンに白い帽子で色白のシェフは、俺達全員分の皿をワ

ゴンに乗せるとこの部屋から出ていった。

いやあ、おいしかった。舌から胃の中まで大満足だ。

それぞれが何を考えているのかはわからないけど、誰も何も喋らなかったから、必然的に部屋が静かになる。

全員が少し落ち着いたのを感じたのだろうか。小春ちゃんは一度椅子に座り直して背筋を伸ばすと、長らく逸れていた本題に入った。

「すみません。さっきお話しをしました、わたしの愛犬のランについてなのですが、あの……」

少し遠慮がちに話していることがなんとなく伝わってくる。聞き辛い事なのかな。別にそんなことじゃないのに。

「いいいいいよ、気にしないでよ。俺達に任しときな」

「おい翔、決定権は私のものだぞ。まあ、断るつもりはないが」

秋乃はゆっくりと立ち上がり、小春ちゃんに視線を向ける。

「遠慮することはない。そんなのはおやすいご用だ。……そうだな、まず私はどこへ行けばいいのだ？」

「えっ……あ、はいっ！　ありがとうございます！」

驚きと喜びの混ざった表情をして、急いで秋乃におじぎをする。しかも今まで座っていた小春ちゃんがいきなり立ったものだから、椅子は後ろに倒れ、その音に小春ちゃん自身が一番驚いていた。

秋乃の質問に答えられていないことには気づく様子もない。

面白くて微笑ましい光景。今の小春ちゃんは俺がこれまでに見たどんな小春ちゃんより、間違いなく可愛かった。

横のガイモンを見ると、父親が娘の成長を喜ぶかのような微笑みを浮かべていた。

俺もこんな顔をしてるのかな。……いや、勝てるわけないか。

小春ちゃんがあたふたしているのを見ていたガイモンは一瞬ハツとした表情になって、それから無駄のない動きで小春ちゃんの近くに移動した。素早く椅子をもとに戻して小春ちゃんを落ち着かせる。

なんとなめらかな動作。さすがSPだ。……じゃなくて執事だったのかな？　もしかしたら使用人も。

……なんでもいいか。

「じゃあ、そろそろ行こうか？」

「あ、はい。……すみません」

小春ちゃんは顔を真っ赤にして、

「お見苦しい所を見せてしまって、すみません」

と、小さく頭を下げた。恥ずかしさからか、そのまま下を向いてしまった。俺より頭一つ分小さいから、その表情は分からなかった。深呼吸をするのが聞こえる。

「――さあ、早く行きましょうか。少し遠いですが、どうかよろしくお願いします」

小春ちゃんは吹っ切れたように顔を上げて歩き出した。この場所から逃げているようにも……見えなくてもいいかな。

この部屋の出口までは、まあまあ遠い。多分この無駄に長いテールのせいだろうな。小春ちゃんの背中を見ながら歩く。

歩きながら、俺はこれからの構図を描いていた。

犬のいる部屋に着いて、秋乃が犬を治して、帰る時には車で送って貰えるかな？　そういえば、今日の晩飯はどうする？

金欠の事実に気づいてむなしくなる。まあ、今日のこれからいっただらこれくらいかな。

と、そんなこと思った――無駄に長いテールの、その半分くらいまで歩いてきた時だ。

ドンッ、という乱暴な音と共に部屋の扉が開いた。全員の視線が集まる中、そこから一人の男が現れた。俺達の歩みが止まる。

「小春、ガイモン！」

男はスーツ姿に青いネクタイ、短髪にあごひげをはやしている

「お父様！」 「城野様！」

二人の声が重なった。

男は小春ちゃんとガイモンの後ろの俺達を、ふと気づいたように見た。

「……客か。すまないが、今は空気になっていてくれないかな」

「むう、難しいことを言うなあ。空気になるなんて、人間には無理だろう」

そういう意味じゃないって！

秋乃を知らない人間には、皮肉にしか聞こえない。秋乃の言葉に男は少しムツとしたけど、短く息を吐くと小春ちゃんとガイモンの二人を睨んだ。

「お父様、何かあったのですか？」

「心配するな。お前には関係ない。用があるのは……」

視線を一点に固定して。

「お前だガイモン」

部屋の扉から、ガイモンと同じで黒一色の、屈強そうな男が数人入ってきた。

「わ、私ですか？」

いきなりの指名。ガイモンは少し取り乱したものの、すぐに落ち着いた。

「はい。なんでしょうか」

「一つだけ、伝えに来た」

男はいたって落ち着いた様子で、しかしガイモンをしっかりとらえて。

「今日をもって、この家から出ていってもらおう。」

確かにそう言った。

部屋が、嫌なくらい静まり返る。しばしの静粛をはさんで、

「……どういう……ことですか？」

初めて口を開いたのは、ガイモンではなく小春ちゃんだった。

「聞いている通りだろう？ それくらい自分で考えな——」

「なんでガイモンが辞めさせなきゃいけないのって聞いているの！」

後ろからでは表情は伺い知れないけど、その怒気だけは確かだった。

「ほら見ろ。その口の悪さ、態度の悪さ、挙げ句の果てには虫なんかの名前を連呼しているそうじゃないか。お前をそうさせたのはどこの誰だ？ そこにいる男じゃないか」

ガイモンはウツと息を詰まらせる。男は続ける。

「お前はもつと高貴であるべきだ。そのためにソイツは必要ない。邪魔なんだ。二度と関わり合うな」

ガイモンはこぶしを握りしめて下を向く。

ちょっと待てよ。そんなのおかしいだろ。

小春ちゃんに高貴を望むのはお前のエゴだろうが！

そう思って、実際に言ってやろうとしたけど、俺の前に秋乃が口を開いた。

「聞いていればなんと酷い話だ。一緒にいて楽しいから一緒にいる。面白いから一緒にいるだけの何が悪いのだ！」

まったく、その通りだ。しかし男は耳を貸そうともしない。

「客人は黙っていて欲しい。君たち庶民の子供には何も分からないだろう」

「ハッ、しるわきゃねーだろ。金持ちはもつと税金払え」

流れに身を任せて言ってしまった。男の顔に青筋が浮かぶ。

「……まあいい。とにかく、ガイモン。お前にはこの家から出ていってもらう」

「納得できません！」

ガイモンはしっかりと顔を上げて、男を見据えていた。

「私は出ていきません。お嬢様を置いてなど、もつてのほかです！」

「知ったことか。嫌だと言うのなら、力づくでも出ていってもらおう」

男の後ろで控えていた数人の黒ずくめの男達が前に出る。まるで壁のようだ。

「手足の骨ぐらい折ってしまっても構わない。さっさと放り出せ」

『はい』

黒ずくめの男達の返事は、気味の悪いくらいに揃っていた。

「はあ？ 骨折ってもいいって、お前正気かよ？」

「いたって正気さ。ところで、君達も同じだよ。知っているか？」

他人の家に勝手に入り込んだ人間は、骨を折られても文句はいえないそうだが……」

「なっ！」

全身に寒気がした。

ようするに俺達もガイモンと一緒にやられると。住居なんたら罪くらい、この男ならでっち上げちまいそうだな。

骨は……さすがにキツいかもしれない。

「城野様、もう一度お願い申し上げますが……どうにかここに残してもらえないでしょうか？」

「何度言えば分かる。お前は邪魔だ、毒だ、この家には必要ないんだ」

「お父様！ もうやめて下さい！ どうしてそこまでするんですか！」

こぶしを握りしめるガイモンの横で、小春ちゃんが叫ぶ。

「すぐに分かるようになるさ。もういい。早く連れ出せ」

黒ずくめの男達がこちらに歩き出した。

「お父様！」

……もう聞き入れてはくれなさそうだ。小春ちゃんの言葉に耳を貸そうとはしない。

……逃げなきゃいけないか。クソッ、逃げ道がない！

……いや、ある！

「逃げるぞ！ みんなテーブルクロスの下にもぐれ！ それから秋乃、頼む」

「おうし、出番か」

俺と秋乃がテーブルクロスの下に潜り込み、あとの二人も続く。長い机の下で暗がりだが、秋乃の青白い光でく照らされる。

「さっきの空き地らへんがいいと思う」

「ああ、任せておけ」

俺達の体が、光に包まれる。ここまできたら、もう逃げきれただろう。

あの空き地に四人で瞬間移動するイメージが浮かぶ。

しかし、そんなイメージはすぐに消し飛ぶこととなった。

「キャ！」

「あっ！」

テーブルクロスがめくられ、部屋の光と大きなが入ってくる。そして小春ちゃんのドレスを掴んで連れ去った。

「お嬢様！」

叫んで手を伸ばすガイモン。

あと少し。ガイモンが小春ちゃんを掴み返そうとする。しかし、その手はむなしく空を切った……

「あ……」

ガイモンのぬけた声が小さく響く。

俺はしばらく呆然と座り尽くして、それからふと周りを見渡してみる。

「……家？」

周りに見えたのは空き地ではなく、住宅街。

……そうか。空き地じゃない。秋乃が燃えた家を元に戻したんだ
っけ。

「お嬢様……」

ガイモンはそうつぶやき、どこか遠い場所を眺める。

俺と秋乃は立ち上がったが、ガイモンはしばらく動かなかった。

このあと二人でガイモンを立ち上がらせ、とりあえず秋乃の家へ
と連れて行くことにした。

もう一度考えてみた。今日、あの空き地で何が起こったのか。

俺達は少女とその使いと戦った。そして少女とその使いの絆は引
き裂かれ、もとの場所に戻ってきた。

しかし、彼らを運んできた車も、戦った空き地も無くなった。

それは今日、その時が、何もかもが無くなってしまったかのよう
だった。

七話（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

最近小説の内容を振り返って思ったのですが、序盤が説明てきな文章になっているとおもいました。

よって、ぷろろーぐから四話までを大幅修正、改稿をしたいと思います。

相変わらず感想0、評価0の小説ですが、少しでも良くなるように頑張ります。というか、ここまで読んでくださる方がこの世界にいるのでしょうか？ ……改稿しても何も変わらなければ、どうしましょう。

と、いうことで、なにかありましたらビシビシ御願います

八話

地デジ対応らしいテレビに大きな冷蔵庫、ふかふかのソファーに最新のノートパソコンなどなど。冷暖房も完備されている明るい部屋。いつ来ても快適な部屋だ。入った時に香るのは人工的なものではなく、嫌なものでもない。

あと二階建てというのも羨ましいかぎりであつたりする。

俺もいつかは……

いやいや違うだろ、とどうでもいい考えを追い出す。

「どうぞ、適当に座っちゃってください」

思い詰めたような表情をしたガイモンを、四つある椅子の内の一つに進める。

ガイモンはゆっくりと、それこそ老人のように椅子に座った。

「ほう、まるで自分の家であるかのような振る舞いだな」

「いいだろ。少しくらいお前の幸せを分ける」

こんな豪勢な生活を、俺もしてみたいってもんだ。秋乃曰わくこれが庶民の生活だとか。まったく、慣れとは怖いものだ。これのどこが普通なんだか……

秋乃の家のテーブルは長方形で、その周りに三日月型に椅子が配

置されている。これは全員がテレビを見られる親切設計だ。

テレビの横には、スピーカー、置き型ゲーム機など、様々なものが置かれている。

ガイモンの隣には秋乃が、斜め前には俺が座る。ここまで来ても、ガイモンの目の集点はあっていない。

「本当はですね」

唐突に、ガイモンが口を開いた。

「城野様は優しい方なのです。春が好きで、庭には桜の木を植えておられます。お嬢様の名前に『春』と付けるほどです。都会に出たはいいでしたけど、そこで何をすればいいのか分からなくなっていた私を雇ってくれたのもあの方でした」

いまだに顔は上がっていない。

「……そんな人間には、全然見えなかったけど」

思い返せば、とにかく酷いヤツだった。小春ちゃんの言葉に耳を貸さない。ガイモンの扱いも全否定、下等を見るようなもの。

「ええ。私にも今日の彼は別人に見えました」

視線がさらに落ちる。その声に覇気はない。

「春が終わったからかもしれないぞ」

「お前は馬鹿か。そんな単純かよ」

俺が否定すると、秋乃は「むう〜」とうなって腕を組んだ。今はコイツなりの励ましか、それとも馬鹿なだけか。冗談ではないと思う。

「……それも、そうかもしれませんね」

ガイモンがそれをどうとったのか、少し表情が和らいだ気がした。

「そんなことより、お嬢様は大丈夫でしょうか……」

ガイモンは窓の向こうの空を静かに眺める。少し雲が出てきた。

明日の天気心配だな。

俺は心の中で、先行きが不安になった。

「……すまなかった」

しばしの沈黙のあと、秋乃が力なく謝る。

「いえいえ、謝ることはありません。秋乃さんではなく、この私が悪いのですから……」

「違う違う。誰のせいでもないですって」

どうしてこうも邪険なムードにならなきゃいけないんだよ。悪いのはアイツだ。二人のせいじゃない。

秋乃がガイモンに謝ったのは、多分自分が何も出来なかったからだろう。

あのあと秋乃は、能力で小春ちゃんをここへ呼ぼうとしたり、もう一度あの家に戻ろうと試みたけど、どちらも出来なかった。

青白い光だけが、ただ光り続けていた。

その能力、どれだけ都合が悪いんだか。そう思ったけど、秋乃を責めることはできなかった。むしろ悪いのはどこぞのコンビニ店員だ。

「お嬢様はですね」

窓の外を見たまま、ガイモンが話し出す。

「こんな私に笑いかけてくださったのです。変な言い方ですけど、心の底から温まるようでした」

ガイモンはそれ以上のことを語らなかった。だけど、ガイモンの沈黙が何よりもそれを物語っていた。

窓の外を見ると、少し日が傾いている。しばらく窓の外を見ていたガイモンが、色々なものを吐き出すように息を吐いた。

「ダメですね。いつまでも動かないわけにはいきません」

ガイモンが席を立つ。

「もう行くんですか？」

急いでもどうにかなるものじゃ……

「いつまでもお邪魔するわけにはいかないですし、それに……」

ガイモンは黒いサングラスに手を添えると、それをそっと外して机の上に置いた。

「決別……です。すがりつくのも今日で終わりにします」

そう言った、サングラスを外したガイモンの顔は、俺達には今までよりずっと弱々しく写った。

強面というより坊主の青年。本当に、どこにでもいそうな。

「玉石様、白美川様、今日はご迷惑をおかけしました」

ガイモンが深く頭を下げる。

「……それはいいんですけど、これからどうするんですか？」

「そうだぞ。この家は一人も泊められないほど貧乏ではない」

「いえ、大丈夫です。決別しなければいけませんから」

ガイモンが頭を上げる。

決別？　いったい何から？　俺には分からない。

「これからどうするかは、しばらく一人で考えてみます。本当にありがとうございました」

ガイモンはもう一度頭を下げると、玄関の方へ歩いていった。

静かな部屋に、靴をはく音、ドアを開ける音、閉まる音が順番に聞こえてくる。

机の上には、サングラスだけが残った。それをよく見ると違和感が残る。

手に取って見ると、サングラスのレンズの下に布が貼り付けてあった。触れば分かる単純な仕掛け。

その布は湿っていた。泣いていたんだ、ずっと。

違うだろ、こんなの違うだろ。納得できない。

なんでガイモンが諦めなきゃいけない！　なんであの二人は離れなきゃいけない！

俺は走って玄関を出た。秋乃も俺に続いてきた。

そこから左右を見渡すと、ガイモンの姿はいとも簡単に見つかった。

あの悲しさばっか背負ってる背中に言ってやりたかった。「小春

ちゃんは絶対に待ってる」って。

でも言えなかった。恥ずかしさとか空気を読んでとかじゃなくて、なぜか言っではいけない気がした。言わなきゃいけないのに……！

あの生気を微塵にも感じない背中を追って止めなきゃいけない気がした。でも追えなかった。

なんでだ、俺はなんで動けない！

心でどれだけ叫んでも、何も変わらない。

結局は、少し赤みを帯び始めた地平線のかなたに消える彼を、俺達はただ見ていることしかできなかった。

八話（後書き）

ここまでお読みいただき、本当にありがとうございます。

紹介にもかいてあるのですが、この小説はぷろろーぐから七話までを大幅改稿してあります。

ですので、今回の八話からリアルタイムのコメントを書きます。

今日は喋るぞ（・o・）ノ

まず、改稿する前と何が変わったのかと申しますと……

1、一話から四話が短くなった

2、タイトルが少し変わった

3、ストーリーを若干変更、細部を修正

4、ぷろろーぐの部分を一話に食い込ませ、謎の女（？）の一人称とした

の四点です。

まず一話から四話が短くなったことですが、これは蛇足なストーリーをカットしたからです。改稿前は『白銀のプリン』だとか『空飛ぶ黄金の塩昆布』など、変な設定がありました。ストーリーを進める上で関係ないので、そこを飛ばすこととしました。バトルまでの展開を早める意味合いもありました。

次にタイトルです。

前は『プッチンプリンストーリー』といったものでした。でもよくよく考えると、プッチンプリンってそんなに重要か？ と疑問に陥ったのです。そこで、物語上もう少し大切な『俺の願い』を入れしました。まだ微塵にも出てませんが……。

次にストーリーを若干変更したことです。

これはけっこう細かいんですが。翔がプリンを買いに行く場面は、前は家に取りに帰ることになっていました。空き地に向かう途中に秋乃の二日の説明を入れることにしたので、必然的に移動距離はのびて、家に帰るのが不可能となったからです。ほかに多々あった誤字を修正したのですが、新たに文章をふやしたのでまた出てくるかもしれません。

最後に謎の○○です。

次回出てきます！ ……やっところまで来たんだなあ、と感傷に浸っております

では、執筆頑張ります。

九話

赤い夕日がいっそう赤くなった。遠く続く一本道には、今は誰の影もない。ただむなしさがこみ上げてきて、いつも自分見ている光景にはとても感じれない。

前から風が吹いてくる。目が乾いて、長くはない髪がもっていかれる。

「ふう……」

これで全部終わったのか？ でも、どうにも気持ちよくない。

後ろにいた秋乃の気配が動いた。

「翔、私はもう家に返るぞ。今日は父さんも帰ってくる」

そういえば、今日は秋乃の父親が帰ってくるんだったか。

色々あったせいか、そんなことは頭の中にはなかった。

俺は大きく息を吸って、一気に吐き出した。

「ああ、俺も帰るよ」

秋乃は体を百八十度回転させて、家の扉へと向かった。その背中を途中まで見送ってから、俺も自分の家に向かって歩き始める。

ほんの十数メートルの距離。帰れば、多分今日は終わる……。



家の扉の目の前で来た。そしてここまで来て、家の鍵をかけていなかったことに気づいた。思い返せば、俺は秋乃に無理やり連れて行かれたのだ。

今更どうでもいいか、とドアノブに手をかける。でも、ドアノブを握ったその手が、それ以上動かせない。

さびかけた青い鉄のドアが目の前にある。それをあわない焦点で見ている。

なんなんだ……。家に入ったら、すべて手遅れになる気がする。俺の家には、帰りが遅いと叱る父がいなければ、台所で料理を作っている母もいない。特段、何かがあるわけでもないのに。

単なる勘かもしれないけど、手を動かせない。ドアノブをひねれない。自分の中の『何か』が手を止めている。

今日起きたことが頭の中をで駆け巡る。まだ未練があるのか、満足がいけないのか。それとも……

……いや、さすがに考えすぎかもしれない。もう何もないじゃないか。他人の俺がいつまでもこだわり続けることじゃないんだ。

妙に納得がいった。

覚悟を決めてドアノブをひねる。キィ、と金属のこすれる小さな音がして、ドアノブは回る。

ここでまた迷った。だけど、いつまでも止まっているわけにはいかない。

すべてを断ち切るように、いつきにドアを開け――

「あっ、帰ってきた帰ってきた。君、おかえりね〜」

ドアを閉めた。

……。……。？

俺、疲れてるのかな？ 俺の家には誰もいないはず。なのにどうしてだ？

今見たのは、身長が百六十センチで、髪の毛が青くて、フリフリのドレスを着ていた女の子が、まさにプリンを食べようとして……プリン？

「ちょっと待て！ 俺のプリンをどうするつもりだ！」

俺はすぐさまドアを開けなおす。が、そこに立っていたのは――

「おお、翔じゃないか。どうしたのだ？」

「……あれ？ 秋乃？」

玄関のすぐ上には、塩昆布をしゃぶっている秋乃が立っていた。いかにも自然な表情でこちらに問いかけてくる。

「いやいやいやいや、ちょっと待て。なんでここに秋乃がいる？ コイツはさっき家に帰ったよな？」

確かに鍵はかけてなかったけど、俺の家と秋乃の家の間は一本道だ。なんせ隣の家だし、途中で追い越せるはずがない。じゃあ向こう側の窓から入り直したか？ それなら不可能じゃない。けど……なんのために？

俺が自問自答を繰り返していると、秋乃は俺の所へと近づいてきた。そして塩昆布の袋に手をつっ込み、一本を取り出した。

「どうだ、一本食うか？」

秋乃は俺に塩昆布を差し出し、確かに、そう言った。

……ほう、そういうことか。

俺は理解した。足に力を込めて、一気に跳ぶ。跳び蹴りの用意。

「デメエは何者じゃあああああ！！」

言葉とともに前に飛び、そのまま秋乃に飛び蹴りを——いや、エセ秋乃に飛び蹴りをくらわせた。

「ひゃあ！」

見事、腹に当たった。しかしソイツは、秋乃が死んでも出さなさそうな悲鳴を上げた。このすこぶる高い声は、明らかに秋乃じゃない。

「さあて、何者なんだお前はあ？」

目の前のエセ秋乃の頬を引っ張り、髪の毛を引っ張る。

まずはこの顔だよな。顔全面をマスクで覆っているのか？ この髪はカツラが？

「うぐう、いはいいはい。はなひいて」

手足をバタバタとさせて脱出をしようとしているエセ秋乃。秋乃と違ってあまりにも頼りない力でもあるし、その声はもはや別人のものになっていた。

「クソッ、なかなかとれねえな……」

マスクを被っているならその感触でなんとなく分かると思うけど、これは人肌の感触。髪を引っ張る感触も妙にリアルにだ。

「あはひゅ」

エセ秋乃はとても力ない悲鳴を発する。

……もしかすると秋乃のそっくりさんか？ 双子がいるなんて聞いたことないし……

考えながらもエセ秋乃の顔をいじる手は止めない。

しかし次の瞬間。

「……あれ？ 誰この子？」

目の前にはエセ秋乃ではなく、空色に透き通った長い髪の子。その顔は俺の手によって引っ張られて、アイスブルーの瞳はうるうると湿っている。

「ふいあへくん、はひゃふはひゃひへひょ」

すごくかわいそうな顔で、何かを懇願するように言っている。

離してくれと言ってるのか？ ……しまった！

「だ、大丈夫？」

あわてて両手をし、体をどかす。女の子の顔を見ると、頬は赤く、髪はぐしゃぐしゃになっていた。

「ふう、命拾いしたよ」

んな大げさな。

女の子は頬を抑えながら立ち上がるり、着ていたフリフリのスカートを手で払った。スカートの丈は長くて、足首まで隠れていた。

女の子は、身長は百四十と少し。年の頃は十二歳くらいだろうか。俺が最初に家に入った時に見たヤツと、似てるような、似てないよ

うな……。背もこんなに小さくはなかった気がする。

「私は大丈夫だよ、君。気にしないでくつろいでいいよ」

「え？　はあ、じゃあ……ってここは俺の家だろ！」

俺から逃れた女の子は、急に態度をデカくして台所のある部屋へと歩いていった。

「おい、ちょっと待て。人の部屋に勝手に入るな！」

俺は走って女の子を追いかける。部屋の中では走らない、なんて教訓は頭の外。全力疾走した。

俺が二秒で部屋につくと、周りを見回した。すると女の子はすぐに見つかった。足を組んで椅子に座っている。さらに、さっき秋乃が持ってきた新聞まで読んでいる。

「人の家の椅子に勝手に座るな。何様だよ！」

「え？　別にいいじゃんいいじゃん。減るもんじゃないし。……それにしても、なんか座り心地悪いよね、この椅子」

悪かったな、フカフカなソファじゃなくて。

俺はさらなる追隨をしようとしたが、しかしそれは、いきなり横から入ってきた声に止められた。

「あのー、すみません。お風呂を借りてもよろしいでしょうか？」

「やああめええろおおお！ 俺の家の水道代とガス代を上
げるなあああ！」

今度は風呂場に走った。

「いやゝ、まったく。お風呂も貸してくれないなんて、ケチだね、
君」

「私も、まさか断られるとは思いませんでした。……ケチですね」

「黙りやがれ侵入者ども。文句があるなら今すぐ出てけ」

何をケチケチぬかしたるんじゃコイツらは。悪かったな、ケチで。

ついさっき俺の家に突然現れた二人が、なぜか俺の椅子に座っている。玄関で見つけた空色の髪の子は、椅子の上でドカンとあぐらをかいている。対して風呂場にいた長い金髪のツインテールの女性は、いかにもキチツとした座り方をしている。ここから、二人の性格がよく分かる。

金髪の女性は見た目二十代で、すらっとしている印象を受ける。細い眉に細い口。何より背が高い。それこそガイモンくらいに。とにかく、すらっとした印象を受けた。隣の女の子が小さいせいかもしれないけど。

「ねえ君、何か飲み物ない？」

チビの方が聞いてきた。

「悪いね、ちょうど切らしてるよ。水道水と生ゴミならあるけど」

「しけてんな」

……クツ、生意気なガキめ。

麦茶が少し残っていた気もするけど、コイツにやるのはもったいない。

ぶつぶつと文句を言っている青髪に対して、金髪すらつとは黙っている。

ここで改めて二人を見ると、この部屋にはその青髪と金髪はいかにも現実離れしていた。特に青髪。この世に生まれて始めて見た。

青髪の子のことを考えていると、不意にさっきのことを思い出した。

さっき、玄関にいたのは確かに秋乃だったんだけど……俺の見間違いか？

「貧乏も楽じゃないってところかね。それはともかく、タマちゃん」

「誰がタマちゃんだっ」

女の子の視線は、あくまで俺に向いている。

名字の『玉石』から取ったんだろうけど、センスの無さが浮き彫りだ。

「まあまあ、落ち着いて。どーどー」

このガキ……

目がつり上がるのを感じ、右手に力が入った。

「いやね、ちょっと話があって来たわけよ、私たちは」

女の子はあぐらをといた。それから椅子に座り直して、足を組んだ。

「残念だけど、お菓子ならやらねえよ」

「ないでしょ、こんな家に」

何も言い返せなかった自分が腹立たしい。

「分かったよ。ちゃんと聞くよ」

はあ、とため息が漏れる。話しの内容がどうであれ、あまり乗り気にはなれない。

まったく、何が嬉しくてこんなガキの――

「こんなガキの言うことを聞きたくないって顔だね」

「うっ」

ギクリとした。その通りだった。

今、俺の考えが読まれたか？

「ふうん、大当たりか。ま、普通の感情だとは思うけど。ガキの話を聞くのが嫌なら、こっちにも考えがある」

「考え……？」

ふと金髪の女性の方を見たけど、その感情のない目で見られていたことに気づいて、視線を逸らした。

考えとは大人の色気みたいなのだろうか。ただ金髪の女性には、間違っても色気はない。胸はぺしゃんこ、妖絶というよりは堅物。クラスに一人はいそうな。残念ながらメガネはかけていない。

この人には、バレーボールをやらせるといいと思う。それくらいすらっとしていた。

「ちょっとタマちゃん、私を見てくれないかな」

「は？」

女の子の言った言葉に、なんだコイツは？ と思った。でも見ない理由があるわけでもないし、自然と目が動く。

見た。けど、特に何もない。空色の髪の毛はそのまま——

「――ッ!？」

違う、そのままじゃない。髪の色は同じだけど、確かに違う!

顔と体のバランスが変わった。雰囲気は全体的に落ち着いて、小さい、と素直に思えなくなった。髪は少しだけ長くなっていた。それになにより、胸のあたりに見える不自然な膨らみが……その……

「あの、どうかされたのですか？」

「へ？」

金髪の女性に聞かれた。女の子の変化に気づいていないのか？

「違うよミラミラ。タマちゃん、私に一目惚れだってさ。この通り、すごく見てくるし」

一目惚れでない。何回か見た。

けど、見つめているのは本当だ。死んでも言わないけど、見とれてしまったのも事実。見た目はかわいい。でも俺が女の子、いや、少女を見ていたのにはもっと違う理由がある。

「君って、そんなに大きかったっけ……？」

口が開いているのに気づいて、急いで閉じた。金髪の女性は、頭に疑問符を浮かべている。

「これでもうガキじゃないから。話、してもいいよね？」

そこにいた青髪でチビの女の子は、同一人物ながら、別人に変わっていた。

青い髪の少女は怪しく笑った。

十話（前書き）

今回は説明文みたいになっています。能力のまあまあ細かい説明を書きました。

……わかりにくいかもです。

十話

「それじゃ、話を聞いてくれるかな？　タマちゃん」

青い髪にフリフリのドレスを着た少女は、俺をさとするように言った。さっきまではガキだったのに、今では同年代の少女に見える。もしかしたら年上かもしれない。

「は、話して……」

俺の中には、困惑と疑問が渦巻いている。

「お前、誰なんだよ……？」

「さあ、誰なんだろうね」

さあ、つて……

少女から目を離せずにいると、その隣に座っている金髪の女性が、青髪の少女に怪訝な目を向けた。

「あの、もしかしてタマちゃんさんに介入されていますか？」

「あゝ、分かっちゃったか。さすがミラミラだね」

二人の会話に、まったくついていけない。金髪の女性は黙ってしまっただけ、青髪の女の子は、金髪の方にぺちやくちやと喋り続けている。

「ということなんだよね、タマちゃん。……と言っても分からないか」

「え……」

何を言ってるんだ。

青髪の少女は腕を組んだ。

「そうだなあ、じゃあまずは……」

少女は首を回して、後ろにある窓を見た。外の景色は、いつの間にか赤に染まっていた。

「ちょっと、あれ見てみ、あれ」

体をひねって、窓の外を指差す。俺は操られるように、その指の先を見た。

……何もない。いつも見ている景色だけど……

「よし、もういいよ」

なんなんだ。もうこっちを見てもいいってことなのか？

「もういいって……なっ！」

少女に視線を戻すと、そこには明らかな違和感——さっきより一回り小さい女の子が座っていた。

身長が縮み、顔は幼い。

「やっぱり驚く？ まあいいや。そんなじゃ、話がそれてく前に、先に自己紹介をしておこうか」

青髪の女の子は組んでいた足を戻し、椅子から立ち上がった。

幼い声、低い身長。でも、何かかなわない雰囲気をもっていた。

「名前はヒミツ。年齢は不明。好きな物はアーモンドチョコ。嫌いなものは赤信号」

趣味はマツタリとすることだ、住所はワカリマセン、と少女は付け足した。

やけに秘密がおおいと感じたが、最後だけは違った。

「そして、ちまたで有名な『第二百五回特異バトルトーナメント』の主催者であります」

ふざけているのか、足を揃えて敬礼をしていた。

「お前が……主催者」

よく分からないけど、トーナメントとは能力を使って戦うことか？
秋乃と小春ちゃんが戦ったように……

横で座っている金髪の女性は、やはり静かである。

「じゃあ、トーナメントの主催者であるお前が、秋乃や小春ちゃんに能力を渡したのか」

「そのとおり。話が早くていいねえ」

合点だ。秋乃のいう女店員とやらもコイツだったのか。それに小春ちゃん達の言っていた旅人もか。青髪の女の子に『変身』の能力があれば不可能ではない。

でも……まだ謎が多い。

「ちょっとまってよ、考えだけ先走っちゃって。何考えてんの？」

「今みたいに変身をして渡したのか？」

「えっ、無視？」

秋乃や小春ちゃんのありえない能力を見たからか、変身なんて小さな能力に疑いはなかった。

「変身……ねえ。違う違う。そんな面倒なこと、するわけないし。ちょっと考えてみてよ。私が変身したとしてら、ここにいるミラミラ気づくはず。でも全然気づいてなかったでしょ？ 注意深くて目が後ろにも付いてるような子なんだから、君が気づくことに気づかないことはないよ。それにほら見てよ、この堅そうな顔……」

「その通りですね。私が堅いのも否定はしませんよ」

金髪の女性が話を中断させた。

少女がミラミラと呼ばれている女性に悪口でも言っているのか……？

「おっと、また話がそれちゃった。短く言うけど、最終的に言いたいことは一つ。……要するに、私は変身をしたんじゃないくて、君の頭の中をいじらせてもらったわけ」

意味を理解するのに十秒かかった。

「そんなことまで出来るのか……」

女店員、旅人。俺の頭の中に、一つの単語が浮かぶ。

「お前って……神なのか？」

特定の物事に特化した人間でもなく、木材から作られるものでもない。神という言葉の定義がよく分からなくなった。

「神……かみ……神様……。いやあ、いい響きなあ……」

対する女の子は両手を頬につけて、顔をうつとりとさせていた。

コイツ、まったく読めない……

「ああ、うん。いいね、神様って。私もなってみたいなあ……」

女の子緩い顔をさらに緩め、隣のミラミラという女性にも絡んだ。

なってみたいな……って言ったか？　神ではないのか？

自分の中に、安心の感情があった。でも、もう一つブルーの感情も感じた。

「じゃあ一体誰なんだ……」

「それはまた今度ね。そんなことより、また話がそれてるし、もう本題に入るよ」

君も早く座りなよ、と女の子は俺を一番古い椅子に勧めた。俺の家だ、とも言えずに、椅子に座った。

女の子はコホン、と小さな咳払いをする。

「それじゃあ、まずはこのトーナメントについて。これは三十二人の出場者で構成されているトーナメントで、秋乃ちゃんはその中の一人ってこと。実はまだ、残りの三人が見つかってないんだけど……とりあえず、勝利おめでとう」

「そりゃどうも」

「あれ、あんまり喜ばれてないかな？　ま、いっか。そうだなあ、まずは能力について説明するね。秋乃にあげたのは巻き戻しの能力。君たちは時間を操るって言ってたけど、半分は違うよね」

俺達が言っていた言葉をどこで聞いていたんだ……？

「能力について説明するから、君は君自身の立場について知っても

らうよ。まず、トーナメントの参加者は能力を受け取り、一人のパートナーを決めることが出来る。君は秋乃ちゃんのパートナーなんだ。だからこそ、いくつか注意事項を伝える。そうだなあ、君はさっきの戦い覚えてる？」

さっきの戦い。……よけたり走ったりで大変だったけど、だいたいはおぼえている。

そういえば、小春ちゃんのパートナーはガイモンだったのか。

「忘れてないならいいや。じゃあ、秋乃ちゃん的能力について説明するよ。最初に、巻き戻しの能力には、大きく分けて三つがあるんだ」

三つ、そんなにあるのか。女の子は淡々と続ける。

「まず一つ目、『座標』を戻す能力。これは今より前にいた場所に戻れることが出来る力。君が火柱から逃げたり、坊主のガイモンが消えたりしたのはこの能力なんだ。あと、秋乃ちゃんがコンビニからこの家まで戻ってきたのもこの能力のおかげだよ。分かるかな？」

分かるけど、かなり危ない。

ようするに、俺が学校まで三十分をかけて行って、能力で三十分の座標を戻せば家に戻ってこれるのか。

今より前にいた場所に戻れるってどこか。

「座標っていうか、場所に関係してるね。じゃあ次」

女の子はまた一つ、コホンと咳払いをする。

「二つ目は、『状態』を戻す能力。これは人や物、空間自体の状態を戻す力。コンクリートが新しくなったり、火柱が消えちゃったのはこれのおかげ。空間自体の状態を戻せば、君のプリンも出てくるよ。それと、君達の相手の怪我也治したね」

能力の説明には、まあ、納得した。地面の『状態』を戻したから、火柱が消えたのか。これを使えば、家や家具が新しく出来るかな。

それにしてもコイツ、どこまで見てるんだよ……

「と、ここで、能力の反動についての説明。これ重要だから、よく聞いといてね」

「へえ、やっぱりあるんだな。反動っていうのか」

能力を使いすぎた小春ちゃんが倒れたのを覚えている。

「まずね、能力にはそれぞれ管轄するところがあるんだ。秋乃ちゃんの能力は時間。城野ちゃんの能力は炎。ここまではいいんだけどね、次は重要。何かの管轄の能力を使うときはね、絶対に他の管轄を犯すことになる。例えば、巻き戻しの能力の中で、座標を戻す能力を使えば、それは『空間』の力に逆らうことになるわけ。分かるかな？」

……なんとか理解出来る。確かに、時間の能力で空間を移動するのは、おかしいかもしれない。

「ほかの力に逆らったら、その反動は自分に来る。とは言っても、

全部の反動が来るわけじゃない。ほとんどは私を通して緩和されるから、君たちの負担は少ないけどね」

「それが本当なら、お前は相当な強いよな」

秋乃が息を切らして、小春ちゃんは倒れた。それは反動のほんの一部なのか……？

「それから、一番大切なことがある。それは、使う能力、能力を使う対象によって反動が大きく変わること。例えば、『座標』を対象に能力を使ったとする。そうしたら『空間』からの反動を受ける。空間って言ったらなんか凄そうに聞こえるけど、以外に負担は小さいよ。人を対象にしても、物を対象にしても、あまり負担が変わらないんだ。言ってみれば、たくさん使える便利な能力、ってところかな」

さっきの戦いを考えても、秋乃はこの能力を使っていてあまり疲れたふうには見えなかったけど。そういえば……

「じゃあ、えっと……『状態』を戻したら、反動はデカくなるのか？」

「その通り、と言いたところだけど、ちょっと違うんだよね。まず、物を対象にした場合は、そのまま『状態』から反動を受ける。だから、あまり反動は大きくない。だけど、生物を対象とした場合は、それと全然違ってくる。その理由としては、『生命』という大きな概念からの反動を受けるからなわけ。思い出してみて、城野ちゃん達を治療した後、秋乃ちゃんはすごく疲れてなかった？」

……そういえばそうだった。あの後秋乃は、百メートルを全力で

走り切ったかのように息を乱していた。

「分かったかな？ 少し前にの怪我を治すくらいならいいけど、一度に何回も使ったり、長い時間を戻すのはやめさせてね」

そこまで言うのと、女の子はさらに力を込めて話した。

「無理をしたら絶対に、ただじゃ済まないからね。それだけ『生命』の概念が強力だってことだから、覚えておいて」

秋乃がただでは済まない場面が思い浮かばないけど、危ないということはよく分かった。

女の子が椅子に体重をかけると、ギィといやな音がする。

「あれ、この椅子危ないね。じゃあ、最後の説明をするよ。なんだから言って、これが一番大事かな」

女の子の目が強くなる。

「三つ目の能力は、『事象』を戻す能力。これは、今までに説明した能力とは全然違う。タマちゃんは覚えてるよね、さっきの戦いの白い光。太陽みたいにまぶしくて、強い光」

ああ、覚えている。よく覚えている。あの時の不思議な光。まぶしいくらいで、目の奥に焼き付いている。

あの時に色々考えたけど、違いはいまいち分からなかった。

女の子の目に、さらに光が宿る。

「これはね、決して使ってはいけない能力。……とは言っても、防ぎようはないんだけどね。一つ聞くけど、君達が最後に火柱を消したとき、その火柱はどこに行ったと思う？」

「確かじゃないけど、過去に飛ばされた……んじゃないかな？」

それだと、二日前に立った巨大な火柱の説明がつく。

「正解！ はなまるをあげるよ」

いや、いらない。

「じゃあもう一つ。それ以外の火柱はどこへ行ったのでしょうか？ 君達が消したのは、最後の火柱だけじゃないよね。たくさん消したよね」

最後に立った巨大な火柱以外の、秋乃が消した小さな火柱のことを言っているのだろうか。

「それは……過去に飛ばされたのか？ いや、違うな。たしか『状態』をもどしたんだから……言葉のとおり、消えたのか」

「ほほう、なかなかやるねえ。君、以外と頭いいんじゃない？」

良くはない。問題には間違いかけたし。

「おっと、話を戻さなきゃ。さて、『事象』を戻す能力の注意点を説明するね。注意点というより、忠告かな。そうだね、まず一つ。事象を戻す能力を使った場合、最低秋乃ちゃんが死ぬよ」

「……はあ！？ 死ぬって、そんなに危険なものなのか!？」

あの白い光にそんな危険があるのか？ いや、思い返しても、あの能力を使った秋乃が苦しんだことはない。あくまで、あの二人を治療したからだ。

「この能力は厄介でね、注意しても難しいんだよね。何が危険かっていうと、『事象』の概念の大きさが一番」

反動が大きいのか？ あまり実感がわからない。

「例えばね、この家が火柱で燃えてしまったとするよ。でも、火柱を作った相手はここにはいなかった。君ならこれをどう考える？」

女の子は机に片肘をついて聞いてきた。

可能性とかは、たくさんありそうで考えるのが面倒だ。でもこの話の流れから考えると……

「かっこよく言うのと、未来からやってきたってのか。秋乃の能力で戻ってきたんだと思う。白い光が光れば、確信ができるな」

「そのとおり。えらいねえ」

こんな小さなガキにいわれると、鼻につく。だけど、コイツの正体はまったく謎だ。

チラと隣の金髪の女性を見たけど、相変わらず無表情だった。

「これで、そのうちに君の家の跡地に火柱が立つことが分かったね。実際には秋乃ちゃんが消すんだけど。ではここで質問。燃えた君の家には、お金、家電、服、エッチな本、プリンがあったとするよ」

途中、聞き捨てならない単語が出てきたけど、そんなものは持っていない。

「不満そうな顔するね。とにかく、家も含めて大切なものがあって、燃えてしまつてとても困るものが無くなってしまった。でもまだ、火柱を立てる人物はやってきていない。さあ、天才の君はどうする！」

どうしてそんなに、俺を持ち上げるのだろうか。それから、さつきから質問されてばかりだなあと思った。

「天才じゃないけどさあ、俺なら家を燃やさないように努力するな。未来予知をしたも同然だし」

俺が当然だと答えると、女の子はこれ wait していたとばかりに怪しい笑みを作った。

「残念。ゲームオーバーだね。秋乃ちゃんが死んじゃったよ」

……何？ どういうことだ？ 馬鹿な俺には分からない。

「これが一番厄介な能力、『事象』を過去に飛ばす能力。今のたとえでいくと、最初に君の家が燃えた瞬間から、火柱が君の家のある場所に立つ『事実』が確定する。もしここで、君が家の跡地に火柱が立つのを防いじゃったら、それは成り立たない。そこに大きな矛盾が生（しょう）じるの。考えてみて。最初の時点で火柱が立つこ

とが確定しているのに、実際の事実では火柱は立たなかった。あら不思議、事実が二つも出来ちゃった」

「……ッ！ それじゃあ、未来からやってきた事象を変えることは出来ないのか？」

「さあ、分からないね。ただ、起こるはずのことが起こらなくて、起こらないはずのことが起こる。この巨大な、間違うはずのない『事象』の矛盾は、能力の使用者に膨大な反動をもたらす。……それこそ、存在がなくなっちゃうくらいに」

「そ、存在……」

ぞっとした。俺が秋乃の能力の効果に早く気づいていたら、今頃どうなっていたか分からない。

このとき初めて、自分が馬鹿で良かったと思った。

「だいたい、私自身がどうなるか分からないしね。今まで誰も使わなかった、いや、使えなかったから、矛盾が生じたらどうなるかは謎のまま。事態がひっくり返って地球崩壊なんて言われたって、シヤレにもならない。ま、さすがにそこまではいかないだろうけど」

地球崩壊とか、よく意味が掴めない。色々な恐怖が、とにかく矛盾を生んではいけないとサイレンを鳴らしていた。

「そこに関しては私も出来るだけ監視するから、君もお願いね」

女の子は座ったまま、小さい体を精一杯に伸ばした。それから大きく息を吐いた。

「あゝ、疲れた。これで能力の説明は全部終わり。ほら、タマちゃん、なんか頂戴」

今までの緊張感が音を立てて崩れた。

「なんもねえよ。っていうか、いきなり雰囲気変えるのもやめてくれよ」

「ええ、私頑張ったじゃん……そっか。この家貧乏だっけ」

無意識に、右手を握り締める。

「柿の種ならありますよ」

別方向から声が聞こえる。見ると、金髪の女性が女の子に顔を向けていた。

なんで柿の種？

「さっすが、ミラミラ。やるねえ」

女の子は親指を立てて、ミラミラなる女性に笑いかけた。手のひらを上に向けて、柿の種を催促をしている。

「どうぞ」

「ありがとー。……」

女の子の手のひらに置かれたものは……種！？

「……いや、ミラミラ。これはこのままじゃ食べられないよね。地面に植えて、お水をあげて、桃栗三年柿八年で、八年経ったらおいしい柿がなりました、じゃないっての！　なんで『柿』の種を渡す！」

「はい。『柿』は名詞で、『の』は接続助詞で、『種』はまた名詞です」

「分かつとるわ！　こんなものをどうやって食べろって言うわけ！？　……あっ」

二人のやりとりを、しばらく呆然と見ていた。そんな俺に女の子は気づいたのか、コホンと咳払いをして、こちらに向き直った。

「失礼。みっともなかったね」

少し子供らしさが垣間見えたけど、どちらかというとな大人な雰囲気がある。大人というか、すべての悟りを開いたような……

「普段はこんなことないんだけど……とにかく、最後の説明をするから。よく聞いてね」

「まだあったのかよ」

そろそろ頭が危ないかも……

「あと少しだね。本当は全部秋乃ちゃんに話したんだけど、全然理解してもらえなかったんだ。だから君に話に来たの。トーナメントのルールで大切なことがあるから。勝負のまず勝ち負けなんだけど、

勝つ条件は次の通り。一、相手の意識、戦意、または命がなくなる
こと」

「ちょっと待てよ。死んだら負けって、そんなに危険な勝負なのか
？」

そんなの、危なすぎるじゃねえかよ。

「まあそうだけど、実際には死者はまだでたことがない。私が頑張
ってるからね。ただ、大けがは保証しないよ」

秋乃が治したけど、実質ガイモンは大けがをした。

「その二、対戦相手が降参、または棄権をすること。以上。それか
ら、君達が戦う場所は外から見えなくしておくから、心置きなく戦
ってね。あとは……そうだ。パートナーについてなんだけど、これ
は一人まで。城野ちゃんのパートナーはガイモンだったし、秋乃ち
ゃんのパートナーは君。パートナー以外の人間には、このトーナメ
ントに関する一切を伝えることを禁止する。っていうのがルール」

なるほど。だから小春ちゃん達は二人で来てたのか。協力者がい
たみたいだけど、あくまでトーナメントのことは話してなかったの
か？

「なあ……。もしもなんだけど、そのことを第三者に話したら、そ
れはどうなるんだ？」

「第三者ねえ……。それはもう、過去二ヶ月分の記憶と一緒に、記
憶を消しちゃうかな」

「過去二ヶ月も……。なんで、そんな無駄なオプシヨンがついてくるんだよ」

「それは、記憶を消す能力が不便極まりないからだよ」

肝心なところで役に立たない。

だけど、少しまずいかも……。秋乃に他の人間には喋るなって言っても、忘れられたら困るし……。早めに釘を刺しておいたほうがいいかな。

なら、これから秋乃の家に行こう。そう考えた時に、何か嫌なのが俺の頭の中をかけた。

さっき、秋乃と別れる直前。たしかアイツが……

——翔、私はもう家に返るぞ。

そう言った気がする。でもそこじゃない。たしか、そのあとに……

——今日は父さんも帰ってくる。

って言ったんだっけ。でもそこじゃ……。ん？ 父さんも帰ってくる？

瞬間、俺は走り出した。

「ああ、タマちゃん。どこ行くの？」

問いには答えない。しかし俺は、女の子の薄い笑いに気づくこと

が出来なかった。

ちくしょう、間に合ってくれよ。まだ話すなよ……！

秋乃がおじさんにトーナメントのこと話しをしたらダメだ。おじさんは第三者だ。二ヶ月分の記憶が消し飛ぶなんて、ふざけんな。

玄関から、靴もはずずに家を飛び出す。地面のデコボコは容赦なく俺の足に食い込み、思わず足を止めたくなる。でも、ここで止まるわけにはいかない。

後ろでドアの閉まる音がした。空はいよいよ暗くなってきた。でも、そんなことは俺の頭をすり抜けるだけだった。

家を出たら、一度道路沿いの歩道に出る。それから体重を倒してすぐに曲がり、秋乃の家に向かう。

隣の家への道のりを、今までで一番長く感じた。

もう一回曲がり、秋乃の家のドアへと走る。

ドアノブに手を伸ばす。インターホンには見向きもしない。

そしていよいよドアノブに手が触れようとした時――ドアが自ら開いた。

強打。手、指、頭。防ぐすべもなく、痛みが駆け巡る。

「うぐっ！」

声の出所がドアの向こう側だと理解するのに、しばらくかかった。まがうことなき、秋乃の声だ。

「ちくしょう、なんでこうなる……！」

気力だけで立ち上がり、勢いよくドアを開ける。目の前には、頭を痛そうに押さえている秋乃がいた。

間に合ったか！？

「とりあえず来てくれ」

「ぬうう……何？ いったい誰だってわああああ！」

まずは安全の確保だ。

重くはない秋乃を両手で抱え、俺の家に走る。

来た道に戻り、俺の家のドアを開けた。

「あれあれ、どうしちゃったのかなあ、二人そろって」

玄関から、ニタニタと笑っている女の子が見えた。気にしない。

俺は抱えている秋乃を床に落とした。ふがつ、という声を出して、秋乃が転がる。

「な、何者だ！ ……翔ではないか。どうしたのだ」

「なあ秋乃！」

秋乃を起こし、両肩に手を乗せる。

「ぬ、な？　いったいどうしたのだ、そんなに慌てて」

「お前、家で変わったことはなかったか？」

「変わったこと……？」

秋乃は思い出すよう顔をして、頷いた。

「ああ、あったぞ」

「なんだ！」

大声を張り上げてしまった。

「なんだって、ドアを開けようとしたら、いきなり戻ってくるものだから、頭を……」

秋乃は頭を手で押さえた。

……よかった。なんとかなったか。

安堵感に包まれて、脱力して椅子に戻ろうとした。

そういえば、秋乃に今聞いたことを話さなければいけないんだっ
た。

「秋乃、お前もこっち来い」

他の二人は……まあいっか。

秋乃が俺の後ろについてきた。そしていかにも普通に話した。

「そうだ、もうひとつあった。さっきな、父さんに今日の出来事を話したんだ。そうしたらな——」

遅かったあああああああ！！

十話（後書き）

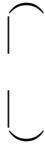
やさきはです。

今回は説明ばかりで、その割にはテンポ早すぎたと思っています。本当は九話でまとめたかったのですが、どうにも長くなってしまいました。

説明が分かりにくいかとは思いますが、分からなくても支障はないです。多分……。

次回から、また少し物語が動きます。

1ポイントでも、評価をもらえれば嬉しいです。

それではm（）m

十一話（前書き）

秋乃ちゃんがやっちゃった、その続きがやっと完成しました。

一話を改稿したり、投稿はしないけど短編を書いたりで、すこしばたバタしてたんですが……遅くなりました。

さて、今回また新たな展開を迎えます。ちなみに、少し長くなってしまったので、話を二つに分けることにしました。

携帯からの投稿なので、章管理が出来ないところ……。もし出来れば、十三話から第二章と入れたいところです。

それでは始まります。

十一話

秋乃のとんでも発言に、俺はフリーズしてしまった。窓の外は赤く、明かりのない部屋の中は妙に暗い。

さっき知った話だ。トーナメントに参加している秋乃は、パートナーを一人選ぶことができる。

パートナーの特権としては、参加者からトーナメントに関する情報を聞けること。しかし逆を言えば、パートナー以外の人間には、トーナメントに関するすべてを話してはいけないとなる。

それで俺は秋乃のパートナーに選ばれた……なってしまったわけだ。が……

「翔、どうした？ 目が死んでいるぞ」

だがしかし、コイツは俺だけでなく自分の父親にまで話してしまった。俺は謎の女の子にトーナメントの説明をされたが、秋乃は何を聞いていたんだ。気づく様子もない。

目の前には、俺を覗く知った顔。殴りたくなる衝動を必死に抑える。そんなことをしている場合じゃない。

秋乃を無視して後ろを振り返った。

青髪の女の子が俺を見ている。秋乃を、かもしれない。

青髪の女の子は、どこか控えめな様子で聞いてきた。

「ちょっと聞くよ秋乃ちゃん。もしかして……お父さんに話しちゃった？」

「ああ、全部話したぞ。」

その言葉は、俺をさらに地獄へと突き落とした。女の子はため息をついて、手のひらを額にあてている。

いったいどうすればいいんだよ……

秋乃の無邪気な顔は、なによりも罪だと思った。

「あちゃー、こりゃヤバイよね。さあ、どうしようか」

「どうしようって、お前凄いだろ？ 何とかしろよ」

「いやあ、残念だけど私はそんな能力持っていないんだよ。あるといえはあるけど……」

女の子は俺の隣の秋乃を見た。

なるほどね。その能力は秋乃に渡してしまったと。さっきの話では、『生命の状態』を戻すとかかなりの反動を受けるらしい。この女の子なら反動にも耐えられるかもしれないけど、能力を使用できるのは秋乃だけ。さすがにキツいか……

しかも、記憶を消すには、その二ヶ月前までの記憶まで消えてしまう。

どうしてこうもうまくいかないんだ……

俺が考えている横で、秋乃は首を傾けていた。

「……？ 翔、この女の子は誰だ？」

この女の子とは、青髪の子のことを言っているのだろう。秋乃には見えないとか、そういう特殊補正はないみたいだ。

秋乃は初対面だったつけ。……あれ？ 秋乃はコンビニで一度会っているんじゃない？ それに、こんな小さな子がバイト？

「……あ、タマちゃん、今の私は店員さんじゃないから。話をややこしくしたくないし、気にしないで」

女の子は俺の視線に気づいたのか、疑問に答えてくれた。

そういえば、変身とかなんとかが出来るんだったか？

一瞬、ミラミラという金髪の女性店員である可能性も考えたけど、そこで頭を切り替えた。今はもっとやる必要があるだろ。

「よかったなあ、こんなにも友達が増えたのか」

秋乃は感心するように頷いた。

お前は俺のなんなんだ。

「そういえば翔、私はなぜここつれてこられたのだ？」

「ちょっと黙っとけ」

秋乃の肩に手を置いて、静止を促す。そして女の子に近くまで歩いた。近くから見ても、なかなか小さい。

「……どうにか、ならないのか？」

ほかには聞こえないくらいの小声で話す。秋乃に話すとややこしくなりそうだったから、後回しにした。

「残念、ルールはルールだから、破ったら罰を受けてもらうよ。記憶を消すっていうのは、いわばサービスだよ。慈善事業なの」

何かがムカついた。でも、今必要な感情じゃない。考えないと……

「じゃあ、その罰の内容を聞かせてくれないか。最低、俺が罰を受ける」

ない頭では、それぐらいしか思いつけない。

だけど、おじさんだけは犠牲に出来ない。おじさんは俺なんかによくしてくれるし、そもそもこれは俺と秋乃の問題だ。それに罰とは言っても、それほど酷いものではないだろう。……多分

しかし女の子は、これ以上ないくらいに嫌な笑みを浮かべて言った。

「聞きたい？ 罰の内容……」

見下げるその顔の陰は警告の色。外面からは掴めない、内側から

の恐怖。

相手はただの女の子ではない。そんなことは分かりきっている。おじさんのためとはいえ、自分が罰を受けるのはやっぱり怖いんだ。

やっぱり、俺は弱い……

自分の顔の筋肉が堅くなったのを感じる。

そんな表情で女の子を見ると、女の子は仮面でも付けたかのように明るくなった。

「ま、もっと平和的な解決方法もあるんだけどね」

甘い甘いエサだった。

「なんだ、教えてくれ！」

俺はすぐに飛びついた。そりゃ、飛びつかない方がおかしい。平和的、なんて魅力的言葉だ。

そんな俺の反応を見てか、女の子は薄く笑った。なんだろう。その瞳に答えを探そうとしたけど、真意は読み取れない。

「あはは、簡単簡単。しかも単純でみんなハッピーになれるよ。偶然かどうか、君にはその資格がある」

女の子はそう言うと、その白くて小さな手を俺に差しのべた。

「君もトーナメントに参加しない？」

甘いエサに手を伸ばすように、俺は女の子の手を取った。

ろくな説明も受けずに握ったその腕は、とてもさわり心地が良かった。

トーナメントへの参加は簡単だった。怪しすぎるほどに。

女の子が俺の胸に手を置いて問いかける。それに「はい」と一度だけ答えた。手順はそれだけで、問われた内容は覚えていない。本当にこれで参加出来るのか？

まだ能力は貰っていない。神聖な儀式か何かが必要なのかもしれない。これが一番の醍醐味だと聞いたけど……

というか、なんで俺が参加するとみんなハッピーなんだ？俺には資格があると言われたけど、それはなんだ？

積もる疑問にはきりがない。俺は考えるのをやめて女の子を見た。

女の子は腕を組んで目をつむり、「うーん」とうなっている。あからさまに悩んでいる表情だ。あからさますぎて、何を考えてるんだよと思わず聞きたくなる。

女の子はパチリと目を開けると、アイスブルーの瞳が自分に向いた。

「まゝいっか。問題ないよね」

独り言か？

女の子ちよいちよいと手招きをすると、そのまま部屋の出口へと歩いていった。

こっちに来いということか。

秋乃にはここで待っていてくれと言って、俺は女の子について行った。

女の子が来たのはこの家の部屋の中で一番北にある俺の部屋だった。

小学校の入学祝いに買ってもらった勉強机に、質素なベット。横には俺の背丈程のクローゼットが置いてある。

女の子は窓の外を眺めていた。――違う。そこにいたのは青髪の少女。身長は俺より少し低く、その後ろ姿はどこか大人びている。

窓から薄く射す赤い夕日が、少女を染めていた。

どこを見ているんだろうか？　ここからだともあまりいい景色は見れないと思うけど……

後ろ姿を見つめていると、少女は振り向いた。

「やっぱりこの年頃の姿が好きなのかなあ……」

相手の本当の姿はよく分からない。だから、その姿に見とれていたのが悔しかった。

直接見ていると何かを悟られそうで、俺は窓の外に視線を移した。

「それとさあ、突然なんだけど、秋乃ちゃんってかわいいよね」

確かに突然だった。

「そうかな……」

出来るだけ自然にと思ったけど、かえって不自然だったかもしれない。

いや、そもそも相手が相手だし隠す意味はないか。そう考えると、少し楽になった。

「私、秋乃ちゃんのこと好きになっちゃった」

「はあ？」

いきなり何を。そう聞きたくなかったけど、たぶん違う意味だ。

「小動物的な、っていうのならわかるけど。そういうヤツ多いし」

そう言うと、少女はなるほどと頷いた。

「ああ、そうかもしれない。あの時はホントに頑張ってたからねえ……。私は試練として熊を送ったんだけど」

聞いた話だ。秋乃がコンビニまで行った時、熊と闘ったと言っていたつけ。そのほかにも色々とか酷い目にあったとか。……そうか、それらは全部コイツのせい――

「熊を送っただけなのに、自転車や車にぶつかったり、なだれや噴火とかに合ったり……ぷっ」

じゃなかったか。

話している少女は途中で吹き出した。キャハハとかヒーヒーと笑っている彼女を、俺は黙ってみていた。

そんなに面白かったのか……？ あとで秋乃に、旅の内容を聞いてみようかな。

少女は笑い疲れて、そのあと息を整えた。笑いすぎて顔が赤い。

「はーあ、疲れた」

「そんなに笑えることだった？」

「うん、面白かったよ。あれはなんて言えばいいんだろう……。かわいい？ かっこいい、じゃなくて……。かわいそうかな？」

なんとなく、全部想像できる。

少女はそのあと「まとめて言えば面白いかな」と付け足した。やっぱり、それが一番しっくりくるな。

「見てて飽きないかもね」

少女は楽しげに笑うと、再び窓の外に視線を移した。それから隣にある古いベットにバスンと座り、何かがきしむ音がした。こういうことは、いちいち気にしないことにしてる。

少女の表情が少しだけ真剣なものに変わった。

忘れていた。俺がここに呼ばれた理由はなんなのか。秋乃に聞かれちゃいけないことなのだろうか。

「じゃあ、説明しようか。イヤなことをね」

いい響きじゃないな。それに、そんなことはもっと前に説明して欲しかった。今更気にはしないけど。

俺は勉強机の椅子に座った。机には薄くホコリがつもっている。それは気にせずに、机に手を置いた。

「一つだけ。トーナメントに負けた時、君がどうなるかを伝えるよ。君っていうより、参加者全員だけど」

「負けたらペナルティー、ってやつか。……それって優勝者以外の全員じゃねえかよ」

「まあね」

少女は軽く言った。

これは覚悟しなきゃいけないかなと思った時、新たな疑問が浮かんだ

そもそもこのトーナメントは何のために？

聞こうとしたけど、その前に少女が人差し指を立てて話し出した。

「ではまず、負けた参加者からはそれぞれ『あるもの』をもらいます」

うちにそんな物はない、とは言えなかった。そんな雰囲気じゃない。

少女は一呼吸置いて、

「それぞれの、一番大切なものをもらいます」

言葉が頭に響いた。

「……………」

一番大切なもの……。俺には想像がつかない。そういうことをあまり考えたことがなかったからかな。今の俺の大切なものってなんなんだ？

考えている俺を見ながら、少女が話し出す。

「城野ちゃんは君達に負けたけど、彼女からもらったものはなんだ

と思う？」

城野ちゃん——小春ちゃんがなくしたものの……。

ハッとした。それと同時に、なにかスッキリしない感情がこみ上げてくる。

小春ちゃんがなくしたものの。予想が正しければ、俺はよく知っている。

「分かったかな？ 正解はガイモン。貰うって言うより、引き離すって感じだけど。それと、君はこの家のドアを開けるのをためらったよね。あれ、正解だよ。私が君の思考回路をちょちよいと、いじってやったんだ。だから気になっただけでも凄い——」

俺は椅子から立ち上がり、少女の肩を掴んだ。

「ことなん、だ……」

少女を思い切り睨みつけた。少し驚いた表情をしているけど、それは違う。楽しんでいるのか、予想通りだったというのか。

「聞いとくけどさ、小春ちゃんの父親が急に変わったのもお前のせいか？」

「まあそうだけどさあ、それは」

肩を握る手に力をいれ、さらに強く睨んだ。

だけど少女の表情は変わらず、ため息をついただけだった。

「君さ、人の話聞こうよ。むしろ感謝してほしいね」

「ふざけんな！ 誰が感謝なんかするか！」

「だから聞いてって。君達が治そうとした犬はね、今日や昨日に病気にかった訳じゃないんだよ！ それこそ一年くらい前」

「だからなんだ……あつ」

そうだ、そうだった。犬は生物で、その時間を戻せば『生命』の概念を侵すことになる。

確かに、あのままだったら危なかったじゃ済まなかったかもしれない。

肩を掴む手から力が抜ける。重力に任せて椅子の上に落ちた。

「正直でいいね」

「うるさいな」

はあ、とため息がもれる。いつもとは違う部屋が静かに、薄い赤に沈んでいる。

無言になったこの部屋。少女は俺に合わせてくれているのだろうか。

一回息を吸い込み、吐き出す。少し気分が落ち着いた。

十一話（後書き）

次の話でやっと一息つけます。……長かった。

それと報告です。こんな小説にも、お気に入り登録してくださった
お方が現れてくれました。感想とか評価とか初めて貰ったのですが、
凄いです。本当に涙が出そうに……

皆さん、お読みいただきありがとうございますm（　　）m

十二話

時間の感覚がなかったけど、まだ外は赤い。

少女はベットに両手をつき、それと足を使って立ち上がった。ベツトに出来たシワは、気にする様子もない。

「さてと、もういいでしょ。タマちゃんに能力をあげる」

「能力か……」

思いついたようにだけど、向こうの部屋に置いてきた秋乃とミラミラさんのことを考えていた。けれど、その思考はどこかへ飛んでいった。

秋乃が使っていたような能力を自分も使えとなると、心が高ぶった。

まだまだそういうことに興味があるんだなと、顔には出さずに笑った。

「残った能力の中で、あげられるは三つ。さっきから考えてたんだけど、記念に選ばせてあげるよ」

「記念って何だよ……。って何!？」

選べるって、どれだけ特別待遇だよ。いいのかな

「ほうほう、嬉しそうだね。それじゃ、早速紹介しま〜す」

少女のノリは、テレビの中の通信販売をやっている人のようだった。

急な話の流れに完全についていけないけど、高ぶる胸は抑えられない。

「まず一つ目、油の能力！」

油、って……弱そうだな。

いや、それだけで判断するのは早い。細かい説明を待つ。……が、

「……あれ、紹介ってそれだけ？」

「ちょっと何言ってるの、それ以上は選んでからの楽しみでしょ」

……だそうだ。

やけにざっくりとした説明だなあ、と思いながらも、俺はいさぎよく次の能力を教えてくださいと頼んだ。

「まったく、ぜいたくだね。まあいいか。じゃあ二つ目。二つ目の能力は……虫！」

「虫、虫……虫？」

俺の頭の中に、黒いうじ虫がうじゃうじゃとあふれるイメージや、虫と会話したり操るイメージが浮かぶ。

虫は嫌いじゃないけど……なんだろう、なにかが違う。

「君、興味なさそうだね……。虫は嫌い？ まったく、近頃の若者は……」

少女は呆れるようにため息をついた。

俺ってそんな興味のなさそうな顔をしてたか？ ってか、お前はジジイかよ！

「結構かわいいのにねえ。ま、いっか。それじゃ、最後の能力を紹介するよ」

……三つは以外と少なかったな。しかもこれまでの流れからいくと、あまり期待できない。

それに、もしかしてでもないけど……

「あのさ、紹介する前に悪いんだけど、俺がもらえる能力って余り物なんじゃない？」

少女の目が泳いだ。

……そうだったのか。

少女は咳払いを一つした。

「……まったく、何を言うんだか。まだ全部聞いてないじゃん。それに、使ってみないと分からないよ」

その通りだけど……

言い返す言葉は見つからず、次の能力の紹介を待った。

「それでは、最後の能力を紹介します。最後の能力は……時！」

確かな気持ちの高ぶり、それ以上の疑問が頭の中を占めた。

いや、響きはいいんだけど、それだと秋乃と被ってるんじゃないかな。大丈夫かな？

「君の疑問に、先に答えちゃおう。これは秋乃ちゃんと同じじゃないからね。ざっくりとしか言っていないからね」

自分で言うなよ。

「……ってことで、以上の三つが能力です。さあどうするタマちゃん」

少女のアイスブルーの瞳が俺を見据える。

やけに急いでいる気もするけど、どの能力にするかはもう決まってる。好き嫌いもあると思うけど、やっぱり一つしかないだろ

「三つ目の『時』で」

「へいまいど！」

少女は気のいい返事をする、はベットのの上に立った。その頭は

天井にぶつかりそうになって、見上げる目はずいぶん高い。

少女の白い手が俺に手招きをした。俺は椅子から立ち上がり、ベットの近くまで歩く。

少女は手を俺の頭に置く。その手に力が入ると、心臓が無条件で高鳴った。

どんな感覚がするんだろう。どんな光が出るんだろう。訪れるはずの異変を待っていた。けど……

「……はい、終わり」

「……あれ、もう終わりなのか？」

頭の上から、手が離れた。

終わったらしいけど、何も感じない。本当に能力を使えるようになったのか、信じがたい所がある。使ってこの家が消えるなんてのは困るけど、騙された気がするくらいに何もなかった。

「えいしゃ、っと」

少女はベットから俺の隣に飛び降りると、そのまま部屋の出口に歩いていった。そして出口まで行くと、こちらに振り向いた。

「なじむのには時間がかかるけど、能力は今からでも使えるよ。向こうでミラミラと秋乃ちゃんが待ってるし、行こうよ」

「あ、ああ」

俺はすたすたと歩いていく少女の背中を追いかけた。

「おまたせ」

少女の陽気な声が部屋に響く。部屋の椅子に座っている秋乃とミラミラさんがこちらを見た。

秋乃はまた塩昆布を口に入れていて、ミラミラさんは特に何もしていないかった。

「翔、何をしていたのだ？ それと、そっちの女の子は……？ さつきより大きくなっていないか？」

そういえば、さつき秋乃が見たのは、小さい方の女の子だったわけ。……あれ？ それは俺の頭の中だけだから……じゃなくて、今がそのはずだから……ん？ もう何がなんだか……

「あのさ、秋乃の頭の中にも介入してんの？」

少女の耳の近くで、少女にだけ聞こえるように言った。

「いや、人がたくさんいる時はそういうことしないんだ。紛らわしくなるし、こっそりと変身したよ。でもでも、そんなことより……」

少女の目がきらめいた。

そして少女は秋乃に向かって走り出した。そしてその胸にダイブ。

……そういや、好きになったって言ってたな。しかし、これはさすがにやりすぎだろ。

「秋乃ちゃん、だいすきだよおお」

「ぬう、なぜこんなにも近づくのだ。離れてはくれないか。いや、それにしても……子供の成長は早いものだな」

「え、成長？」

辺りに沈黙が訪れる。

……違うだろ。人間がそこまで一気に成長するわけないって。ま
ずは「お姉さまですか？」から始まるだろ。

黙っていた少女は、ついに吹き出した。

「ダメだ、やっぱり秋乃ちゃんは最高だよ！」

秋乃を抱きしめるその手に、さらに力がこもったように見えた。

「ぐぬう。く、苦しい……」

おいおい、さすがにやりすぎじゃあ……

「むう、たまらないよ」

顔をスリスリとしている少女に、呆れてため息が出る。俺は二人に近づいた。

「なあ、いい加減に離してやってくれよ……。いつか死ぬぞ」

秋乃に抱きつく少女の肩に、ポンと手を置く。振り向いた少女は、あからさまに不機嫌な顔をしていた。

「愛があるなら、相手のことを考えるといいと思うんだけど」

「これは恋だから！」

そうですか……

恋だとは言ったけど、少女は渋々秋乃から離れた。少女はそのままミラミラの近くまで歩くと、こちらに顔を向けた。

「いつまでもここにいる訳にはいかないし、あと一人も見つけないといけないし。私達は行くよ。それじゃあタマちゃん、秋乃ちゃんをよろしくね。実を言うと、城野ちゃんの火柱の力も優勝候補の凄い能力だったんだよ。でも、それ以上に巻き戻しの能力は凄い。それと参加者同士の協力は自由だから、ちゃんと見守って上げてね」

「ああ、分かった」

そう言うと、少女は柔らかな笑顔を見せた。その笑顔から、色々なものが伝わってくるようだった。

……これから始まるのか、トーナメント。大切なものは見つから

ないけど、勝ち進める気がしない。

……ヤバイ、忘れてた

「待った、忘れてた！ 俺の能力の説明をしてくれ！」

「君の？」

部屋から出かけた少女が、思い出したように頷いた。

「あゝ、そういやそうだったね。さっぱり忘れてた。そうだね、前置きとか面倒だしさっそく説明するよ」

危なかった。説明なしで闘うのはキツかったかもしれない。長くなりそうだけど、まあ仕方ない。

少女はその場所に立ったまま話し始めた。

「まず一つあるんだけど……あ、ちょっと待って。タマちゃん、今って何時だったけ？」

「え？ 六時二十二分かな」

「あ、じゃあ今から十秒数えてね」

少女は上を向いて手を組み、祈るように目を閉じた。

……十秒。

別に何もなかった。

てんだよ！」

「ま、頑張ってね」

その明るさは悪魔かつ！

俺は少女のもとへと走る。

「ふざけんな！ 頼むから能力変えてくれ。虫、そうだ虫がいい、虫が。頼む、虫に変えてくれええええ！」

勢いを殺さず、少女に飛び込む。本当にこれだけは嫌だから！

「むしむし言って飛び込んで来るな！」

ヒラリとかわされ、俺は頭からドアに突撃した。全身の骨を衝撃が駆け巡る。体中がしびれるように痛む。

激しく痛む頭を手で抑えながら振り返ると、そこに少女はいなかった。……少女のツツコミを、初めて聞いた気がした。

部屋の中には呆然と俺を見つめる秋乃と、静かに座っているミラミラさんが残った。

まだだ。まだ、希望は捨てない。

ミラミラさんの所まで歩いて、控えめに頼みこむ。

「あの、ミラミラさん。よかったら、あなたのお連れ様を呼んで頂きたいのですが……」

ここまで丁寧な敬語表現を使うときが来るとは。国語の授業に感謝である。

しかしミラミラさんは冷たい目つきで俺を見据えて、

「ミラミラって誰ですか？」

冷たく言い放った。

あれ？ 今俺、見捨てられた？

ミラミラさんは立ち上がると、窓の方に向かった。背が高く、天井にぶつかりそうだ。そして窓を開けて、ベランダに出た。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。これだけの能力って、俺に負けろって言ってるんですか？」

しばしの無言。

無視しないでくださいよ、そういいかけたけど、ミラミラさんが言葉を遮った。

「可能性くらい、自分で探してください」

ミラミラさんは凜々しい声で言うと、赤い空へと飛んでいった。跳んだ、ではなく飛んだ。羽はないけど、あたかも羽があるかのよう

うに飛んでいった。

二つに束ねられた、赤みがかった長い金色の髪がなびいている。その姿は、夕焼けとは反対側の暗い空に消えていった。

「……………」

足から力が抜けて、膝から崩れ落ちた。

窓から弱い風が入ってくる。それが身体を冷やし、同時に自分の中が虚ろになった気がした。

寂しい夕日が、水平線のかなたに沈んでいった。

十二話（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。ついに一段落です。

次に閑話を一つ入れて、晴れて（勝手に）第二章です。

ふう、長かった……。これだけ小説を書いてきたんですけど、最初の頃より明らかに執筆スピードが上がりました。これは進化ですね、本当に。

さて、これからも頑張ります！

閑話 長い一日の終わり（前書き）

今日で3月も終わりです……

今回はの話は十三話といれてもよかったのですが、締めるならこの方がいいかなと思ひましてのことです。

閑話 長い一日の終わり

窓の外はすっかり暗くなったってしまった。

様々な家具家電が置かれた壁の白い部屋は、いつになく賑やかだ。窓の外には夕焼けなど見る影もない。部屋のあかりを消せば、星が見えそうだ。

「ははははははは」

テレビのついた部屋に、二つの笑い声がしている。ニュースのお姉さんの声がまったく聞こえないほどにうるさい。

この笑い声は決して俺のものではない。能力の説明を受けて、落胆して、力が抜けて、現実逃避をしているわけではない。俺は始終黙っていた。

にぎやかなのはいいけど……はあ、さすがに笑ってられないな。

目の前のありがたい食料にも、なかなか手が伸びない。

「どうした翔、食わんのか？」

「そうだよ翔君。食べないとビタミンが不足するよ。高校でも習っているだろう？ 消化吸収のメカニズムを」

「は、はい。食べます……」

俺は湯気の立っている白米に箸を伸ばす。隣の白身魚をおかずと

して食べるお米はおいしい、凄く。でもさっきの出来事を考えると、胃がきゅゅと縮んでいくようだった。

今日二回目の秋乃の家。正しく言えばおじさんの家。

俺の家の悲惨な食料事情から、今日はこの家でありがたいご飯をいただいている。なかばこの二人に引きずられるようにして連れてこられたけど、ありがたいものはありがたい。

どちらにせよ、食べないと明日が持たない。明日の朝食と弁当が無いからな……。

……食べようか。

味噌汁を飲み、ポテトサラダを食べる。

「やっぱり若者は食べなければな。遠慮しないでいいぞ」

「はい、ありがとうございます」

本当は俺の理性の八割が遠慮しろと言ってくるのだけど、本能と残った理性に押され気味である。

……明日セール品を買いに行こう。

こう考えて、八割の理性を納得させた。家には貯金箱があったはずだ。

「そうなのだ。それでだな父さん、こう、赤いものがドーンとなったのだ」

「ほう、それは凄いな。それは熱かったのか？」

「ああ、暑かった。それが何本もたったのだ」

「ふむ、それは大変だったなあ。それで、それは大きかったのか？」

「凄く大きかったぞ。私五人でやっと抱えられるぐらいだ。まあ、実際にはやっていないが……」

「ははははは。それを実際にやったら、今頃ここにいなかったかもしれない」

「……それもそうか」

「ははははは」

「なはははは」

もう一度、笑い声が部屋中に広がる。

この会話を文面で見ると、どちらが何を話しているのか分かりにくそうだな、とよく思う。

何度も言うけど、俺は笑っていない。てか笑えないからさ……

秋乃の父親であり、名義上の俺の保護者であるおじさん。どこかで何かを研究しているらしく、まあまあ偉い人らしい。勿論、頭も

いい。

秋乃と親子だというのはなほだ疑わしく感じるけど、納得するには秋乃の母親を見るのが一番だ。口調は違うけど、中身は似通っている。まあ、秋乃より常識はあるけど。

ところで秋乃の父親、平斗さんはもともと一人でこの家に住んでいた。単身赴任というヤツか。

ところが秋乃の母方の仕事が忙しくなり、当時まだ幼かった秋乃はこの家に引っ越すことになった。理由としては、おじさんの仕事は今ほど忙しくなく、この家の方が色々と便利が多かったかららしい。

単身赴任の関係が、夫婦で逆転したわけだ。

おじさんの仕事が忙しくなり始めた頃には秋乃は随分と大きくなっていて、わざわざ向こうに戻る必要もなくなった。

というのがこの二人の今まで。

いやとにかく、今でも昔でも、俺はおじさんにお世話になりっぱなしだ。

今日みたいにご馳走になったり、食事に連れて行ってもらったりした。ひと昔なら動物園とか水族館、ある時は旅行にも連れて行ってもらった。本当に頭が上がらない。

実は今でも、金銭面でも少し手伝ってもらっている。これちょっと恥ずかしい。いや、ちょっとどころじゃない。いつか絶対に返す

と誓って、かろうじて受け取っているけど……

「ごちそうさまでした」

いつもより食が進まなかったけれど、なんとか完食した。おいしくないことは、ぜんぜんない。

「おお、食べ終わったか。今日は少し手抜きだったけど、大丈夫だったか？」

「あ、いえ、おいしかったです」

手抜きだったんだ……。全然分らないんですけど。

秋乃は先に食べ終わって、とっくに風呂に行った。秋乃はおじさんに、食事中ずっと今日の出来事を話していた。

能力を受け取って、小春ちゃんと闘って、ガイモンがいなくなった、帰ってきて、女の子が現れて、最後には俺まで能力をもらった。

俺はその会話をぼんやりと聞いていた。ただ、秋乃が第三者であったおじさんにトーナメントについて話したこと。これは説明しなかった。知らなかった、が正解だけど、俺としてもここは嬉しかった。こういうことで気を使わせたくない。

俺は食器を大きいものから重ねて、綺麗な台所で洗って片づけた。

洗い終わった頃、秋乃が風呂から出てきた。上下青いチェックのパジャマ姿で、お茶を片手に立っていた。髪は濡れていて、体からほんの少し湯気がたっている。

秋乃からテレビに目を移す。芸能人にタライが落とされるなんて古典的なギャグをやっていたけど、あまり興味がなかった。そのあと二人から風呂を勧められ、俺はお言葉に甘えることにした。

服はたたんでドアの前においておく。風呂に入ると、暖かく湿った空気が体に張り付く。

壁に張り付けてある鏡は曇っていて、自分の姿は見えない。

多分、昨日と同じ俺が写るんだろうな……

そんなことどうでもいいか、と頭からシャワーをかぶった。

やっぱり、温かい湯船につかるのは気持ちよかった。

さすがに着替えまで用意してもらうのは悪かったし、さっきまで着ていた服を着ることにした。濡れた頭をタオルでワシワシヤと拭く。

リビングにでると、秋乃とおじさんはテレビを見ていた。おじさ

んは椅子に、秋乃はソファに座っていた。テレビには『今日から使える便利・簡単料理術』という番組がやっている。

なになに、カレーにフカヒレ？ コイツらふざけてんの？ ……
なんだ、嘘か。

実際にはカレーにコーヒーらしい。うまいのかな？

「ああ、翔君。着替えを貸そうか？」

俺に気づいたおじさんが、体の向きを変えて声をかけてくれた。

「大丈夫です。あ、お風呂ありがとうございました」

「いやいや、気にしないでくれ。それに、そんなに気を使わなくてもいいぞ。そうさ、私のことは今日からパパと呼んでもらっても構わないぞ」

「いえ、遠慮しておきます……」

なんでパパなんですか……？

ここで話を聞いていたのか、今度は秋乃がこちらを見た。

「翔、今日から私のことはママと呼んでいいぞ」

いやだから、お前は俺のなんなんだよ……。ってか、なんでママ？

「いや、それもやめとくよ……。それはともかく、俺はもう帰ります。明日の準備ともありますし」

明日は早くなるだろうし。予習とか、完全に忘れてた。

特に持ってきたものもない。首にかけていたタオルをもとに戻す。

「ああ、分かった。それじゃあ、困った時は遠慮せずに言ってくれ。秋乃にもな」

「はい、ありがとうございます。おじさんも明日から頑張ってください」

おじさんの返事を聞いてから、テレビを見ている秋乃を横目に玄関へ向かった。

家に戻った俺は、着替えもせずにベッドに入った。電気はつけないから、ほとんど真っ暗だった。

予習は……この際いいや。……畜生、今週はと思ったのに。

まあいつものことか、と鼻で笑った。

明日は早く起きなきゃいけない。俺は目覚ましをいつもより早くセットした。

布団をかぶって、暗闇に溶けるように目をつむる。そうしながら、さっきのことを考えていた。

女店員に男の旅人。そして青い髪の少女。みんな同一人物らしいけど。俺が能力をもらったのがたまたま青髪の少女だったというだけで、本当の姿がどれなのかは分からない。

そしてさっきから考えていたこと。能力をもらう資格とはなんだ。秋乃にあって、俺にあって、でもおじさんにはないものって一体……。小春ちゃんも含めた俺達の共通点は……子供の心？ それもあるかもしれない。そもそも、それ以外に見つからない。

でも子供どうしを闘わせて、あの少女にメリットがあるのだろうか？ ……まあ、俺の知ることじゃないか。

それから、なんで俺がトーナメントに参加することになったのか。理由は分かり切っている。秋乃がおじさんにその話をしたから、俺がやむを得ず参加することになったんだ。

でも、あの少女の反応は……少し変だ。

この部屋で俺に能力を渡してから、秋乃とミラミラさんのいる部屋に戻った。その時少女は、やっときたと言わんばかりに秋乃に飛びついた。

でも……最初に秋乃を見た時は、そんな素振りは一切見せなかった。秋乃を見て呆れたりもしていたし。

——演技。

そんな言葉が頭を横切る。

でも、だとしたら、最初から俺をトーナメントに参加させるつもりだったのか？ ……予想ではあるけど、妙にリアリティがある。

トーナメントのメンバーを集めるのは、俺を使わなければいけない程に大変のか？

そういえば少女は、五日間であと一人だとか言っていた。能力はあと二つだからあと一つはあまるのだろうか？ ……なら俺の変えてくれてもいいじゃないか……

どうでもいいか。スパッと負けてスパッと大切なものをなくして、それで終わりにしよう。……いや、大切なものがプリンかもしれないからダメだ。

はあ、とため息を一つ。結局何も分からない。

分からなくなって、頭の中が暗くなっていく。

そういえば、青髪の少女のツツコミを、俺は二回見たことがあるなあ……

そんなどうでもいいことを考えて、そのあとのことは覚えていない。

長い一日が終わる……

閑話 長い一日の終わり（後書き）

読了、感謝いたします。

……そうですね。サブタイトルって、やっぱりいいですね。格好いいです。……え？ ナルシスト？ いいえ、Romanticistです。あんまり変わらないじゃないかと言った人、ロマンは大切ですよ。

はい、こちらはやさきはでございます。

やっと終わった（勝手に）第一章。キリがついたところで、どうか感想や評価の方を、こう、記念という形で……ウソです。記念というより希念です。

……はい、分かりにくいですね。

それから誤字・矛盾等ありましたら、レビューの方から大胆にこっそり教えていただけると幸いです。

そして、評価の方をお願いしますm（　　）m

十三話（前書き）

お久しぶりです。随分と更新が遅れました。

理由を申しますと……四月に入ってからテスト勉強、春休み課題など。さらに頭痛が酷かったり、学年が上がって予習の量が半端でなく……

とまあ、僕の執筆スピードが遅いのが一番の問題点なので。

そんな中でなんとか書いた小説ですけど、取り合えずは日常？
っ
ぽいお話になります。

十三話

雲に隠れていた太陽が顔を出す。

いい天気だな……

暖かい光と、かすかな風を感じる。夏が近すぎ、歩いていると暑いくらいだ。綺麗な夕日が見えると次の日は晴れるというけれど、けっこう当たっているかもしれない。

今の俺の服装は、黒い服に黒いズボン、黒い靴に紺色のカバン。手にはビニール袋を持っている。そんな格好をして、現在進行形で歩いている。

平たく言えば登校中だ。

高校は歩いていける距離にあって、なぜか自転車は使えない。歩くのは嫌いじゃないし、バスや電車を使わないで登校出来るのは凄いいことだ。主に家計に。

その家計を考えれば高校なんて行かずに働いていればよかったのだけど、特にこれといった夢もないから就職の道は捨てた。おじさんに色々と話を聞いたこともあった。

まあ、昔の話だ。

周りを見れば大きな集合住宅。太陽に照らされていて、白くまぶしい。アスファルトの道路の端には緑の雑草がはえていて、等間隔に植えられている木々が枝と葉を揺らしている。

今日は少し寄り道をして、いつもとは違う道を歩いている。こういうのも、なかなか新鮮だ。

歩くたびに、持っているビニール袋がシャカシャカと鳴る。そのビニール袋に目を落とすと、今朝の出来事を思い出す。

悲しみにつつまれた貯金箱……

今朝、俺は貯金箱を開けた。だが、貯金箱の中身は全部合わせても五百二円しかなかった。そのくせ、ゼロになった悲しみは大きい。

勿論、ハンマーで叩いてお金を取り出すタイプではない。箱の底についているふたを外せば、そこからお金が取り出せるタイプだ。一度しか使えない貯金箱なんで使ってられるか。

ふう、と息を吐き出す。高校の校舎が見えてきた。いつもと違う道を通ってきたけど、入る門は同じだった。

俺は高校の門をぐり、昇降口へ。階段を上って、それから『2-2』とかかれた教室に入った。

「おはよう玉石」

声をかけてきたのは、クラスの女子。元氣と陽氣が取り柄らしい。

この俺に、女子が話しかけてきた！

……しかし、なにも期待はしない。分かっている、何が聞きたいかくらい。

「ねえねえ、今日は秋乃ちゃんと一緒にじゃなかったの？」

やっぱりこれか。まったく、お前の頭の中は秋乃を中心に回ってるのかよ。

秋乃も、この高校にかよっている。家が隣同士で学校がおなじ。いつも一緒に登校しているけど今日は……といったところだ。

「いや、今日は別。ちよつと用があつたからさ」

手に持っているビニール袋を顔の高さまで持ち上げる。すると女子生徒は納得したように頷いた。

「なるほど。貧乏神が買い物。……そうだね、秋乃ちゃんが無事で何より」

そんな心配かよ……。秋乃は……無事ではなかったけど、命はある。ついでに俺も。

昨日の出来事が頭に浮かんだけど、すぐに考えるのをやめた。

女子生徒は秋乃の安否を確認したからか、女子のグループへ戻っていった。

さて、何をしようか……

予習はいいや、面倒だ。宿題もいいや、間に合わない。じゃあ、食べそこねた朝飯を食おうか。

そんな結論に至った時だった。サラサラの黒髪を肩下まで伸ばした女子生徒が、教室に入ってきた。紛れもない、白水川（しらみかわ）秋乃だ。制服を着たからか、昨日より落ち着いた印象を受ける。

秋乃の席は俺の二つ前の一つ横。秋乃はカバンを机に置くと、俺の机まで歩いてきた。

「翔、今日はどうしたのだ。やけに早く家を出たじゃないか」

「ちょっと買い物だよ。朝飯もないし、購買で買うと高いから。昼の分も、質より量で選んできた」

「ふむ、そうか。それで今日はチャイムを三十回連続で押しても出なかったのか」

いや、連続で押しても意味ないって。

それはさておき、秋乃には釘を刺しておかなければならない。

「いいか秋乃。昨日のことは誰にも話すなよ。今度は俺達だけの犠牲じゃ済まないぞ。分かってるな」

「ああ、分かっている。昨日はすまなかったな」

「まあいいって」

俺も心が広いなあ。簡単に許すとは。

それに秋乃には昨日ちゃんと言っておいたし、さすがに堂々と話すことはないだろう。用心するに越したことはないけど。

今は……八時十一分。

適当に思い浮かべた時刻だったけど、時計を見るとピッタリ合っていた。ちなみに秒針までピッタリだ。

……役に立たねえ

デジタルにアナログ、時計のある現代においては、ほとんど役に立たない。げんなりしながらも、始まるまであと四分あると机に突っ伏す。

はあ、とため息をついた所に、今度は誰かが走り寄ってくるような足音がする。学校内で走るな。

顔を上げると、秋乃の後ろから人が走ってくる。さっきの女子だ。意味の分からない雄叫びを上げながら、腕を思い切り振っている。

秋乃は気づく様子もない。

女子生徒は秋乃から離れた所から跳躍し、秋乃にダイブ。

「待ってたよ秋乃ちゃん！」

「ふいあ！」

後ろから秋乃に抱きついた。

出た。女子生徒Aのジャンピング体当たり首締めツイスト。

「秋乃ちゃん、元気だった？ 怪我してない？ ご飯食べた？ 味噌汁の中身は豆腐といたけだった？ お風呂入った？ 今日は何時間寝てどんな夢を見た？ 休みの間に髪の毛は何本抜けた？」

さっそく質問の嵐だな。所々、本人にも回答不可能な質問もあるし。

「うう、とりあえず離してくれ……」

「イヤだ。っていうか秋乃ちゃんの髪の毛サラサラだね。どうしたらこうなるの？ ……あれ、手のひらに切り傷。どうかしたの？ はっ。玉石、まさかあんた、秋乃ちゃんに……」

「何もしてないから。てか、そのくだらない妄想をやめろ」

「どこがくだらないのよ……」

あ、いや、どっちでもいいから、その冷たい視線をどうにかしてくれよ……

どうせ秋乃の怪我って、鳥の糞をよけて転んだとか、車をよけて転んだとかだろ。よける時点で常識外れだけど、気にしない気にしない。

秋乃は首に回された手を邪魔そうに掴んでいる。しかし、女子生徒Aはまったく気にしていない。なんて自己中さだろう。

「愛があるなら、相手を大切にしろよ」

「これは恋なのよ！」

そうですか。

そう言われると特に言うこともなくなる。俺はそういう、女同士とか男同士のとか軽蔑はしないし。奨励もしないけど。

にしても、なんかどっかで聞いたやりとりだな。

ふと浮かんだ青髪を、頭の外に追いやった。

それから机の横にかけてあるビニール袋から、さらに袋を取り出す。中身は、五プラス一本で百円のスティックパン。つまり、六本で百円のスティックパン。

さて食べようかと顔を上げると、秋乃の周りに数人の男女が集まっていた。

「元気してた？」 「それ転んじやったの？」 「連休中に何かあったの？」 「ああ、色々あったぞ」

飛び交う言葉の嵐。人気者も辛そうだ。

俺には……明るい日陰、くらいがちょうどいいかもしれない。

……あれ、さっきの話の中に秋乃の声があったような……

「この間は熊と闘ってな」

「ああ、熊ねー。うんうん、よくあるよね。……へ？」

「ああ、火柱と闘って、時空を越えたのだ」

「火柱、時空、熊……秋乃ちゃん、それ本当？」

「全部ほん「待てえい！」ふぶっ」

椅子から飛び上がり、秋乃の口をふさいだ。

あ、危なかった。これだけは言わせちゃいけないよ。

秋乃は俺の手の中で「うー」やら「ぶー」やらうなっている。秋乃の手は俺の手を引き剥がそうと必死だ。振動と吐息で俺の手のひらがくすぐったくなるけど、これ以上のことを言わせないために、さらに強く抑える。

「いいか、絶対に確実に百パーセント誰にも話すんじゃねえぞ」

秋乃の耳元で、ほかには聞こえないくらいの声で囁く。むぐ、と秋乃が首を縦にふるのを感じると、その手を離した。

秋乃は息が出来ていなかったらしく、息をがぶ飲みするように吸い込んでいた。

……なんとかなったか。もし秋乃が誰かに言っていたら、それがクラス中に広まったら……。生徒の大半が過去二ヶ月の記憶を失っただなんて、洒落にならない。

秋乃へのいましめのため、足の小指を踏んでやった。

「ふう、よかったよかった。……あれ？　どうしたのみんな、そんな冷たい顔して」

「どういことだ？　いいことをした筈なのに、どうしてそんな絶對零度の視線を俺に向けるんだ。」

「ヤツらの顔は生きた人間の顔をしていない。鬼だ、悪魔だ。まるで世界で一番汚れたものでも見るように、俺を見ている。」

「いや、あの……そんな目で見るなって」

「ヤツらは顔の筋肉をピクリとも動かさない。」

「玉石、翔さん」

「なんでフルネーム!？」

「秋乃ちゃんに熊だの火星だの吹き込んだのは……アンタ？」

「そんな、私達の秋乃ちゃんにお前なに電波的なこと教えてんだよ、みたいな目で見るな！」

「しかし、だからといってここで否定できないじゃないか。集団記憶喪失なんて事件が起きてしまったなんて笑えない。冗談でなく。」

「……しかたない。ここは俺の身一つで……」

「そうだ。すべて俺が教えたことだ。熊も火柱も何もかも」

「ああ、そうだ。全部俺がやったことだ。」

「なんだか取り調べをされてるみたいだ。俺は自白をした容疑者と
いった所だろうか。」

「……いや、違う。自白なんてものじゃない。自白をしたなら相手
はニコツと笑って、黙ってカツ丼を差し出してくれるはずだ。」

「だけどヤツらは違った。ニコニコとした明るい笑顔を張り付けて、
その仮面の下はどす黒くそまっている。心臓を掴まれるような恐怖
の笑顔。全身に寒気が走った。」

「あ、やっぱりウソ……」

「ごめん。私達、耳が聞こえなくなっちゃってね」

「聞こえてんじゃねえか！」

「そんなことを声に出来るはずもなく、俺はただ近づいてくるヤツ
らに怯えることしか出来なかった。」

「一步、また一步と歩み寄るヤツらは、全員クローンのように統一
された笑顔で、殺す殺すと言っているようだ。」

「そして俺がヤツら射程圏に入るくらいまで、ヤツらが近づいた時
だった。」

「キーンコーンカーンコーン。」

無機質なチャイムが鳴り響く。

普段は生徒を縛る音だけど、今は千年の拘束から解放された気分になる音だった。

他の生徒が席へと戻り、中年の教師が教室に入ってきた。ヤツらの動きがピタリと止まる。

「チッ」

舌を打つ音が聞こえた。やっぱり、俺を抹殺する予定だったのだろうか。ヤツらは諦めたように自分の席に戻っていった。

た、助かった……。

固まっていた筋肉が一気にほぐれ、机に顔をつけた。

もしかすると、昨日より命の危険を感じたかもしれない。

正義の味方も楽じゃないなあ……。正しいことをしている筈なのだけど。

「それじゃ始めるぞ」

中年教師のだるい声がして、起立、と誰かの号令が続いた。

「――になるから、これで角ABDが三角比で表せるようになります。ここで三平方の定理を使って――」

若い細身の教師が、チョークで黒板を叩く。三角形の上に三角形が重なったり、ルートナンチャとかいう数字や、サインシートとか、まるで暗号のような文字が羅列している。あいにく、俺は暗号の解読は専門外だ。

退屈な授業を聞いていても、内容はさっぱり分からない。絶対意味なんてない。三角比の定理だっけ？

っていうか、なんで文系の俺が数学なんてやらなきゃいけないんだよ。将来役に立つの？

とりあえずノートには写したけど、解読できなければ意味がない。だからこれ以上は書かないつもりだ。

時刻は二時五十三分。今は六限目の数学の時間。大嫌いな教科だけど、これが最後の授業だという事実だけが元気をくれる。

若い教師が言っていることは、俺の理解点を遥かに越えている。少し早いけど、授業から離脱しよう。

そして思い出されるさっきの出来事。俺はヤツらが怒っていたのは秋乃に電波的なことを教えたからだと思っていた。実際は違うけど、気にしても意味はない。

しかし違った。ヤツらがなぜ怒っていたのか。曰わく、「秋乃ちゃん素が一番なんだから、無駄なこと吹き込むな！」だそうだ。

ようするに、俺が教えたんじゃ意味がないと。俺が思っていたものとヤツらの怒りとは、方向性が微妙に違ったのだ。

……ヤツらは秋乃をどう見ているんだろうか。名前の通り、天然記念物だと俺は考えているけど。

まあどうでもいいや。

考えることがなくなって、また黒板に目を戻す。いつの間にか図形が増えていて、到底追いつけそうにない。よく見ると図形は平面ではなく立体で、補助線だらけになっていた。

この高校は学力でいうところの中の下か下の上あたりだ。決して頭がいい連中が集まったわけではないのに、誰がこんな授業を理解するところなのか。ましてや文系ばかり。

周りを見ると、ドリームなワールドにゴーしてしまっている生徒も目立つ。教師は気にしてないのか、気づかないのか。でも、そんな教師の態度も、今は都合がいい。

時刻は……二時五十八分。三時まであと二分。いちいち能力を使わずとも、時計を見ればわかることだ。……本当に役に立たない能力だな。

さて、今日もこの時間だ。三時のおやつ、プリンを食べる時間になった。

学校？ ナニソレ。

授業中？ 知らんし。

規則？ 消えてなくなれ。

勉強と違って、プッチンプリンは裏切らないからな。

今日の朝、食料の買い物をした時、しっかりと買っておいた。三つで百円、いつも通りのヤツだ。

机の上に教科書を開きながら立てて、教師にバレないようにする。左右の席の二人は夢の中にいるらしく、リアクションに気を配る必要もなさそうだ。

机の横に置いてある通学カバンのチャックをそつと開ける。中身の一番上はビニール袋で、プリンはその中に入っている。淡々と説明を続ける教師に警戒をしながら、音を立てないようにそつと手を入れる。

まあビニール袋にさわってワシヤワシヤと音がしないわけないけど、それくらいならあの教師には届かないだろう。

プリンを取り出して、持参のプラスチックのスプーンを用意する。

教科書の陰にプリンを置いて、次は小皿を取り出す。プッチンをしなければならぬ。

……三十秒前。

相変わらずつまらない授業が進んでいるけど、俺と平行に進んでいるだけだ。交わりたくななんてない。キモチワルイ。

さて、とプリンに目をやる。教科書は不安定だけど、倒れることはなさそうだ。

そして教師の声を聞き流すうちに、時計の針が九十度になった。

——三時だ。

俺はプッチンプリンを開封して、小皿にプッチンをする。ツルツルとしたプリンは光を反射している。

スプーンを手にとって、口に一口、二口——

——……………。

風を斬る音が、耳元を通り過ぎる。ついで後ろの方で何かが碎ける音がした。気づくと、プリンは半分程まで減っていた。

後ろを見ると、青い顔をした生徒B。後ろの壁が一部白くなっていた。

……なにが起こった？

視線を前に向けると、若い教師が腕をふるふると震わせていた。

「玉石……お前いい加減プリン食うのやめろやああ！」

どこの方便かは知らないけど、なんとなく迫力があつた。

ていうか俺のことを言っていたのか。さっきのはチョークでも投げてきたのかな。

「ほら、そのプリン出せ」

怒りの表情のまま、こちらに歩いてくる。

俺もさすがに危ないと思ったから、プリンを隠している教科書をどけた。

——そして残ったプリンを丸ごと口に入れた。

「うっ……。食いやがった」

ゴクリと飲み込む。こういうのはポリシーじゃないけど、まあ仕方ない。

「ふう。ごちそうさま」

食べ終わった。使った小皿とプリンのカップはカバンの中のビニール袋に入れた。チャックを閉める。

「失礼しました。どうぞ、つまらない授業を再会してください」

「ざけんな！ 何がつまらない授業だ！」

おっと、しまった。怒らせちゃったよ。

若い教師はもう一度怒鳴ろうと息を吸い込んだけど、それを呑み込むようにしてこらえた。それから体を動かさずに深呼吸。

心の中で落ち着け落ち着けとでも、呪文のように繰り返している

のだろうか。若いなあ……

「はあ。つまらない授業ってのは俺が悪いし、寝られても文句は言えないかもしれない。だがな、さすがに何かを食べるってのは違うだろ。失礼とかそういうのじゃなくて、ルールとか規則ってものだ」

「……そうかもしれませんね。でも仕方がないですよ。人間って呼吸するでしょう。心臓が動くでしょう。授業よりも大切です。僕にとっての三時のプリンはそれと同じなんですよ。習慣ですから、しょうがないんです」

少し大げさだけど、今時チョーク投げる古びた若い教師には、これぐらいの方が説得力があると考える。それに一人称を『僕』としておけば、悪い印象は薄れる。

「習慣って……ナンタラ症候群ってのなら分かるがな、医者からの診断書でもない学校には認められないぞ」

「そんなの、お金がもったいないです」

「……………」

教師は少し黙って、ため息を吐いた。

「本当はわかってるんだろ。お前が、自分が悪いことをしてるって」

「いいえ、全然」

「そんな気持ち、全然ないけど。」

「じゃあなんで隠れて食べてるんだ。悪いと思ってるからじゃないのか？」

「さっきみたいに怒鳴られたくないからです」

俺だって、怒鳴られていい気分にはならない。

教師の顔に青筋が走った。

「もう理屈はいいから、授業中に食うのはやめとけ……。今度は許さないからな」

その言葉、今回で八回目ですよ。

心の中で、黒板に戻っていく教師の背中に言った。

今日も学校が終わった。

昇降口で靴に履き替え、校門を出た。帰りは一人だ。秋乃はバドミントン部で奮闘中。けっこう上手らしい。

バドミントン部は水、日曜日以外を活動日としている。

一方俺はというと、漫画研究会、略して『魔界』というふざけた部に所属している。研究会が部であるのかどうかとか、略すると漢

字が変わってるとかは気にしない。自分でふざけてると言うのもどうかと思うが。

ちなみに俺がどれだけ絵が書けるかというところ、ガチャピンとカービーが書けるくらいだ。人を書けば、妖怪が出来上がる。

活動日は、火曜日と金曜日。実質、秋乃とかぶらないのは水、土、日曜日。活動は主に、誰かが持ってきた漫画小説を読んだり、宿題をやったりする。

まあ、どうでもいいことだけど。

行きに来た道とは違った、家までの最短距離を歩いて、俺は家に帰った。

十三話（後書き）

……僕、なに書いてるんだろう。そう思った今回でした。

さて、今回は月曜日から土曜日まで、一気に時間が飛びます。始まってから今まで、まだ四日目なのですが……これからは時間が早く進みそうです。

それと、これからまた別件に取りかかるので、更新スピードは上がらなさそうです（さぼりませんよ！）

それでは、どうかお元気で（別れではありません！）

十四話（前書き）

大変遅くなりました。……と、独り言のようですが。
今回のジェントルマン編は、多分三話で完結です。よければ感想の方、特に評価の方をよろしくお願いします。

十四話

青髪が少女が来てから一週間が経った。特殊な……というより役に立たない能力を貰ったけど、あれからは特に何もなくて、まったくの平穩無事な日々だった。

そして今日は土曜日。その昼時のことだった。

丁度昼飯のふりかけご飯を半分食べ終えた時、安っぽいチャイムの音が部屋に鳴り響いた。

こんなうらかな昼時に、いったい誰だろうか。

まず最初に、秋乃の顔が思い浮かぶ。でも、そんなはずはない。時計では、長い針と短い針が一番上で重なっている。いわゆる十二時。秋乃は今日部活をやっているて、帰ってきて一時だ。帰ってくるまではまだ一時間くらいある。部活が早く終わったと言えばそれまでだけど。

箸を茶碗の上に置いて、椅子を立つ。薄暗い玄関へと向かった。

秋乃か、それともおじさん……はいないよな。別に約束のある友達も、親戚も知り合いもない。秋乃を訪ねた、けどいなかったから俺の家に来た、という境遇の知り合いの可能性もあるかな？ いや、さすがに考え過ぎか。それなら、一週間前に俺の家に来た二人、青髪とミラミラさんは……律儀にチャイムなんて押さないよな。絶対に不法侵入する。

俺は玄関まで来たけど、考えても思い当たる相手はいない。誰だ

ろうかと玄関ののぞき穴を覗くと、しかしそこは真っ黒だった。

イタズラか？

どっちでもいいやと思って、俺はドアノブに手をかけた。

……なぜだろう。一週間前と同じように、開けてはいけない気がする。本当に、直感的に。

さすがに気のせいだろうと、ゆっくりドアを開ける。すると、薄暗い玄関に光が入ってくる。

そしてそのドアの向こうから――

「ハロー、少年」

ジェントルマンで陽気な声が聞こえた。

開いたドアのすぐ向こうに、人の顔が見える。見上げる先に、その顔は斜め四十五度から伸びている。首から下は見えないけど、身長の高さが伺い知れた。

俺はその顔をしばらく、何も言えずに見ていた。そしてやっと出た言葉が、

「はい？」

だった。

はい？ というより、誰？ といった方が、俺の心中に近かった

かもしれない。全く知らない物だった。

性別は男、年は四十代後半に見える。髪は白髪のかせ毛で、クルクルと弱々しくカールしながら肩までのびていた。細い目に縦に長い顔。何より一番目立つのは、その頭にかぶった黒いシルクハット。なるほど、これはジェントルマンだ。などと余計なことを考えて、すぐに消した。

「少年よ、この出会いを女神に感謝しようではないか」

怪しすぎるジェントルマンだった。

とりあえずドアを一度閉めよう。そして落ち着こう。知らない人にはついて行っちゃダメだ。……じゃなくて、考えろ。俺の家に来るなんて怪しい人間、どこのどいつだ。

ドアが叩かれる音を無視して、考え続ける。

そして結論。これは宗教勧誘だ。それなら、ジェントルマンであるのもなぜか納得できる。神の変わりに女神とは、なかなか新しいじゃないか。その方が綺麗だとしても考えたのだから。

だが、俺には年会費みたいなのを払う余裕がない。信じる信じないの問題ではないのだ。

「少年よ、話を聞いてくれないか。私は決して怪しい者ではないから」

怪しすぎるから。

ドアを叩く音が続いている。かなりしつこいけど、乱暴な叩き方でない。そこらへんは信用出来そうだ。

宗教勧誘ならまずは断ろう、と再びドアを開ける。案の定、さつきと同じ顔が同じ場所にあった。

「あ、すみません。宗教勧誘なら間に合ってますので」

これ以上ないくらいの善人顔で断った。すると男は、目を見開いて驚いた。

「なんですと？ 宗教勧誘？ いやいや、私は宗教とは無関係だよ。それにしても、宗教に間違われるとは……ああ、なるほど、勘違いだな。私は女神に感謝しようとは言ったが、崇めようとは言っていないよ。ただ少し、話がしたいんだ。丁度いい場所があつてね。向こうの公園だよ。ちょっと行かないか？」

話が勝手に進んでいく。

しかしまあ、ジェントルマンの言葉は無視して……これは宗教勧誘じゃないのか？ じゃあ、なんなのだろうか。

目の前の男のイメージが、怪しいから不思議に変わった。こうなると、また不思議なものだ。警戒心の中に好奇心が生まれてくる。

いや、ダメだ。知らないジェントルマンにもついて行ってはいけない。

「とりあえず、要件を言ってください。あなたが誘拐犯かもしれない

い」

「ハハ、馬鹿なことを言うな。こんな貧相な家の子供なんて誘拐しないさ」

誰が貧相な家の子供だよ。

「それに、誘拐するなら力ない少年少女だろ。君に腕を噛まれたら痛そうだ」

男は顔を斜めにしたまま、高笑いをした。

なぜだろうか。物凄くムカつく。

「公園まで行くの面倒だから、とりあえず、早く要件を言ってくれよ」

このジェントルマンに敬意はいらない。さっさと要件を言って、さっさと帰ってほしい。

「おっと、悪かったね。何か失礼な事を言っていたら謝るよ」

気づけよジェントル。貧相とか言われんの、けっこう傷つくんだぞ。

俺の態度に怒りを感じたのか、男は謝罪の言葉を口にした。しかし男の謝る気がなさそうな顔に、さらにイライラが積もる。

「いいから、話すことがあるなら早く言ってくれよ。手短に、簡潔に」

「おお、注文が多いねえ」

「サービスしてくれよ。こっちは金の代わりに時間使ってるんだから」

「時は金なり……だね。少年、君もやるねえ」

なにがだよ。とにかく、早く要件話して出てけ。一刻も早く、この男に帰ってほしい。

俺が早くしろと心で念じたのが通じたのか、ジェントルマンな男は「あはは」と笑って表情を和らげた。

「時間も大切って意味なんだよねえ。そうだね、いつまでも無駄話していても話は進まないし、率直に言わせてもらおうよ」

それでは改めて、と言って、男の顔がドアに隠れた。そしてついに、ドアの向こうに男の全体が見えた。

俺は今、その容姿をただ一言で表せた。

「高い……」

男の身長は百八十くらいだろうか。上下、ドアの上にぶつかりそうな大きさで、ずいぶんと見上げる格好となった。ずいぶん細身で、デカイというより、高いという印象を受ける。

ともあれ、やっと終る。払う金もないし、事件性もなさそうだし、早くふりかけご飯の残りを食べたい。

しかし、男はそんな俺の心情に、まったく気づかないようだ。

「さあ、少年。手を取りたまえ」

なぜだろう。男のその大きな手が、ドアの隙間から入ってくる。逆光のせいで男の姿が陰で見にくい。

白い歯を少し見せて、男は笑った。

「正々堂々、私と闘おう！」

「……………」

ドアを閉めた。

理解した。あの男とは、同じ世界に住んではいけない。あんな戦闘狂とはなれ合えない。宗教の数百倍は怪しい。

さあさあ、早く鍵をかけて……

「しょ、少年。私の手を挟まないでくれないか！」

閉まってないだど!?

見ると、男の腕がドアに挟まっている。一体何を求めているのか、指がうねうねと動いている。

向こうから悲痛なうめき声が聞こえてくる。

「は、早く開けてくれえええ」

「うおお！ 引っ張るなよ！」

男がドアを開けようとすると、逆にドアノブを掴んでいた俺の手が引っ張られた。

持つて行かれてたまるかと、足を踏ん張って、こちらからもドアノブを引く。余った片手で壁の出っ張りを掴んで、さらに引く力を強める。

「腕が、腕がああああ！」

男のさらなる悲痛な叫びが聞こえる。

絶対に男の中に入れてはいけない。その一心だったけど、男の腕は一向に外に出て行かない。

俺が引っ張っているから、それは当然なんだけど……

考えても、頭を整理する余裕などない。俺はただドアを閉めようと、男はドアを開けようとする。

「ぐわあああ！ 腕が千切れるウウウウ！」

もはやジェントルマンの声ではない。ドアからはみ出ている手がこわばる。

いやしかし、なんでなのだろうか。普通に手を放せばいい話なのだろうけど。逃げる者は追いたくなる心理と同じなのかもしれない。

頭の中でよく分からない思考を繰り返した俺だが、次の瞬間、ドアの横のあるものが目に入った。

それはまるで神のごとく、光をまとっているような気がした。

……これを使えば、すべて解決するじゃないか。

なんで今まで思いつかなかったのだろう。俺は両足で踏ん張る用意をして、壁の出っ張りを掴んでいた片手を離した。

ドアノブに持って行かれそうになる体を足で踏ん張って、ドアの横に手を伸ばす。

カチャリ。

俺は、ドアのチェーンを閉めた。

「――少年？」

ふう、一件落着だな。

俺は安心して、ドアノブから手を離す。

実に平和的な解決だ。さて、早くふりかけご飯の残りを食べようか。

俺は逃げるように、部屋に戻ろうとする。

「ちょ、ちょっと待ってくれ少年。あの……この手がドアから抜け

ないのだから……」

「そうなのか。それは残念だな……」

「残念？ 君はそう思ってくれているのかい？ じゃあ、早くこれを外してくれ」

イヤだよ。あんな紳士派な長身武道家。そりゃあガイモンさんやミラミラさんよりかは小さいけど、勝てる気がしない。そもそも怪しいんだよ。

俺は無言で玄関を後にする。

「しよ、少年よおおお！」

この世の無情を嘆くかのように、男は大声を上げた。

男はガチャガチャと手を抜こうとするけれど、チェーンの短さと手の大きさからか、一向に抜ける気配はない。

これで解決したな。

俺は部屋に戻って、テーブルの上にぽつんと置いてあるふりかけご飯と対峙する。もうご飯はカピカピになっていて、新鮮味が感じられない。まあ、食べられれば文句は言わないけど。

箸を手に取り、さあ食べようと――

ガコンガコンガコン。

……ドアとか、壊れないよな。大丈夫だよな……

男がドアを引いているのか。なんて力任せな。でも、さすがにそこまで古いドアじゃないだろう。チェーンも、サビていても壊れはしないだろう。……多分。

気を取り直して、さあ、食べよう――

ガコンガコンガコンガコンガコンガコンガコンガコンガコン。
ン。

うるせえええええ！

そんなんやつでも外れねえよ。……多分。

チェーンが壊れないことを祈りたい。上手く手だけ抜けて、そのまま帰ってくれるのが一番嬉しいけど。

向こうは戦いたいと言っている。それは難しいかもしれない。

ガコンガコンガコンベコリガコンゴカンベツコン。

……あれ？ 何か今変な音が聞こえたような……。ベコン、とか。

……………。

……………。

なんだか、逃げなければいけない気がしてきた。頭の奥の方の……第六感なのか、不確かなものが俺に問いかけるように。

逃げる決心は簡単についた。そうならば、次はどうするかだ。

まずは外履きの靴。これは大丈夫だ。俺は使い古した靴を家にとつてある。こんなこともあるかと思ってだ。すぐに捨てるのももったいな……地球温暖化に貢献しているのだ。決して、もったいないとか、貧乏だからということではない。

……何はともあれ、靴は確保出来た。次は逃走経路。

俺は部屋の中を見渡す。

玄関は論外だ。俺の部屋にも窓はあるけど、部屋に行くまでには玄関を通らなければいけないから、これはダメだ。あのジェントルマンとは、出来れば接触したくない。

この部屋には窓が一つ、ベランダが一つある。窓のむこうは外の景色がよく見える。そういえば、一週間前にミラミラさんが飛んでいったのもこの窓だ。対してベランダは、その先にほんの小さな庭に通じている。手入れするのが面倒だから草は伸びていて、周りは針葉樹に囲まれている。

正直、庭は歩きたくない。ということ、窓から出ることにした。

……今度、庭の手入れでもするかな。

これで逃走経路も決まった。では最後。もし、男がこの部屋に入ってきたら、とられてまずいものはあるか。

再び部屋を見回して……

通帳と財布は持って行った方がいいだろう。これがないと飢え死にだ。

他には、古い家電に仏壇など。家電のように、大きくて金にならない物を盗むヤツは普通いない。それに仏壇を盗むなんて罰当たりな輩は……まあ、ジェントルマンならしなさそうだ。

これで持つて行く物も決まった。財布はいいとして、通帳にはかなりの額が入っている。とられる訳にはいかない。

それでも念のため、財布は持つて行くことにした。

それから財布と通帳を持ち出して、財布をポケット、通帳を斜めがけのカバンに入れる。カバンをかけて、窓を開ける。俺はベランダに靴を見つけ、それを窓の外に投げる。

ガコンゴカン。

玄関から、ドアが揺れる音が聞こえる。

……早く言った方がいいかな。

頭の中から、そんな早く行けと声が聞こえるようだった。俺は窓枠に足をかけて、一メートルくらいの落差を見下げる。

高くはないけど、この窓から飛び降りるのも何年ぶりだろうか。思いつくのは、まだ小学生だった自分。まあ、だからなんだという訳ではないけど。

飛び降りる寸前に、ついでにプリンを買っていこう。そんなことを考えて、俺は窓から飛び降りた。



プリンは今日、土曜日の三時をもって無くなってしまう。財布を持ってきたのは正解だったな。

それにプリンを買うという目的がなければ、これからの行き先がなくなっていた。ただ歩き回るというのも、なにかつまらない。

窓を出た俺は、反対側の細く入り組んだ路地を回って、少し大きな道に出た。これから道を三回曲がって、その道をまっすぐ行けば、スーパーに着くはずだ。

確か今日は、四時から全品一割引のセールがやっていたような……。そうだったら、また後で来よう。一割はまあまあ大きい。

財布の中には、幸いなことに百二十円があった。これなら金が足りなくなることはないだろう。

俺は遠くに見えた曲がり角が、だんだんと近づいてきた。

スーパーまでは、そう遠くはない。ジェントルマンな男はどうし

ているだろうか。ずっとあのままにして置くわけにはいかないし……

歩きながら考えよう。俺はそう決めて、曲がり角を左に曲がった。

そして、その刹那の出来事だ。

「「あっ」」

俺が曲がり角を曲がった——いや、曲がろうとした。偶然か必然か、二つの声が重なった。

これは奇跡だ。いや、奇跡と言うより、運命なのか。どちらでもいいけど、あまりいい言葉にはならなさそうだ。

それと、人間は有り得ないことが起きると、一時思考が停止するらしい。これも本当かどうか……。ただ、今の俺はその状況にあった。……たぶん。

落ち着かない脳味噌では、今、目の前にいる人間を認知出来ないのか？

違う。そんなことはない。視覚はいたって正常だ。正常なはずだ。

ではこれは……神のイタズラ、もといイジメなのだろうか。

と、俺の能力で数えたところの一秒間の思考。だが実際のところ、考えたことの意味は分かっていない。

俺はどうでもいい思考を一瞬で切り捨てる。とどのつまり、俺の言いたいことは……

「なんでこの腐れジェントルマンがここにいるんだああああああ
！！」

最高の反射速度で体の向きを変えながら、アスファルトの地面を蹴って、来た道を全力疾走で走り出す。俺はジェントルマンから逃げ出した。

「しょ、少年よ、待ってくれ。私は無害だ」

信じられるかっ！

後ろから男の声が聞こえて、振り返る。男はその腕を直角にして、それを振り回しながら走ってきていた。

角張ったような、シャカシャカとしたやけに特徴的な走り方なのに、なぜそんなに速いんだ。

俺も足にはかなりの自信がある。クラスでもトップレベルのはずだ。しかし、その差を開くことが出来ない。

「ま、待ってくれ！ 私は君と戦いたいだけなんだ！」

「この戦闘狂がっ！ 俺が戦いたくないんだよ！」

「ホワイ？ なぜだ！？」

「知るかボケ！」

何を好きこのんで戦わなきゃいけないんだよ。俺は普通の人間だ！

俺はスピードを緩めずに、弧を描くように曲がり角を曲がった。景色が変わる。コーナーも、まあまあ得意だ。これで差を広げられるかと思って顔だけ振り返ったけど、男はなんと、一瞬で勢いを殺して曲がり角を直角に曲がって来たのだった。

なんて力業だよ。足にはものすごい負荷がかかっているはずなのに。

しかし、やっぱりキツかったのか、男の声が少しだけ遠ざかった。余裕が出来た俺は、その男の声を聞くことが出来た。

「なぜ逃げるんだね、はあ、はあ、少年。君の能力なら、はあ、十分に戦えるだろう」

「はあ、はあ……俺の能力……？」

能力。…俺の耳には、確かに聞こえた。信じたくない現実ではあるけど、本当にそう聞こえたのなら思いあたることは一つしかない。

頭の中で俺のクズ能力が踊り出す。勿論、そんな能力の化身なんてオプシヨンは付いていないけど。あのケチ女め。

いやそもそも、なんであいつが能力のことを知っている？ まさか戦いたいと言うのは……

嫌な予感が胸をよぎった。

「少年よ、私は正々堂々と、君と向かい合うよ。君の能力と！」

「気持ち悪いよ！　だいたいアナログ時計とストップウォッチな男と向かい合ったって、なにも変わらないだろ」

俺のような軟弱能力を持った人間と闘いたいとは、コイツはサドか？

どちらにせよ、アイツも能力を持っている確率が高い。さて、どうしようか……。

「はあ、はあ……少年！　君の能力を見せてはくれないか？　はあ、ただの興味だ。殺しはしないよ」

「馬鹿かよ！　そんなこと前提条件なんだよ。とにかく闘いたくないんだよ、俺は！」

俺の能力で闘え、なんて死刑宣告と同じだ。逃げる以外にどうしろと？　今から百メートル走の計測でもってしろってのか？　一億分の一秒までなら計れるぞ。

「頼む、止まってくれ。正々堂々、勝負したいんだ！」

なんでだよ。アイツは俺の能力を知っているらしいが、じゃあなんでそんなに勝負することにこだわるんだ？　まさか短距離走をしたってわけじゃないだろうし。

「もう追ってくんないよ！　だいたい俺の能力ってのはなあ、時計とストップウォッチと——」

「言わなくても分かっているよ。君の能力は、神の使うような——時間を戻す能力なんだろう？」

「違あああああう!!」

なんでそうなる、人違い。そもそも誰だよそれ、俺じゃなくて秋乃じゃねえか。

なんで勘違いなんかしたんだ? ……そうか、あのクソ女神さんか。どこまで俺を苛める気だよ。

会って、絶対に文句言ってやる。そんなことを考えたけど、今はそれどころじゃない。まずはあの男の説得からだ。

もはや、逃げている場合ではない。俺は走りながら後ろを向いて、ゼエゼエ言いながら走っている男に大声で話しかける。

「おーい、ジェントルマン。かなり省略して言うが、実は俺は、お前が探してる人間じゃないんだよ。人違いなんだよ」

「はあ、はあ……もう体力が、はあ、持たない。……悪いけど、先制攻撃をさせて貰うしかないかな。すまない少年。言っていることと矛盾してしまっているし、何より私は卑怯なことをしたくない。しかし、逃げられるわけには……」

……何を言ってるんだ? もしかして、俺の声聞こえてないかな?

遠くでぶつぶつと独り言を言っているようだが、声が小さくてよく聞こえない。

遠くに分かれ道がある。あれを曲がれば、逃げ切れるかもしれない。

後ろを振り返ると、もう走りという走りをしていない男が、まだぶつぶつと何かを呟いている。

「すまんおっさん。また今度な。っていうかもう来んな！」

「――なはずだな。それなら、もう仕方がない」

さっきから何を言っているのだろうか。俺には関係がないといいけど……

先に見える曲がり角。右に行けば山に、左に行けば住宅街に入るはずだ。だけどどちらに行くのが最前なのかよく分からなかったの
で、曲がりやすい左に行くことにした。

もう一度後ろを振り返ると、男はただ立っているだけだった。

しかし、どこか不自然だ。男は片手に作った握り拳を前に突き出して、しっかりと俺を見据えていた。

あんな変な行動をとるのは……もう諦めたからだろうか？

体力にも自信はあるけど、さすがにもうキツイ。俺は気にしないで走り続けようとした。そして、男の声を聞いた。

「いくぞ少年！ スクラアアアアッチ」

スクラッチ？

いきなり何を言い出すんだ。

十五話（前書き）

遅くなりました。たった今、もう少し楽な高校に入っておけばよかったと後悔しております。

1テスト去って、もう1テスト……。もうすぐ、テスト習慣が始まります（汗）

さて、今回は長くなったので（そこまででもないですが）、話を二つに分けました。三話で終わるとかほざいておりますが……。四、五話くらいになりそうです。

もっとコンパクトに、それでいて厚く仕上げたいものです。

それでは、始まります。

十五話

ジェントルマンな男から逃げて、どれだけ走ってきただろうか。今、後ろに男の姿は見えない。振り切ったといえそうだが、あの陽気な声がどんどん近づいてくる。

「はあ、はあ、はあ……」

息が荒いし、これ以上走るのは本当にキツイ。本当に、もう走りたくない。

俺は走るのをやめ、誰かの家の隣にあるしげみに隠れた。斜めがけのカバンが枝に引っかかったけど、それを強引に引っ張ってしげみの中に入った。

これで、あの男をやり過ごせないかな。

本当は体力には自信があったんだけど、以外に走れなくなっていた。さすがに一年以上走ってないと、体力もおちるか。

漫画研究会なんて変な部活動にはいつているからなのだろうけど、それが楽しくないというわけじゃないし、今さら体力をつけなおそうとは思わない。総じて言えば、仕方がないってことだ。

いやしかし、陸上部時代の俺は輝いてたな……

久しぶりにランニングでもしようかな、と考えた所で、聞こえてきた男の声に思考を止められた。

深呼吸をして息を整える。息が荒いとバレルかもしれない。

「おゝい、はあ、はあ、少ねくん。どこへ行ったんだゝい？ はあ、はあ……」

どうやら、あちらの方がグロッキーらしい。いかにも死にそうな声で、生気を吸い取られたように歩いている。

五月も末のこの天気で、俺の全身があせまみれなのだ。しかもあの男の黒いスーツのような服は熱中症奨励の格好で、運動には向いていない。

ただ、アイツには伸びる腕がある。どこまで伸びるのかは分からないけど、リーチはかなり長い。しかも威力がある。

一見どこかのゴム人間の能力をそのままコピーしたようだけど、それも少し違う。アイツの腕は伸びるだけでないのだ。例えば、ゆるいカーブを曲がってきたり、スピードを殺してから直角に曲がったりしている。

これは明らかにゴムの特性を超越している。簡単に考えればゴムではないということだけど、それならなんで伸びるのだろうか。

俺はあの反則級の能力から逃げるので精一杯だ。あの攻撃に氣をつけながら逃げるのはこちらが不利であるし、伸縮自在だから捕まったらヤバイ。

果たして、どうすればいいんだろうか……

「少年よ……私は正々堂々と勝負をしたいだけなんだ、はあ、はあ」

怖いんだよ、それが一番。

無情にも近づいてくる男に、俺は息を潜めて体を縮める。静かに、葉音を立てないようにじっと見て。

あの男のことだ。多分俺なんか気づくことなく、そのまま歩いていくだろう。心配はいらない。

だが俺の心臓は早鐘のようにバクバクとなっている。

男の方もいくらか息が整ってきていて、その大きな足で一步一步と確実に近づいてくる。

あんなに遠かった男の声も、今では近すぎる。

男はついに俺の目の前まで来た。そして、何かに気付くように、しげみに隠れる俺を見た。

バレたか！？

男は口の端をつり上げ、その大きな手を伸ばしてくる。

逃げるか……どこに？ 返り討ちに……できるわけがない。じゃあどうすれば……

動けない俺の目の前に、男の手が置かれる。

「おお、ラッキーだ。五百円だ」

「小せええええええ!!」

なんで五百円、お前ジェントルマンじゃなかったのかよ! 金く
らいたくさん持つてるんじゃないのかよ! ってか、なんで目の前
に五百円がつ、先に拾っておくべきだったよ!

「ん? この声は……」

しまった、声を出しちまった。

「クソッ」

前に逃げ道はない。必然的に、俺はしげみを後ろにぬける。これ
はもう、行き止まりでないことを願うしかない。

幸い、逃げた先は家の塀に挟まれた細い路地だった。一人しか通
れなさそうな路地を、サイドステップで一つ向こうの道にぬけよう
とする。

「うぐ……やはり少年じゃないか。なぜ逃げるんだね!」

男はしげみから上半身だけを見せてもがいていた。

「知るか、とにかくお前が原因だ!」

言い放って、スピードを速める。

左右に見える家を二件過ぎたところで、一車線の道路に出た。歩
道という歩道はないが、車もあまり通らない。体力は少し戻った。
曲がり角をいくつか曲がって、このまま逃げ切ろう。

走りながら曲がり角を探す。そして一番近くにそれを見つけた時、俺のすぐ横を肌色の物質が通り抜けて伸びていった。

驚く暇もなく、ほぼ反射的に男の腕ををはたき落とすと、腕は一瞬ビクッとこわばってから縮んでいった。

後ろを見ると、腕はさっき俺がいた細い路地から出てきていて、直角に曲がってこちらに伸びていた。どうしたら腕が伸びて直角に曲がるのかと疑問になったけど、そんな思考はすぐに消えた。

俺が一番近くの曲がり角を車道を横切って曲がり、次の曲がり角を探した。

見つけた曲がり角を曲がり、また曲がった。

男は……後ろにはいない。振り切ったか。もともと体力では勝っているし、直線勝負でなければこちらが有利だ。

近くに止めてあった車の陰に隠れる。

だが、一度見つかってしまえば逃げるのは難しい。それにジェントルの様子から読みとるに、今逃げ切ったとしても、明日明後日と追ってくるだろう。

それこそふざけんかって話だ。これには根本的な解決が必要になる。

立ち上がって、車のガラス越しに周囲をうかがう。だれもいない。

根本的な解決のために……。だから、俺は最後の手段を使うことにした。正直言うと今思いついたのだけど、なにしろリスクが高すぎる。

けれど、俺の平和な日々に比べれば……

決意はできた。あとは実行だ。

俺は横断歩道を渡る園児のように、左右を入念に確認してから走り出した。

行き先は——公民館だ。



男に見つからないように慎重かつ素早く移動して、だいたい十分が経った。住宅街から少し外れた場所に、焦げ茶色でレンガ造りの公民館が見える。

公民館は車道を挟んで向こう側にある。車の通行量が多くなってきた、しかも横断歩道はない。歩道と車道の間をフェンスが遮っている。

向こう側に行くには歩道橋を渡るのが一番近い。歩道橋は直接入り口に通じているが、俺の目的地は公民館の外壁沿いにある。だから、一度中に入ってからもう一度外に出なければならぬ。

俺の目的を簡単に言えば、秋乃を呼び出すことだ。俺一人では勝ち目がないからな。

秋乃を呼び出すために、俺は公民館に設置されている公衆電話を使いにきたわけだ。

まったく、俺が携帯電話を持っていればこんなことをする必要なんてなかったのに……。

ちなみに秋乃は携帯電話を持っている。おじさんがあまり帰ってこないこともあって、使い方もよく分かっていない秋乃に携帯電話を持たせたそうだ。……アイツ電話にでれるのか？

俺は歩道橋を渡りながら、財布の中身を確認する。

財布の中身は百円と二十円。ちなみにプリンを買うのには消費税を込めて百円が必要になる。例えば、二十円分の電話時間で秋乃に要件を伝えられなかったら……なんて大きなリスクだろうか。

ここから公衆電話までの道のりは、まず歩道橋から直接公民館に入って、近くの非常階段から一階に降りる。次に入った方角と同じ方角から出る。公民館を出たら、その壁を左回りに歩いていけば公衆電話があるはずだ。

誰がこんな迷惑設計をしたのかと考えていると、歩道橋の向こうに『工事中』と書かれた看板が見えた。

歩道橋に登って看板に近づくと、それは階段を作っているようだった。完成日は夏休みに入ってからでまだ遠い。

便利になるのはよいことだというが、まあなんか、名残惜しい気もする。……どうでもいいか。この階段が使えるわけでもない。

俺は自分で描いたマニュアル通り、公衆電話のある場所まで歩いた。公民館の中は『地球温暖化防止』という言葉が廃れるほど涼しくて快適だった。

無駄に金がかかってるな。

ともあれ体力が完全に回復した俺は、公衆電話の前で財布を取り出した。百二十円を取り出す。

しかし、俺はまた動きを止める。

公衆電話は一度お金を入れたら二度と出てこない。五十円でも百円でも、一円分を使っただけで。はてさて、ここで問題だ。スーパーでプリンを買うには、消費税を込めて百数円が必要だ。例えば十円分の会話時間で秋乃に伝えたいことを伝えられなかったら、今日の分のプリンが買えないことになる。これだけはなんとか避けたいがけど、あの男に追いかけられながらというのも避けたい。

両方取るのを傲慢というかもしれないが、今日くらい贅沢させてほしい。

俺は十円を太陽にかざし、何かに祈った。

「なるようになれってんだ」

こういうとき、結局はどうにかなるもんだ。そう言い聞かせて、

俺は公衆電話に十円を入れた。受話器を片手に、秋乃の携帯の番号をプッシュする。

電話番号は覚えている。なかなか便利だからだ。

受話器からは無機質な呼び出し音が頭の中で反響する。早く出てくれと、ここにはいない秋乃をせかす。無駄だけど。

呼び出し音を聞いている内に、色々な不安が頭をかすめていく。秋乃は携帯の電源を付けているのだろうか、マナーモードにしているのだろうか。水たまりに落したり、車に潰されたりはしていないだろうか。いやそもそも、秋乃は携帯の通話ボタンを認識して、押すという行動をとれるのだろうか……

しかし俺の心配とは裏腹に、電話越しに秋乃の声が聞こえた。

『もしもし、どちらですか？』

「出た！」

『なに、化物が出たのか！？』

いや、なんでそうなる。他に出るものはないのか。

「違う、俺だ、俺。分かるか？」

『この声は……翔だな』

「おお、よく分かったな」

電話越しの声も馬鹿にならないと思った一方で、秋乃から金を騙し取るのは簡単だと感じた。俺だ俺だと言った今のくだりは、まるでオレオレ詐欺だ。

『ふむ。それで何か用か、わざわざ公衆電話から』

要件は短く、簡潔に話さなくては。

「まあな。とりあえず、今すぐこっちこれるか？」

『いいぞ。……だが、なぜだ？』

「なぜって、それは……」

なんというか。

「追われてるんだよ、変なおじさんに」

『何！ あの有名な変なおじさんか！？』

有名な方は……名前だけなら聞いたことがある。

「って違う、そうじゃない。いかにも普通のジェントルマンだ。なんかイギリスっぽい」

そう言うってから、ジェントルマンはイギリスの人だっけ？ と疑問になる。

「とにかく、早く来てくれ。俺の身が危ないんだ。時間もない」

『あ、ああ。分かった。今すぐ行く』

秋乃と話してちゃんと伝わるかと不安だったけど、なんとかなるものだ。アイツだってそこまで馬鹿じゃない。

「スマン、頼む」

秋乃の声が途切れて、無機質な機械音が繰り返し流れた。

これでオーケーだ。後は隠れて待つのみ。

ここからあの男の姿は見えない。そもそもここに来る確率は少ないし、万が一来たとしても道路の向こう側からこちらには直接来れない。相手がさまよっている内に逃げればいい。

そして秋乃が来たら反撃開始だ。アイツの能力ならなんとかなるだろう。

では、秋乃との待ち合わせ場所はどこにしようか。外の方が待ち合わせには適しているけど、見つかる危険がある。ここは公民館の中で待っていた方がいいだろう。学校からだ、少し急いで五分というところか。これなら――

「……あれ？」

公民館へ向かおうとしたとき、俺はなにかを間違えた気がした。大切なことを忘れているような、はつきりはしないけど、なにかが欠けていた。

俺の作戦、というほど凄いものではないけど、それにおかしな点

はないはずだ。あとは秋乃が来るまで隠れていればいい。

「秋乃のヤツ、どれくらいで来るかな……」

できればあのジェントル男より早く来てほしい。そうすれば早い段階で反撃できるし、安全も確保できる。ただ、それより前に男に見つかってはいけない。この場所を知っている秋乃より早く、運良くたどり着けるとは考えづらいけど――

……………あれ？

次の瞬間、俺は自分が致命的なミスを犯したことに気付いた。それは何よりも大切で、致命的で、簡単なことだった。こんなことを忘れていた自分を責める前に、俺は少しのパニックに陥っていた。

俺は秋乃に、どこに来ればいいのか（……………）を伝えていなかったのだ！

十五話（後書き）

どうかどうかどうかどうかどうかどうかどうか！

評価や感想をよろしくお願いします。おヒマであれば、是非。

十六話

秋乃に助けを求めたはいいけど、肝心な俺の居場所を伝えるのを忘れていた。

急ターンで方向転換して、公衆電話のある場所まで走った。

財布から二つの硬貨を取り出して、その中から十円掴んで入れた。受話器を乱暴にとり、ボタンをプッシュしていく。

呼び出し音が聞こえたその時初めて、今日のプリンが消えていった。

そして五回の呼び出し音の途中であと、秋乃が電話にでた。

「おい秋乃、聞こえるか」

『ああ、聞こえるぞ』

しかしその声を聞いた瞬間、さらなる違和感が俺を飲み込んだ。

声が、秋乃の声じゃない……？

受話器の向こうの声は、秋乃の声とはまったく違うものだった。

『あはは、残念でした。わたしは秋乃ちゃんじゃありません』

……は？

聞こえてきたのは、どこにでもいそうな女の声。からかうような笑い声が特徴的だった。

秋乃じゃない？　もしかすると番号を間違えたか？　……いや、それはない。じゃあ、コイツは……

「誰だ、お前は」

『あれ、分かんないの？　わたしだよ、わたし。クラスが――』

「うるせえ！　ワタシワタシ詐欺には騙されねえぞ！」

『何でそうなのよ！　わからないの？　わたしよ、あんたと同じだからクラスで窓際の一番前に座ってる――可憐な純情の美少女』

窓際？　一番前？　……ああ、思い出した。秋乃大好き生徒Aだ。俺の中で美少女カウントされてないから分からなかった。

「ああ、お前か」

えーと、名前名前……

「えー、お前。どうして秋乃の携帯にお前が出るんだ」

『今、わたしの名前忘れてたよね？　……まあいいけど。秋乃ちゃんならもう行っちゃったわよ。部活が終わったすぐあとにあんたに呼び出されて、着替えもせずに飛び出して行っちゃった』

ありがたいが、手遅れか。……いや、まだ早い。方法ならまだある。

「なあお前、悪いけど秋乃に伝えてくれないかな、公民館まで来てくれて」

『ははは、パーフェクトだね』

「はあ？」

何を言ってるんだコイツは。

『それはともかく、あんた、秋乃ちゃんに何する気？』

それはともかくって……

「何って……何でもねえよ」

まさかジェントルマンと戦わせます、なんて言えるわけないし。

『一つ忠告しておくわ。秋乃ちゃんに手を出したらただじゃ済まさないからね』

「出さねえよ」

出されるかもしれないけど。

『信じられないわね。告白するくらいならいいわよ、粉々に砕けてちょうだい。でも……ハ、ハグとか、キキキ、キスとか、かくなる上は、べ、べべべべットとか——』

「馬鹿か、話飛びすぎだ。てか日本語おかしいぞ……」

ダメだコイツとは話にならない。何か違う方法はないだろうか……

俺は少し考えて、生徒Aにメッセージを残すことに決めた。秋乃が俺のミスに気付いて生徒Aの所に戻るか、親切にも生徒A自身が秋乃に伝えに行ってくれたりするかもしれない。

それまで俺は公民館のトイレにでも隠れていよう。

「おーい、少ねええん」

「って、なぜお前が現れる！」

間が悪すぎる。アイツ、ここまで来れたのか。

声のした方向を見ると、道路の向こう側で男がジョギングをしてきていた。相変わらず黒いシルクハットを被っていて、黒いスーツみたいなものを着ている。あれは彼のソウルか何かなのだろうか。

なんにせよ、アイツがこちらに来るには時間が必要だ。その間に伝言を伝えよう。

「いいか生徒A。秋乃に公民館に来てくれ伝えてくれ。出来るだけ早い方がいい」

『うるさい！ 秋乃ちゃんはわたしのものだあああああ！』

知るかあああああ！

生徒Aの叫び声を最後に、公衆電話が切れた。十円玉の限界だった。

これは本当にまずいことになった。しばらくは秋乃なしで戦わなければいけないのか。

俺はジェントル男の方に振り返る。ジェントル男はやはり歩道橋の渡り方が分からないようで、その場を右往左往していた。

これはチャンスではないか。まずは公民館から離れると見せかけて、戻ってトイレに隠れる。やり過ぎしたら秋乃を待とう。生徒Aには伝えることは伝えなし、秋乃が来るのも時間の問題だ。

と、そう思えたのもつかの間だった。

俺は驚愕した。

「行くぞ少年、スクラッチ」

聞いたことのある叫び声でした。すると男の腕がその身長のお三倍ほど伸びて、歩道橋の手すりの真ん中あたりを掴んだ。

男が手を少し縮めると、その体が宙に浮いた。さらにそのまま、ターザンロープの要領でこちらに向かってきた。

「ちょ、待て。そんなのありかよ、こっち来るな」

「ははは、少年よ。縁があるとはことことだ。さて、正々堂々私と――」

男はそこで手を離し、その勢いでこちらの歩道にジャンプをした。

「勝負だ！」

ジェントルはスタリと着地して、俺の目の前で口の両端をつり上げた。

ヤバイ、この距離からじゃあ逃げきれない！

この絶望的な間合いを少しでも離そうと、俺は地面を強く蹴ってジェントルから離れる。

ヤバイ、ヤバイ、まずは角を曲がって公民館の陰に隠れよう――

「ははは、捕まえたよ少年」

二本の手が俺の腹部にまわってきた。そのままキツく絞められる。

もはや手を伸ばす必要もなかったらしい、能力すら使わずに捕まった。その長い腕の中に、俺の体はいつも簡単に捕らえられた。

「クソッ、やめろっ」

体からみつく手を、腕を引きはがそうとするが、それは石像のように動かない。腕力が桁外れている。

俺はそのまま持ち上げられた。

「さて、正々堂々と勝負してもらおうかな？」

ニヤリと笑う男の顔が浮かんだ。

「ふざけんな、てかい加減にしろ。嫌だっつたら嫌なんだよ」

男は俺の話に、耳も貸そうとしない。そもそも、俺が何を叫んだところでやめてくれるわけではない。

最後には腕を噛んでやろうと考えたけど、どんなに首を回しても俺の歯は届かなかった。

俺は慌てながらも打開策を考える。けれど、持ち上げられて冷静でいられなく、いい方法はまったく浮かんでこない。

「少年よ、いい加減に折れてくれないか」

男が半ば呆れるように言った。

しかし、この俺にどう折れろというのか。に戦えない俺は、折れるに折れられない。諦めてどうにかなるわけでもないか。

「無理なんだよっ、そもそも人違いだから」

「頑固な少年だな。そうだなあ……まずは適当な場所に張り付けようか」

なんでそうなる！

そんなんじゃ勝負以前の問題がある。下手したら殺されるかもしれない。そうでなくとも、無傷では帰れなさそうだ。

それにもし負けたら、俺の大切なものが取られる。たしか、この戦いのルールだった。

男は俺を縛るための支えとなるものを探しているようで、辺りを見回していた。

そもそも縛るためのヒモすらないのに。いや、ある。男の腕自体が伸びるんだった。

この男の長い腕に縛り付けられている自分自信は、あまり想像したくないものだった。

……俺は、手違いで死んだりはしないだろうか？ ……違う、それはない。あの青髪は、このトーナメントで命を落とすことはないと言っていた。

でも、怪我や病気には保証がない。たとえ骨折をしようと大量出血をしようと、そんなことは知らんということだろうか。それに、怪我や出血などによる間接的な『死』まで面倒を見てくれるとも限らない。

秋乃に無理な治療をさせるわけにもいかないだろう。

という点と、そもそも痛いのは嫌だという点から、出来るだけ怪我はしたくない。

じゃあ、さっさと降参してしまえばいいんじゃないのか？

このあいだまでは確かにそう思っていた。敗者は大切なものを失うと聞いたけど、よくわからなかった。

それが何であれ、俺は無事でいられるのだろうか。あの時引き裂かれた二人のように、すべてが変わってしまうのでは……

男が俺を道路脇の木に押し付け、片腕を伸ばして締め付けた。

「さて、戦うと言ってもらおうか。私はいい場所を知っているのだがね」

男の言葉を、俺はほとんど聞いていなかった。

降参は……したくない。多分、よくわからない大切なもののため。わからないけど、わからないから、なくしちゃいけないんだ。

そんな、変なことを考えていた。

そして突然、俺の視界が青白くかすんだ。

それはここにあるはずのない光で最初は信じられなかったけど、心が妙な安心感に包まれた。

男の額にシワができる。その疑問に満ちた顔を見たのを最後に、俺の視界が変わった。

気づくと、俺は地面に立っていた。

青い空は変わらないし、白い雲も変わらない。少し見上げたところには歩道橋があって、その先には公民館の入り口が見えた。

地面はアスファルトで、向かいの歩道では黒いスーツに似た服を着ている男が驚いている様子が見える。

公民館を通って向こう側に行く前に戻ってきたらしい。

俺は男から目を離して、ここの近くのどこかにいるはずの秋乃を探した。

秋乃は、思ったよりすぐに見つかった。

「おーい、翔！ 私だぞ、助けに来たぞ！」

聞き慣れた声が上の方から聞こえて、そちらに目を向ける。そこに歩道橋があって、そのちょうど真ん中あたりで、秋乃は手手すりから身を乗り出していた。手を大きくふって俺を呼んでいた。

……こういうときは素直に「ありがとう」と言うべきなのか、それとも「遅えよ、馬鹿野郎」と格好をつけておくべきか。

そんなどうでもいいことを考えると、不思議と笑えてきた。

「お前は早すぎるって、この馬鹿野郎」

「ははは。よく分からんが、すまないな」

自分でもなんでこんなことを言ったのかわからなかった。素直じ

やないのか、ただ馬鹿なのか。それとも……

俺は歩道橋の堅い階段を、二段飛ばしで駆け上がった。

十六話（後書き）

前回と今回は短めだったので、テスト中ですがなんとかまりました。
……さて、次話を書こうかな。

十七話（前書き）

最近熱くなってきました。

執筆スピードが遅い言い訳はしません（できません）が、近況報告です。

テストは無事に終わり、次いでやってくる夏休みの、その膨大な数の課題を受け取って「やめてくれー！ー！」と絶叫しているところです。……ああ、はい。もちろん心の中ですよ。

sonでもって最近、『図書館戦争』の本編、全四巻をこの数日で読破しました。徹夜して。これは執筆どころでも勉強どころでもありませんでした。アニメは見えていませんが、小説は面白かったです。恋愛部分は少々少女マンガっぽい感じもありますが、これは男の自分でも全然許容範囲です。

作者はかの有名な有川浩さんです。堅くない文章でわかりやすく、たいへん参考になりました。皆様も是非！

と、こんな感じで始まりましたが、本当にオススメです。『阪急電車』の方が万人受けしそうですね、書店で見つけたらラッキーだと思って下さい（？）

この文章をたくさんの人に見てもらうにはどうすればよいか。自分が頑張るしかありません！

ということで、十七話、始まります。

十七話

階段を上って歩道橋の上にいる秋乃の所まで歩く。秋乃もまた、こちらに数歩だけ歩いてきた。秋乃は堂々としていて、どこか楽しそうだ。

コイツがこんなに頼もしく見えたのも、かなりひさしぶりな気がする。

「すまないな、早すぎたか」

ははは、と秋乃は笑った。

「ああ、まったくだぜ。もう少し遅かったらはりつけにされていたのに、残念だなあ」

冗談まじり。だけど……俺は何が言いたいのだろうか。意味のない冗談ばかり。

実際秋乃の登場は遅くはなく、かといって早くもなく、だから丁度のタイミングというわけでもなく、微妙な時間帯だった。

それならどのタイミングで来てくれればよかったのかと考えると、意外といつでもよかったのかもしれない。

まあなんにせよ、助かったのだから良かった。

「早く来て残念とは……ふむ。お前がマゾヒストだったとは、これは新たな発見だ。おもしろいぞ」

馬鹿野郎、そんなわけがあるか。

「嘘だよ。冗談だっつーの。ほら、笑え」

「……不思議だな。おもしろいのに笑えないぞ」

秋乃の顔にこそ冗談を言っている様子はなく、本気で不思議がつているようだ。

きっと『おもしろい』の意味の違いがわからないのだろう。

「明日から、国語の勉強を頑張ろうか」

「……？ 何を急に言いだすのだ？」

秋乃はやっぱ馬鹿だと表情には出さずに笑うと、俺はあらためて秋乃の格好を見た。

下は学校指定の体操服、上は『羽球戦隊』と大きくプリントされた練習着だった。両方とも短い。体操服は紺色が主体で、サイドに赤いラインが入っている。よくわからない言葉がプリントされている練習着もまた、黒地に赤い文字だった。

練習着のまま飛び出してきたとは聞いたけど、これはなるほど、見れば見るほど練習着だ。今の秋乃の格好はいかにもスポーツマンといった感じで、かっこよさがある。

対して、衣服から飛び出ている白くて健康的な四肢は、どこか色気を感じさせる。

総じてエロカッコいいとも言えいいのか……。

……いや、普通にかっこいいと言った方が、コイツには似合っている。それに間違っても、色気と呼べるものは秋乃からは出ない。

そんなことより、とりあえず……

「ありがとう。助かったよ」

俺の言葉に秋乃は親指を立てて、ニツコリと笑った。

「喧嘩両成敗だ！」

吹きそうになったが、なんとかこらえた。念を押しておくが、俺と秋乃が喧嘩をしたなんて事実はどこにもない。

とにかく、秋乃は着替えもせずにここまで飛んできてくれたんだ。感謝の言葉が見あたらない。

……いや、見あたってたな。今言っただけじゃないか。まあいいか。

自分の中のくだらないやりとりをやめて、俺は一つ残った疑問について考えた。

それは、秋乃はどうやって俺の居場所を知ったのか、だ。俺にとっては都合が良かったことだからそのままスルーするところだったけど、単純に考えてみても確率は高くない。運が良かったとするのが一番手っ取り早いには違いないが……。さっきの生徒Aの謎の言

葉と関係があるのだろうか？

ない頭を使って少し考えたあと、秋乃本人に聞けば済む話であるというすてきな結論にたどり着いた。

「おうい、少年。いつの間にそんなところにいたんだい？　もしや、ついに能力を使ったのではないか？」

しかしその横から、嫌な声に邪魔をされた。ほんの少し、男のくようがが高揚しているようにも感じれる。

なんでここに来れたのかを秋乃に聞いてみようとして動かしかけた口を止めて、声のした方を見下げた。

「まったくアイツは……。人の思考とか行動にピンポイントで横やりを入れる才能でもあるのか。毎回毎回……」

「なあ翔、あれがさっき言っていた変なおじさんか？」

変なおじさんとは、かなりの的をえている気もした。色々と、よくわからないし。

「……？　少年よ、そのビューティーガールはいったい誰だい？」

なぜ秋乃は英語で呼ぶんだ……

男の方は完全にスルーして、おれはさっきの秋乃の問いに答える。

「変なおじさんと言えば、まあ、そんなとこだな。もっと言えば、アイツはどっかの国のジェントルマンだ」

そう言いながら、そもそもジェントルマンってどういう意味だっけ、と疑問になった。

男は俺のスルーに文句一つ言わず、またも挙動不審な動きをしている。右を見たり左を見たり、それから上を見たり。右往左往しては、またもとの場所に戻った。

もしかしてこっちに来る気なんじゃ……

「秋乃、いったん逃げるぞ」

「……なぜだ？ 別に今から戦えばいいだろう、相手は変なおじさんだ」

「ああ、変なおじさんだ。だけら逃げるぞ」

俺と秋乃の思っている『変なおじさん』はそれぞれどこか違うよ
うで、秋乃は首を傾げている。もしかすると、まだ相手が能力を使
えることを知らないからかもしれない。というか、そうなんだろう。

歩道橋の下を見ると、男がこちら手を向けて狙いを定めている。
とは言っても、俺と秋乃を直接狙っているわけではなく、どうやっ
てこの歩道橋に登るかを考えているらしい。

都合が悪いことはない。

「秋乃、いいからちよつとだけ逃げるぞ。ちゃんと策はあるから安
心しろ」

いまだに普通のおじさん、いや、変なおじさんに負けるとは思っていないようだけど、「翔がそこまで言うのなら」と着いてきてくれた。

逃げる先は、男がいる場所とは反対側の歩道。

秋乃には男の能力を説明するより、直接見てもらった方が話早い。

俺は出来るだけ目立つように、無駄に上下運動をして歩いた。男がこちらの動き気づいたことを確認すると、今度は少し急ぎ足で、階段を一段ずつおりた。

その間に、俺は秋乃に簡単な策を簡単に伝えた。

「簡単だろ？」

「ああ、そんなことならできるぞ。だが……なぜだ？」

「それはまあ、やればわかるって。とりあえず頼むぜ」

階段が終わる。

「ああ。私は信用しているからな」

秋乃は柔らかい表情で頷き、俺に着いてきてくれた。

後ろから「スクラァアアッチ」という男の叫び声が聞こえてくる。このいかにも百万円が当たりそうな叫び声は、聞いている方も恥ずかしいくらいに本気だった。

男はさっきのように、手を伸ばして歩道橋の手すりを掴むと、少しでも手を縮めてターザンロープの要領でこちらの歩道に渡ってくる。

あゝああゝ。

……ふざけてる場合じゃないか。

そんなことより、俺はこの一週間で、この壊れたパソコンのごとく使えない能力でできうる様々な事柄をシミレーションしてきた。秋乃に言った策とは、その努力の賜物である。

単純にして最強、準備はいるが反則級。俺の頭で思いつく程度のことだけど、相性の良さは最高だと思っている。

男との間には十メートルぐらいの距離がある。俺はその距離と男の動きに注視して、タイミングをはかる。

そして、好機はすぐにやってきた。

男は腕をまっすぐにしてこちらに向ける。手を伸ばす準備だ。

そして俺は、男が「スクラッチ」と叫び終える前に、秋乃に大声で言った。

「三秒と十七秒だ！」

返事の代わりに、俺の視界が青白く染まる。

すべては一瞬だった。

「ぐおッ」

確かな手応えが体に響く。

悲痛な声を漏らしたのは俺達のどちらでもなく、ジェントルマンの男だった。

俺と秋乃に後ろから（・・・）体当たりを食らった男の体は、エビのように反っている。長く伸びていく腕は空を切り、遠くにある石の壁を砕いた。

これ以上ないくらいに痛々しい男の格好を、俺達は歩道橋の上から見ていた。

……完璧だ。

「な、なんなのだあは！」

隣では、男の腕を見た秋乃が、飛び出しそうなくらいに目を見開いて驚いている。そりゃ驚かないはずがない、人間の手がありえないほど伸びているのだから。

しかし、いきなり歩道橋の上に現れた自分には驚いている様子はない。さすがに一週間もあれば、少しは慣れるということか。能力を使ったのかどうかはあまり知らないけど。

俺はというと、まだ慣れていない。カッコよく体当たりを決めたつもりだったけど、動きながらいきなり体勢が変わるのにはやはり

慣れない。足がもつれそうになるのを、いつも必死に立て直している。

それにしても、あの男はどこかよくわからない。

「……ん？」

伸びきった腕を憐れみを込めて眺めていた俺は、そこに小さな違和感を感じた。

男の腕よく見ると、伸びているそれは、折り畳めないストローのように真っ直ぐには伸びていないのだ。木の枝のようにごつごつとしていて、それが等間隔で並んでいる。

ゴムでないことはなんとなくわかっていた。でも、ただ伸びるということでもないのだろうか。

もしかして、あれって……

ぼんやりとした答えが頭の中で霧のように広がった。

「見つけたぞ、少年ガール」

まったく、そんな何かしらを勘違いしてしまいそんな呼び方はやめてほしい。

歩道橋の下を見ると、男が得意げな顔をして俺達を指さしていた。その姿には、まるで「犯人はお前だ」とか「謎は解けたぞ」とか言い出しそうな雰囲気があった。

「わかったぞ、そのガールはただのガールではない。私と同じ能力者だ」

大方、予想通りの言葉であった。

「いかにも、そうだぞ」

隣で手すりから身を乗り出して、ゆらゆらとしている秋乃が言った。地面から足が離れている。

推理が正しかったことが判明した時の名探偵のごとく、男は会心の笑みを浮かべた。

「君の能力は……瞬間移動ができること、そして指定の対照を瞬間移動させることができる、といったところかな？　さらに、それに青い光が伴うこと、発動までにはほんの少しだが時間がかかることもわかった。これで少年が消えたことも、君達二人が私の攻撃を避けて後ろから攻撃を仕掛け、さらにそこに移動したことも説明がつく」

男はさらに得意げになり、黒いシルクハットの縁に手を添えて言った。片目はシルクハットの奥から刺すように見つめてきて、もう片方の目は手に隠れている。

「ああ、合ってるぜ」

今度は俺が答える。ここではあえて「半分だけだね」と、格好をつけようことは言わない。こちらの弱点でもある箇所を悟られるかもしれないのに、それをわざわざ言う必要なんてどこにもない。

男はシルクハットを摘んでいる手をもとに戻して言う。

「そういえば少年よ、君はまだ能力を使っていないね。時間を操るなんて人智を超えた能力を、君はなぜ使わない？ ……まさかとは言わないが、奥の手としてとってあるのではないかね」

たった今、惜しむことなんて微塵にもせずに使ったんだけどなあ、俺の能力。ま、気づかれてないならそれでいいや。好都合だし。

俺はわざとらしく肩をすくめて「さあね」と小さな声で答えた。当然男には聞こえていないだろうし、お話には時間をあまり時間をかけたくないからそれで良かったと思った。

次の戦闘の準備には何が必要かを考え、頭の中で考えがまとまったところで行動に移す。今度は公民館の中に向かう。

我ながらなんて素早い行動だとほればれしながら歩き出す。男は追ってくるだろうかと歩道橋の下を見ると、予想は外れて男は両腕を伸ばしてこちらに向けていた。それは古風なアニメに出てきそうなロボットを連想させるポーズで、俺の知識内でその後の展開にあり得るのは、空を飛ぶこと、さもなくばロケットパンチだ。

オッサンが空を飛ぶわけがあるか！ と自分にツッコミをいれて、手が通れそうな隙間のない手すりの支柱に隠れようとする。

しかし、体をそう動かせなかった。

傍らにゆらゆらと揺れている馬鹿が目に入ってしまったから。目に入ったというか、これはもう見逃す方が不可能だ。

——腕二本がそろって俺に飛んでくるわけがあるか、片方は秋乃に向けられているんだ。コイツも狙われているんだ、どうにかこちらに引き寄せないとまずい。

片手を支えにして手すりをから身を乗り出し、秋乃の着ている練習着の首回り後ろをひっ掴んで歩道橋に引っ張り込んだ。

もう耳に入れるのも面倒な男の叫び声が聞こえてすぐ、太い肌色が俺達の頭の上をかすめていった。

歩道橋の上に背中から落ちる秋乃を手足をクッションのように働かせて衝撃を吸収する。丸まりそこねたダンゴムシのように体を縮こまらせていたのを秋乃自身の足で立たせる。勿論手すりの上に顔を出させないように。

「危ないだろうが、手すりから身を乗り出すなってどこかで教わらなかったかよ！」

一連の流れについて行けずにキョトンとしていた秋乃は、状況を理解したのか顔に安堵の色を浮かべた。

「すまん。……しかしそれはエスカレーターではなかったか？」

まさか秋乃から正当なツッコミがくるとは……でなくて、乗り出していないのはどこでも同じだろうが。まして歩道橋の上だとエスカレーターの何倍危ないと思っているんだ。

そう言おうとしたけど、秋乃の驚愕（きょうがく）に歪んだ表情に口が止まった。

「翔、後ろだ後ろ！」

躍起になって叫ぶ秋乃の声を聞いて振り返ろうとしたが、その刹那、右肩に金属バットのか何かの鈍器で思い切り叩かれたような衝撃が全身の骨に響いた。

外れたのか折れたのかすらわからないままに右肩を地面にたたきつけられ、その痛みに反射的に体がひっくり返った。かろうじて開けていた目には世界が一回転したように見えた。

「翔、大丈夫か！」

秋乃の声が言葉として理解できない。

左腕と両膝を支点になんとか起きあがろうとするが、秋乃が俺の方を抑えて起き上がれない。逆に肩に負荷がかかり、痛みが増すばかりだ。

それでも秋乃ね制するとおりに起きあがるのをやめると肩から手が離れるのを感じて、次いで視界の右側が青白く染まる。

触覚では何も感じないけど、体に心地よく響くような優しい光。その光が何なのかを理解したとき、自分でも不思議なくらいに安心感に浸っていた。

それから五秒を数える間もなく、痛みは消えた。それも、さっきまで自分にどんな痛みを感じていたのかすら忘れるくらいに。

ありがとう、助かったと秋乃に礼を言って、軽くなった体を手すりから上に顔を出さないように起こした。

首を回して周りを見ると、手すりの支柱と支柱の間に男を捉えた。さっきの痛みを全てを込めるようにして睨むと、男の懐疑そうな瞳と視線がぶつかった。

「なんだか不思議な能力だね。自分で言うのもなんだけど、私の攻撃を受けて立ち上げられるとは……。それが君の能力かい？」

その名探偵を気取った口調はいい加減にしろよ。イライラしか積もらない。

男の頭が堅いことが唯一愉快で、それがイライラを中和していたからどうにか怒りは収まった。

何はともあれ……

「行くぞ秋乃、反撃だ」

早くプリンを買わなきゃいけないしな。

「ああ」

隣で膝立ちになっている秋乃の短い返事を聞いて、俺は体勢を低くしたまま公民館に向かう。秋乃が疑問など言わないのは俺信頼されているということだろうか。こんな馬鹿なのに。

途中で飛んできた二本の腕は、秋乃が涼しい顔で手を払うと青い光に包まれて消えた。

なんだかんだで、秋乃は俺としても信頼できる。相手のことをい

ちいち気にかけるような関係よりずっといい。

公民館のスライド式自動ドアが開くと寒いくらいの空気が肌を包み込むが、外で走り回ってきた俺には心地よかった。

生活課、スポーツ課などと書かれた掛け標識を全て無視して、俺は反対側の出口を目指して走った。

十八話（前書き）

気付けば、前回の投稿から一ヶ月近くが……。

イイワケ、アリマス。ガツシユク、コウザ、ドクシヨカンソーブン、カダイ……

言って悲しくなりますね、これ。

さて、今回は変なおじさん変（編）のラストです。一ヶ月かかっただけに、一万字を越えた今までで一番長いものです。
では、どうぞ。

十八話

男と一悶着あった歩道橋とは反対側に公民館を出て、俺はまず『それなりに長くて摩擦があるもの』を探した。もちろん、縄跳びをしたとか首を絞めたいとか、そんな簡単な理由じゃない。ない頭を真面目にフルに酷使して考えついた作戦なのだ。

作戦とは言ってもそこまで大それたものでもない。なんせ成功の確率も高くなく、相手の能力も予測にすぎない。ダメだったら秋乃の能力で逃げればいいという人任せな一面もあるし、しかしだからこそ、思い切りできるというものだ。

男の能力については、俺は一つの仮定を立てた。

まず重要なのは、なぜ伸びるか、という箇所にある。伸びると言ったらゴムだけど、打撃は効くし何より曲がる。バネも納豆のネバネバとしたヤツも、伸びるけど曲がらない。

男から逃げている道のりであらゆる『伸びるもの』を考えてみたけど、どれもピタリとはこなかった。そもそも、伸びるもの自体数が少なそうで、あまり頭に浮かばなかった。

ここで、頭の使いどころである。自分でもよくやったと誉めてやりたいくらいの発想の転換だ。

もし、男の腕が伸びているのではないとしたら？

ゴツゴツとした腕、してそのゴツゴツが等間隔に並んでいるの
思い出す。

俺が導き出した答えは『男の腕自体が増えている!』ということだ。

つまりは、男は腕を伸ばしているのではなく、関節を増やしているのだ。肩から肘なのか、肘から手首なのかはわからないけど、これなら曲がるし打撃も効く。

ただ、確証がない。男の腕が俺の知らない物質やこの世に存在しないものでできていない可能性も、ゼロではない。

だから、えっと……

「……ダメだ、これ以上考えると頭がパンクする」

俺は思考を諦めた。

いいんだもう、関節が増えてるってことで。相手が誰であろうと異論は認めない。とは言っても、異論を唱えられる人間はここには秋乃しかいないけど。そもそも口にすらだしていない。

「おい翔、ポケットとしていないで一緒に探せ」

おしいれに上半身をつつこんで『それなりに長くて摩擦がある物』を探していた秋乃が、首をひねって不満げな瞳で俺を見つめていた。

「ああ、すまんすまん。探してみるよ」

これは失態だ、と真新しいノートパソコンが置いてあるデスクの前に腰をおろした。そこに、まるでイカの足のように四方に伸びて

いる名前も知らぬコードの中から、使えそうなものを探す。

部屋にはきれいに整えられたベッドに白い壁、その他いかにも平成を感じさせる家具が並んだ部屋――秋乃の部屋で、俺達は『それなりに長くて摩擦があるもの』を探していた。

公民館を出たのがその五分くらい前になると思う。

俺が『それなりに長くて摩擦があるもの』についてのイメージを考えたとき、真っ先に浮かんだのは綱引きで使う大縄だった。

もちろん、そんな重いものを二人で扱えるとは考えるほど俺は愚かじゃない。だからイメージはそのままに、もう少し細いものを探すことにした。丁度カウボーイが使いそうなロープのようなものだ。

しかし、これがなかなか見つからない。ロープに類似するものも探す対象には入れたけど、この周辺でそんなものが落ちているかと聞かれたら、俺はそんなものは知らないと答える。考えてみれば、ロープなんてものが落ちている情景が浮かばない。

誰かの家に侵入することも考えたけど、それはさすがにできなかった。それじゃあまるで泥棒だ。っていうか泥棒そのものだ。

ここで密かに「三年前の俺達ならやってたかなあ」なんて思って、

昔の自分に恐怖した。

一分くらい考えたけど『それなりに長くて摩擦があるもの』は頭をかすめることもなく、まして見つかることはなかった。

そんな時に秋乃が、

「それなら私の家にあるぞ」

などと言い出すものだから、俺はそれがなんなのかも聞かずに秋乃に時間を戻すように頼んだ。

戻る時刻は朝七時、秋乃が家を出る前だ。

歩みを止めた俺と秋乃は青い光に包まれ、そして気づけば俺は家の畳の上で仰向けに寝ていた。家というのは当然俺の家で、隣に秋乃はいない。寝ていたのが布団の上ではなく畳の上であったのは、この家の中で俺の時間だけが戻ったからだろう。

体がだるいということとはなかったから、俺はさっと起きあがって秋乃の家に向かった。

俺の家のドアにはチェーンも鍵もかかっていなかったが、それが何を意味するのか考える余裕はなかった。

今回は秋乃に助けられたなあ……

機会のコードで代用できるとは、ロープに固執していた自分がマジで馬鹿みたいだ。

自分の石頭が浮き彫りになったけど、意外に落ち込んだりはしなかった。もう自分が馬鹿だということに関して開き直っているからかもしれない。

こういう訳で秋乃の部屋にいるのだけど、やっぱりこの部屋は、というよりこの家はきれいだ。親子そろって整頓上手ってところか。

クラスのヤツらが知ったら驚くだろうな。秋乃の部屋って男気があふれてそうなイメージがある。……と言ったのは、漫画同好会の同士だったつけ。

てか、男気があふれた部屋って何だ？ 俺の部屋だって片付いてるといえばそうだよな。

思考があさっての方向に向かっているのに気づかないでいると、後頭部に軽い石のようなものがぶつかった。

何事かと振り向いてみると、押入から上半身をだした秋乃が腰に両手をつけて、再び不満そうな瞳でこちらを見ていた。いや、今は怒りの色も感じられる。

「翔、だからお前は探す気はあるのか」

低く地を這うような声に小さく身震いした。

「うっ……すまん、真面目にやるよ」

秋乃から目をそらして下を向くと、汚れ一つ見あたらない床に黄色のミニホッチキスが落ちていた。

なるほどこれが投げられたのか。

「まったく、なにをポケットとしているのだ」

初めて来た部屋でもないだろう、と文句をたらしながら、秋乃はまたおもしろい上半身を突っ込んだ。

秋乃はさつきと変わらない練習着を着ていて、その肉付きのいい健康的な足はいい見せ物となっていた。

顔が見えないから、そこにあるのはただの女性の白い足。健康な男子高校生には少々目に毒だ。

ここに父親がいたらはしらないと叱るだろうか？ ……おじさんだったら終始笑ってそうだなあ……

じゃあここに俺の母親がいたら、見ちゃいけません、なんて目を塞ぐだろうか……。……わかんないな。

ふと現実に戻ると、知らぬ間に腕を組んでいた。

いかんいかん、真面目に探さないと。

頬を両手で挟むように叩いて気合いを入れ、俺が求めるようなコードを探し始めた。多分まだきれいに整頓された方だと思うのだけ

ど、それでも俺には未開のジャングル顔負けに入り組んで見える。

一応俺の家にもパソコンはあるのだけど（壊れているけど）、こんなに複雑ではない。

手にとってみないとわからないよなと思って、片っ端からコードを手にとって目測で長さはかった。

一本一本を手の中を滑らすように追って……

「いいのあったな……」

ジャスト18・254689秒で、丁度いいコードを見つけた。

なんだ、ちゃんと探していればすぐに見つかったのか。もっと時間がかかるかと思っていたけど。

コードはパソコンとよくわからない機会を繋いであって、他と紛れそうな黒色だった。

「翔、そっちは見つかったか？」

振り返ると秋乃が白いコードを四つおりくらいにして持っていて、それを突き出していた。長さも丁度よさそうだ。

「見つかったぜ、この黒いの。ちょっと待ってて、今抜くから」

こういうのは根元を持って抜くんだよな、と自分に言い聞かせるように呟きながらコードを抜きにかかる。たかがコードを抜くだけに失敗を想像したわけではないけど、あっさりとコードは抜けた。

「何をやっているんだお前は！」

え？

秋乃の怒声に体がビクリと震えた。

「そのコードは抜いてはいかんだろうがあああああ！」

ええええええええ！？

いや知らんってそんなこと、不可抗力だ！

自分は間違っていない。そう考える俺と秋乃の和解がすんなり成立するわけがなく、秋乃の叱責に対して時に反論し、時にぼかしてやり過ごし、時に論点をずらしまくって、なんとか落ち着いた。

やつつ終わつたため息をつく俺の正面で、論説に全力投球した秋乃が息を荒げている。

「……行くか、外」

全身の力を抜くように言うと、秋乃は息を整えてからため息をついた。

「……そうだな、まったく無駄な時間だった」

多分、あのロマンチックなおじさんも——ヒステリックだっけ？
まあいいや、とにかくおじさんも俺達を探して町をさまよっていることだろう。これ以上待たせるのも忍びないってもんだ。

腕で反動をつけて一気に立ち上がる。

「それじゃ、反撃といくか」

口の端がつり上がっていくのがわかる。

「ああ、そうだな」

秋乃に簡単な作戦を説明しながら玄関まで歩き、そしてドアを開いた。



「……よし、準備はこれで完了だ」

五月のカラツとした日差しにあてられてかいた汗を服の袖で拭き取る。

雲一つない空の真ん中に輝く太陽を見つめて、まぶしくてすぐに目をそらした。

右、左、正面にはそれぞれどこまでも続きそうな一車線の道が伸びている。とは言っても、行き止まりは見えているけど。

様々な説明を避けて、つまるところ、俺達はT字路の真ん中に立っているのだ。

「準備とは大層な物言いだな。このコードを持って右に左にまっすぐ、行って帰ってきただけだろう。しかも一本は大縄跳びの回すひものように」

飛ぶ人間はいない。

「二人で仲良くな」

「とても美しい響きじゃないか」

「つまらないって意味だよ、大縄飛びにしては」

冗談をわかってくれない秋乃に、ため息ではなく笑いがこぼれた。

今もコードの両端を二人で仲良く持っているわけだけど、恋人同士の赤い糸にはとても見えない。なんせ黒色……死神にでも仲立ちをされているようだ。

「なあ翔、準備ができたのはいいが、私達はいままで待っていればいいのだ？」

「さあ、アイツが俺達を見つけてくれるまでかな。今日中に見つけてくれればいいなあ」

あのおじさん、絶対にどこか抜けてるからなあ。

棒読みで、アメリカ人のごとくオーバーに言うと、秋乃の顔はみ

るみる不満気になっていった。

「……私は……帰ってもいいのか？」

「まあまあ、冗談だって。その方法を考えようじゃないか」

コードを持ち替えて秋乃の肩をバシバシと叩く。秋乃の顔は不機嫌を隠すことをせず、唇をとがらせて俺の手を払った。

不機嫌が怒りに変わる前に手を引くか。

それにしても、自分にこんなサディスティックな一面があるとは……。……いや、それとは違うかな？

「ともかく、あのおじさんに俺達がここにいるってことを伝えたいわけだ。なんかいい手はないか？」

少し調子を変えて真面目に話すと、秋乃も表情を堅くした。

「……つまり、簡単に言うと、目立て！　ということだな？」

まあ……そんなとこかな。

「そういえば、戦ってる最中は他人から見られないんだったな。青髪が言ってた気がする」

ようするに、どんな派手なことをしても周りからは見えないという意味だ。

「青髪とは？」

「わからないのか？」

「心当たりならあるが……」

「じゃあそれだ、多分。それで、いい案はあるか？」

秋乃は握った手の人差し指と中指の間に顎をおいて、考え込むように上を向いていた。

なかなか動かないから俺も考えてみたけど、目立つということの難しさがわかったただけだった。

家を壊すのはさすがに行きすぎてるし（そもそも壊せない）、大きな音も俺達の叫び声程度が限界だ。この町は広い。せつかく戦いの準備をしたのに、わざわざここを動くこともない。

秋乃の能力も使えるとして、果たしてどうすればいいのか。

四方八方を泥沼に囲まれたように考えをつまらせていると「そうだ」と秋乃の、頭の上に電球でも浮かんでいそうな呟きが聞こえた。

「なんかあった？」

俺が聞くと、秋乃は鼻を鳴らして得意げな笑みを作り、挑発するように俺を上目遣いで見た。

秋乃が得意げになるなんて、不安要素にはまったく困らないものだ。

「まあな。目立て、という了見にならもってこいだ」

どんなだ？ と素直に質問をぶつけたけど、見ればわかる、とお茶を濁された。

秋乃は自信に満ちあふれた表情をそのままに、片方の手のひらを空に向ける。

時を挟まず、俺は空に異変を感じた。ほんの少しだけど、空が、というより空間が青白く光っているのだ。秋乃の能力だということにすぐにわかった。

だが、次の瞬間。

「えっ？」

自分の意志とは関係なく、声が漏れた。

見上げた空に、少し前まで雲一つない青空だった空に、黒い正方形が浮かんでいた。

まるで空に穴が開いたような、直接宇宙を見ているような感覚――いや、ちがう。黒い立方体が空に浮かんでいるんだ！

よく見ると、立方体の各辺がうっすらと確認できる。

これって、もしかして……

「ははは、どうだすごいだろう。大体半日前の『夜』をこの時間にもってきてやったぞ」

笑えない。そんなの反則だって……

開いた口がふさがらないとは今の自分の状態を言うのだろう。上を向いているせいでもあるのだろうけど、やはりその黒い立方体はこの世界には異常だった。

なんだかファンタジーだ。ていうか能力を使ってる時点で十分ファンタジーだけど、これには今までで一番ファンタジーを感じる。日常の風景のピースを一部バラバラにして、

それにこういう常識を完全に無視した能力を見ると、俺の能力の低級さが際だっていい気がしない。

「これですぐ来るだろう」

フンッ、と胸を張る秋乃に、頼もしく、しかし妬ましく、とかく不満を全面に押し出しているような、じとじとした視線を送る。

能天気な秋乃はそういう感情を感知するシステムが故障して――最初からなかったのだろうか、俺の視線を気にする様子はない。

都合の悪いことは見えないし聞こえないし感じない、ってところか。……ったく、どんな幸せな人生を送ってんだか。

想像するだけ無駄か、と思考に区切りをつけて秋乃から目を離す。

特に見るものがなくなった俺はもう一度黒い立方体を見上げて、なんか物騒だなと考えて、すぐに顔を元の位置に戻した。

三方向に伸びる道のうち、中央の道が遠くまで見える。かなり遠くまで続いているけど、今のところ人の影は一つもない。

まあ気長に待つか、と思って肩の力を抜いてリラックスをした。

肩の力を抜いた瞬間、ずいぶん遠くから誰かの声が聞こえた。距離はかなり遠いようで、本当に蚊の泣くような声しかしなかった。

俺が、声が聞こえた方向、正面の道路をまた声が聞こえないだろうかと、ぼんやりと見つめていると、

「おい、少年にビューティフルガール！」

気を配っていたせいか、今度ははっきりと——とは言ってもかすかなんだけど、声を聞き取ることができた。

言うまでもなくあのおじさんだ。まったく、ずいぶんと早いご登場である。

「来たみたいだな」

「ああ」

誰へでもなく俺が言うと、遠くから聞こえる声に気づいていたらしい秋乃は一つ返事をした。それからチラリとこちらを横目で見て、また正面に向き直った。

道の奥の方までを見つめていると、遠くに見える家の瓦屋根の上に、男は現れた。して仁王立ちをした。

屋根の上って、どうしてそんな所から現れるんだよ。飛び降りるのかな……あ、着地失敗した。

鼻か額か何かをさすっている姿が、ここからでもギリギリ見える。

あれは痛そうだ。……でなくて、

「標的は目の前まで来た。準備はいいよな、秋乃」

「もちろんだ」

力強く頷いた秋乃。だけど、その不安はどうしても拭いきれないようだ。遠くの男を見据えて、孤狼のように、うさぎのように立っている。

「心身ともに絶好調だ。……しかしだな、私にそんな器用なことができるだろうか？　自分が不器用なのはよく知っている」

ふと俺の方を見て問いかけてくる秋乃に、俺は答える。

「以外だな、自覚があるとは」

秋乃のムツとした顔には気にせず続ける。

「まあ、どうせ失敗しても逃げればいいんだ、お前の能力で」

「いやしかしだな、二回目は成功しにくいだろ？　それに、さっきのように一撃でも攻撃を受けたら……」

だんだんと声が小さくなっていくから、本気で心配していること

がわかる。俺のことも、多分秋乃自身のことも。そりゃ一撃で肩にはずすのか折るのか、そんな威力があれば当然だ。

いや、でも。

「心配すんな。怪我したって治せばいいだろ、お前の能力で」

「……そうだな。……？ さっきから私任せな作戦ばかりであるが？」

真顔で正論を唱える珍しい秋乃が小さく首をかしげた。

そんなことを言われてもなあ……

「俺に何をしろと。適所適材ってもんだろ、仕方がない」

秋乃と俺の能力を考えれば、当然の結果なわけだ。

それでも納得いかなさそうな秋乃には返答の打ち切りをするように、俺はイタリア風おじさんの姿を視界に映した。さっきよりずいぶん近くまで来ていた。こちらに向かって、まるで十年ぶりの再会を喜ぶかのように大きく手を降っている。

さて、本番だ。

「気楽にやろうぜ。アイツの首と手と足を縛り上げればいいだけだ」

ああ、と頷いた秋乃は男を見据え、それからじつと合図を待った。俺も男をよく見て、耳を澄まし、タイミングを計る。

……いや、耳を澄ましてもはダメだ。距離が離れていると音が届くのが遅れて、実質判断が遅れる。目を凝らすんだ。

秋乃の能力の発動時間は約0・5秒、先週よりさらに早くなっている。能力の発動時間を考慮しなくていいのは、なかなか助かる。

男から目を離さない。腕を伸ばしてくる、もしくは立ち止まる、その瞬間を待つ。

「準備はいいよな？ 集中するぞ」

俺の問いかけに秋乃は小さく頷いた。

瞬間的に移動するのは、相手だけじゃなくて自分も混乱する。ぼーっとしているだけでは意味がない。だから最終確認をしたのだけれど、必要なかったかもしれない。これが一回目じゃない。

身構えもせず、ただ男の行動に目を凝らしている。

そして次の瞬間だった。今まで走っていた男が急に立ち止まった。これはラッキーだ！

「六分二十二秒！」

叫ぶやいなや、秋乃の手がほうきのように空気を切った。俺達の体が青白い光に包まれる。

男は腕を上げたけど、逃げられると思ったのか叫び声を上げることはなかった。というのが消える前に見た最後の光景だ。

またとないチャンスじゃないか。こみ上げてくる笑いを集中力で抑えつける。

そして視界が入れ替わり――

俺達の目の前に現れた、電柱のように立っているジェントルマンの男に襲いかかる。

「なっ！」

斜め右側からは俺が、斜め左側からは秋乃が、俺達が握るコードが男の逃げ道をふさぐようにかかる。男の顔、はいきなり正面に現れた俺達に驚き困惑している。それでいい。

次だ。人間という生き物は、いきなり現れたものや突然襲ってくる異物に対して無意識に自己防衛機能がはたらく。難しく言っただけ、要するに反射があるということだ。

そしてその自己防衛に使うのが、まず最初に両手。この男がいくらジェントルマンでも、それが普通だ。案の定、男は両手を、しかも縛りやすいようにパーで防御をしてくれた。

最高のシチュエーションじゃねえか。

俺と秋乃は多分同時に、差し出された男の手にコードを巻き付けた。

そして俺と秋乃が交差し、腕を一カ所にまとめる。長いコードはまだまだあまっている。

その片方を持つ俺はそのまま男の後ろに回り、片手で反動をつけて今まで走ってきたスピードのエネルギーを上方向への跳躍に使う。

そしてそのまま男の首にコードをひっかけるようにして二回巻く。

防御はさせない。男の肩越しに、秋乃が男の両腕を縛っているのが見える。これで腕の自由が利かないはずだ。

俺達は男に自由を与えない。

首にコードをかけた俺は進路を変えず、再び男の前に出る。ちょうど体を一周するようになる。

そこで秋乃からコードのを受け取り、俺が持ってきたコードの一端と固く結びつける。ここは念入りに、キツくこぶ結びでだ。

事象の進展に着いていけない男は、自由なはずの両足で一步下がろうとする。だが、それもできない。

秋乃が男の両足を、足首から太股まで螺旋を描くように縛り付けていた。男は当然後ずさることなどできず、秋乃が足をひよいと持ち上げてやると、豪快にアスファルトに叩きつけられた。

鈍いうめき声を発した男はなんとも不格好で、ひっくり返って死んでいるセミのようだった。面白いな。そういえば、これなら足が伸びても大丈夫だ。

しかし、そんなことを思う間も「ふう」と息をつく間もなく、男の口が動こうとする。

「スクラァァちゅぷ」

させるわけがない。俺はしゃがみ込み、男の口を強く押さえ込ん
で言葉を遮る。

うーだのぶーだの喚いていられると、手がくすぐったい。しかも
だ液がつく。あまり気持ちよくはないから、早いところ終わらせよ
うと俺は口の両端を釣り上げる。当然演技だ。……いや、これは本
音かもしれない。

左後ろに秋乃の気配がやってくる。いまだにバタバタと暴れてい
る男はなかなかうつとうしい。

これで最後、チェックメイトだ。

俺は悪魔の表情を崩さず、男の耳元でこう囁いた。

「もしも、今あんたが腕を伸ばしたら、首が飛んでくんじやない？」
数秒かけて言葉の意味を知った男は凍るように体をこわばらせて、
ついにおとなしくなった。

一本のコードが手と首を繋いでいるんだ。もしも手が伸びていっ
たら……答えは言うまでもないな。

後ろでは秋乃が「はっはっは」と高笑いをしている。俺もつられ
て「わーはっはっは」と笑いたくなるのをこらえて、今度は天使の
笑顔で男をたたみかける。

「こうさん、で……いいですよね？」

ニッコリと微笑みながら、ポケットからカッターを半分出して見せる。武器を使ってはいけないなんてルールはなかったよな。うん。

「私のだ。……いつの間に用意したんだ……」

秋乃が呆れるように賞賛してくれる。

秋乃の家を出る時に、すつとね。拝借させていただいた。

こんなこともあるのかと、な。というのは真っ赤なウソで、なんとなく取ってきただけだ。カッターナイフでも銃刀法違反になる気もするけど、聞き間違いだろう。

男が黙ること能力で数えて約十八秒間。ついに諦めたのか、深いため息について重そうに顔を上げた。

「仕方ないね。……降参するよ」

男は小さく肩をすくめて、瞳を閉じた。

対する俺は、もうニヤニヤ笑いが止まらない。それでもアイツには笑われたくはなかったから、頬の筋肉を固めて普通を装う。

振り返って虚空を見つめ、ふざけた主催者に問いかける。

「おい青髪、今の聞いたよな！」

少しぐらい離れていても聞こえるような声で言ったけど、青髪の少女も養女も金髪の美女も姿を現さなかった。それどころか、声も

聞こえない。

これは……勝ちってことでいいのかな？

「……イテッ」

男を解放しようかどうか迷っていると、不意に後頭部に石ころの
ようなものが当たる感触がした。

振り返って探してみるとやっぱり小さな石ころだった。……いや、
なんか形状がおかしい。石ころを拾い上げて見てみると、面の一つ
に文字が彫られていた。

えーと、なにになに……

………ああ、なるほど。

これは、いわゆる「ユー・ウイン」というやつか？ ということ
は――

「どうした翔、その石ころに何か書いてあったか？」

再び振り返ると、腕を腰に当てている秋乃がこちらを興味深そう
に見ていた。隣では、どうやってか仰向けからうつ伏せになった男
が、腰をそらして秋乃と同じく俺を見つめていた。

俺は拾った石ころを投げ上げて、捕まえる。そして二人に文字が
彫られた面を見せる。

『V』。ビクトリー。

これを見た秋乃の感想は、

「それは……トゲなのか」

本場ジェントルマンの感想は、

「トゲではないよ。これは山だ」

だった。

おいおいなんだよ二人とも、この勝利のサインがわからないのかよ。

「まったく、ここに書いてあるじゃんかよ、『V』って。――……あっ」

手の中で、勝利のマークが逆立ちしていた。



「えっ!?!」

俺がさりげなく言った一言に、背の高い中年男性がたまげたよう

な声をだした。

中年男性というのは勿論、さっきまでジェントルマンなおじさんで性別は男でイギリス大使のような顔の人だと思っていた人間で、純血の日本人で姓を猪守（いのもり）という人間だ。

つまりは、さっきまで闘っていた男の名前が猪守だった、という話だ。

その猪守さんに買ってもらったプッチンプリンを大口開けて食べていた俺もまた、びっくりしてスプーンの上のプリンを飛ばしそうになった。落としそう、でなく飛ばしそうだった。

「なんですかいきなり……。人の家ではおとなしくしているしてるものですよ」

「君の家は隣じゃなかったのかい、少年」

当然そうだけど。

「昔この家の持ち主に言われたことがあるんですよ。『今日からこの家を自分の家のように使っていよいよ』って」

「それは……本当に本当なのかい？」

失礼だな。猪守さんには人を信じる心がないらしい。

本当だとも。丁重にお断りしたけれど。

話題が逸れたことに気づいた猪守さんは、コホンと咳払いをして

こちらに向き直った。

「だから、あの時私が手を伸ばしたら首が飛ぶというのは、はったりだったのか？」

あの時とは、俺と秋乃が猪守さんの手足を縛った時のことだろう。

「いや、まあ……結果的にそうなってしまったんですけどね……。実際に縛ってみて、そのあとになって気づいたんですけど」

猪守さんが肘か肩の関節を増やしていたなら危険性はほとんどない。けれど、手首の関節を増やしていたなら危なかった。……たかが馬鹿の頭の中のシュミレートで検証した結果だけど。

俺の考えをなんとなく伝えてみると、猪守さんは「うーん」とうなって肩肘をついた。

「私の能力について、私でも完全には把握できていないのだよ。どこの関節が増えるのかなんて、考えたこともなかった」

これでもまだ一回戦だし、仕方がないと言えばその通り。でも少なくとも俺より前には能力をもらっているはずなんだけどな、青髪の言葉によると。

一週間以上のあいだ何をしていたんだよ。聞こうとしたけど、同じような質問をついさっきしたことを思い出した。

猪守さんの話によると、彼は三ヶ月前から自分探しの旅をしていたらしい。いわく、このまま平凡な人生を送って死ぬだけでいいのか、だそうだ。妻と子供三人をおいてきてまで旅をしているらしい。

ていうか、家族はよくOKしてくれたな。猪守さんもその家族も、金銭的には大丈夫なのだろうか。……もしかしてお金持ち？ 黒いスーツも、そういうことなら納得できる。

ちなみに猪守さんは、着替えなどの荷物をコインロッカーに入れていた。あのあと荷物を取りに行き、汗で湿ったスーツから別のスーツに着替えていた。色はやはり黒。

猪守さんのスーツとその他もろもろが入ったリュックサックは、秋乃家のリビングの端っこでドスンと座っている。何様だお前は、と問いかけたくなるくらいにずうずうしい、なんだか山登りにでも使いそうなりユックサックだ。

どうせ男臭い生活用品が入っているのだろうから、中身を見たいとは思わない。贅沢はしないと決めたんだと猪守さんは言っていたし。

大きなリュックサックは今にも爆発しそうなくらいに膨れ上がっている。でっかい夢でも入ってるのかもしれない。

なわけないか。

一人であれこれ考えながらプリンを食べ終わると、ちょうどドアが開閉する音が玄関から聞こえた。秋乃がコンビニから帰ってきた。

「買ってきたぞ、コーヒーの黒いのと白いの、それから四色アイス」

「ごくろうさん。ありがとな」

秋乃に軽くお礼を言うと、俺はコーヒーの黒い方、つまりブラックを手にとってカパッとふたを開けた。

余った白い方、つまりあま〜いカフェオレを、猪守さんは迷わずとった。

ジェントルマンなイメージもまだあるけど、この人は本当に何者なんだろう……

「ありがとう、かわいいお嬢さん」

優しい笑顔で、猪守さんは丁寧にお礼を言った。

「いや、大丈夫だ。しかし、そんなかわいいという歳でもないが、言われると照れるな」

「秋乃、照れるてるならさ、もっとこう、照れてますって顔しろよ。そんな仏頂面で言われても誰も信じないって」

言うとき秋乃はさらに難しい顔になって、

「照れ隠しだ」

こちらをじっと見ながら言いになった。

だから、その、そんなんじゃないや当たり前の羞恥心もあるのかどうかわからんよ。ここで照れを全面に、とまでいなくても、ちよつと見せるだけで本当にかわいくなると思うんだけど。

……あ、いや、もちろんそれで惚れたりなんかはせんぞ。

「いいか秋乃、照れ隠しというのは相手の目を見てするものではないんだよ。ほら、こうやってさ……相手から目をそらして、ニヤけてもそうでなくても、恥ずかしくて相手の顔を見れないような……」

「ああ、分かった。そんな気持ち悪い顔だな」

「ぐっ……！」

コイツッ……俺の渾身の演技に、そんな悪口をさらりと……いや、演技というか俺自身が否定されてるよな。

当の秋乃は、悪びれた顔など少しもしていない。

「ああ、いいなあ、かわいいヤツは。かわいいお嬢さんはいいよなあ」

皮肉という言葉を具現化する勢いで放った言葉だったけど、秋乃の首を傾けることしかできなかった。

「……不思議だな、全然照れないぞ」

「当然だろ、照れてもらったらなんか困る。ってか、お前は理性より本能や第六感の方が有能だな」

「ん？ それはつまり……」

秋乃は手を顎にかけて考え込んだ。

そう、それはつまり、お前が――

「私がすごいってことだな」

「そうだな、ある意味な……」

なぜかげんなりしてしまつて、言い返す気力もなくなっていた。
イスの背もたれに体を落とす。

「ははは、これは照れるな」

「照れるなっ！」最後の力を振り絞つて言おうとした言葉は、いきなり聞こえた猪守さんの声に遮られた。

「うむ！ 私は決めたよ」

何を！？ あまりにもいきなりで、俺も秋乃もそう問いかけることができなかった。

猪守さんはどこか吹っ切れたようにカフェオレを飲み干すと、空き缶を机に叩くように置いて、大きく開いた瞳で俺達を見つめた。

「私は決めたよ！ すまないが、今日からこの家でお世話になるとにするよ！」

「「なぜにっ!？」」

秋乃と声が重なった。

やけに興奮している猪守さんは、ついに鼻歌まで歌いだした。

俺はエスパーに催眠術、占い、霊、魔法……それから神様は、基本的に信じていない。たしかにここにある能力に対してはさすがに信じないとは言えないけど、基本的には、俺は信じていない。

だとしたら。ふと見た猪守さんのリュックサックが少しだけしぼんで見えたのは、気のせい、ということになる。

ほんの小さな変化だった。

……いや、気のせいだから、ちよつとの変化なんだ。馬鹿か俺は。それに、縮んだからなんだっていうんだ。形のないものが飛んでいった訳でもないし。

馬鹿だ俺は。

猪守さんがこの日を境（さかい）に旅人からニートになったことは、言うまでもないことだ。

十八話（後書き）

変なおじさん編、完結です。ご読了、ありがとうございました。

これは完全に身内話ですが、実は高校の文化祭の劇で、脚本を書くことになってしまいました（やってみるとソウトー大変ですよ（泣））

次話ですが、望むのは夏休み中にもう一話……他に書きたい短編（中編）小説もあるんですが、だいじょうぶでしょうか？

内容は、本編では語られなかったくらいどうでもいい話と後日談。

一、二話で終わります。

そうしたらやっと二回戦……。逆を言えばやっと一回戦が終わり……。…。

三十二人の参加者がいて、単純計算で五回戦あるから、この話いつ終わるんだああああ！

とは、このやさきは嘆きませぬ。なぜなら、これからはもっとスピードアップするからです！

だんだんと物語も深みへ進んでいくはずなので、どうかお楽しみに……。

P S. この期にぜひ、評価や感想の方をよろしくお願いします m（

） m

十九話（前書き）

遅くなりました。

最近夏休みが終わって、文化祭の準備やらなんやらが激化してきました。予想以上に大変なのですよ、これが。ヘルプミー（泣）

それと最近はお絵かきにもハマってしまいました。いつかここに載せれるくらいまくなったらなく、とな思っています。

さて、今回は変なおじさん、猪守さんとの戦いが終わって家に帰る途中の話です。

十九話

ダメなもの、使えないもの、壊れたもの、邪魔なもの……その他もろもろ。一見役に立たなさそうなものも、意外なところで役立つことがあるも。

旧石器時代よりさらに昔、紀元前〇×年の頃には、人間にとって石や岩など障害でしかなかったはずだ。……のはず。

それを道具として使ったのは、まさに天命、才覚ある頭脳、そして進化。石を、岩を削つ——たところはまだサルかもしれないけど、そのおかげでここまで高度な文明を築いてこれたのだ。

炎も同じだ。古来より炎に恐怖するしかなかった動物たちだったけど、それを使いこなした人間、もしくはサルは、開拓者であり、パイオニア、新人類であつたはずだ。古来より炎——山火事があつたかどうかは知らないけど、炎は邪魔なものであつた。

近年では、5Rが有名だ。

リサイクル、リデュース……レストラン、レシート、レジスター。いくつか適当に埋めたけど、ようするに、これらは使えないものに目を付けたのだ。——というのはリサイクルだけだったわけ。

とにかく、これを実行した者はこの時代において新人類へと進化、つまりエコロ人になるのだ。いや、ダジャレじゃなくて。

これが世間に広がらないのは、下校中の小学生が落書きをして、『コ』の部分に縦線を一本を付け足して、卑猥な響きにしてしまう

恐れがあるからだろう。なんて恐ろしい。

きっとこれを見越して中止にしたんだ。国家機密機関か、FBIあたりが。

……遠回りをしてしまったけど、つまり俺が言いたいことは、使えないものを使えるようにするのは天才！ 神の許さざる権利（こちら）！

俺はあの神モドキにもらった、ありがた〜い、とはどう間違えても言えない能力の力を最大限に引き出した。

現在が二時半であるということがわかる。この能力のオマケでついてきたたぐいまれなる計算能力（昨日気づいた）により三時まであと三十分であるという解を導き出した。

これこそ、使えないものを最大限に使い尽くすということではないのか。

ということは、それを実行した俺は天才だ！ 神だ！ ビバ、新人類だ！

あはははは。全世界の旧人類どもよ、我が前にひれ伏すがいい。

あは、あはは、あははははは。

あゝっはっはっはっはっは。

とくだらない思考を馳せているのは、サタデーアフタヌーンに現れた謎のおじさんとの戦いに勝ち、一種の安心感を得ていたからなのだ。多分。

いやしかし、突っ込みが入らないということがこうも辛いとは……。誰でもいいから、この俺の暴走もとい妄想を木っ端の微塵に打ち砕いてほしかった。なぜ止めてくれなかったのだろうなどは、考える意味もない。もしいたらエスパーか宇宙人だソイツは。

とまたどうでもいい思考を馳せていた自分に気づく。自分の中に話し相手があればいいのに、ツツコンで欲しい。

まあ今までの思考を全て口に出していたとして、隣を歩いている二人にそれができるのだろうか？ 俺の認識が正しければ、期待はできないな。

正面から見て右から、俺、秋乃、猪守という名のおじさんという順番で並んでいる俺たちは、スーパーで買い物を買ませ、その帰宅途中であった。

もちろん戦いが終わって直接来たので、公衆電話に金を取られた俺も、部活に財布を持って行かない秋乃も買い物などできない。おじさんがお金を出してくれたのだ。お詫びだと言って。いやあ、あなたをあなどっていましたよ。

俺は三個人入りのプッチンプリンを二つを、秋乃は塩昆布を三袋買ってもらった。右手にはレジ袋がぶら下がっている。

真ん中を歩いている秋乃は、道中で買ってもらったアイスクリームをペロペロとなめていて、いかにも幸せそうだ。

秋乃がさっき学校に行ったエナメルバックにそのアイスが溶けて落ちているけど、俺は拭き取るべきか否か。ハンカチはない

し、べたつくのは嫌だし。

そういえば、もう制服に着替えてるな。

そのまた隣で、大きなリュックを背負っている猪守さんは、どこか愉快そうな表情で歩いていた。

いい加減黙っているのも寂しい感じがしたから、俺は猪守さんに話しかけることにした。

「あの、猪守さん。どうしても良いことですけど、現在何をしてる方なんですか？」

猪守さんの身長は高いから、秋乃の頭越しにその顔が見える。

「ああ。私は今ね、旅人をやっているんだ」

……旅人？

この時代にもそんな天然記念物がいたのか……。職業じゃないよな、お金さえあれば世界中のほとんどの場所にいける現代で。お金を稼ぐイメージより、浪費するイメージの方がはるかに強いぞ。

探検家でなく旅人……。絶滅危惧種だ。

もしくは俺が知らないだけでこの世の中に溢れるほどいるのかもしれないが、そんなことは俺の知るところではない。

なんで旅人なんてものをやっているのか聞いてみて後悔したのは、それを武勇伝を交えて長々と説明されたからだ。

簡単に要約すると、自分探しのためにやってるんだからね！
ということらしい。

自分探しのために旅をしている。腐っても文系である俺は、この
文をさらに短くできる。つまりはこういうことだ。

『私はニートです』

これはあとで聞いたことだけど、彼に妻と子供がいることには驚
いた。ニートって凄い。

「なあなあ、翔、おい」

ぼくっとしているように見えたのか、執拗に秋乃様からお呼びが
かかった。

「聞こえてるって。そんなに呼ばなくても」

こぼれるため息と共に秋乃を見ると、アイスはすでに秋乃の腹に
納まっているようだった。しかしなにより、俺は秋乃の目が輝いて
いるのが気になった。

そんなにおいしかったのか？ 聞こうとしたけど、秋乃は横入り
をするように話し出した。

「あそこだ、あそこ。あそこで遊んでいけないか？」

元氣だなあおい……。

あそこというのがどこなのかは、秋乃が妙に興奮しながら指さすものだからすぐにわかった。

秋乃が言っているのは、ちょっとした水場だ。中心に小さな噴水があつて、その周りに水がたまってっている。

子供達の遊び場として重宝されていて、深さはとても浅い。なんせ一番深い所でも俺のすねぐらいまでしかない。だからどんな小さな子でも泳ぐのは難しい。

まだ昼時とはいえ、高校生にもなってこんな所で遊べるかよ。しかも子供達が遊んでるぞ。

と言って聞くかどうか。

「言ってこいよ。ついでに口元についてるクリームとコーンを洗ってこい」

「ははは、お前も一緒に行くぞ。照れるな」

照れとらんわ！

秋乃は口周りについたクリームとコーンのかけらを舌でペロリと口に運ぶと、ニヤツと笑って俺の腕を掴んだ。

「いい、いいよ俺はさすがに恥ずかしいって」

「だから照れるな」

そっちじゃない！

腕を強く引かれて、為す術もなく水場まで連行された。猪守さんはというと、これまたニヤツと笑ってゆっくりついて来ていた。この二人のシンクロ率はなんなんだ。

水場で遊んでいた子供達六人の視線は、見事俺と秋乃に集中した。

「さて、靴を脱ぐのだぞ」

「靴下を脱ぎ忘れるなよ……」

秋乃が靴を脱いでいる隙を見て、俺は水場の横にあった木製のベンチに避難した。猪守さんも横に座った。

ベンチの上には植物でできた屋根のようなものがあり、日陰で涼しい。

「君達は仲が良いね」

聞いてきたのは猪守さんだ。

「悪いよりいいじゃないですか、全然」

「それはそうだ」

ベンチに背もたれはなく、猪守さんは両手を支えにして後ろに体重をかけた。

「一つ聞くけど……」

「なんででしょう？」

猪守さんを見上げると、彼は真面目な顔でこちらを向いた。

「君達はできているのかな？」

……危なかった。今口に水分を含んでいなくてよかった。

てかなんすか！ そんな藪から棒なことをそんな真顔で……

「いやあ、そんな動揺することじゃないよ」

「心配には及びません」

「しかし、その歳で手を握るなんて、なかなかできないよ」

「聞いてくださいよ俺の話を」

猪守さんは笑っていた。それは何かを面白がるようなものではなくて、猪守さんの微笑みは、何かを羨むような、どこか遠くに向いているようだった。

だから、その奥に隠されているものを探るようなことはしない。

しかしまあ、これは勘違いをしているぞ。

「できてないッスよ。そもそも動揺してないし、手を握るのだって、それがアイツなんですよ。そういう関係ではありません」

ごまかしてもいない、これが本音だ。

「そうなのか」と猪守さんは一言反応して、秋乃に目をやった。

制服の下はもちろんスカートで、濡れる心配はないと思う。転びでもない限り。脱いだ靴は綺麗に並べられている。

それにしても、秋乃は水着以外なら何を着ても似合うから凄いよなあ。制服でもジャージでも何でも着こなす。なんで水着がダメなのかは、俺にもわからない。

「お兄ちゃんもこっち来てよお」

不意に、小さな女の子から声がかけられた。幼稚園児くらいの身長だ。知らないお兄ちゃんを誘うとは……誘拐されるなよ。

「いや、俺はやめとくよ。見てるだけだし」

絶対に行かないと決めた心も、結局女の子の潤んだ瞳にポキンと折られた。

ま、いいか。

靴に靴下を脱いでベンチの下に置いて、水場のサイドに座って足だけを水につけた。

「おっと、俺に水をかけるなよ。着替えがないからな」

先手必勝。子供達のキラキラと輝く瞳から救われた。残念そんな顔を惜しむことなく全面に押し出しているけど、水をかけてくることはなかった。本当にいい子達だな……

水に入るのを嫌がってはいたけれど、入ってみると気持ちがいい。

この水場は深さこそないものの、面積はまあまあ広い。子供の三十人くらいは立てそうだ。

少し遠くでは、秋乃が子供達と遊んでいる。スカートをはためかせて、水しぶきをあげ、キャピキャピいつている。

……のであれば可愛さもあるのだろうけど、ゴジラのように水を踏んでいる姿は、百歩譲って面白いとは言えない。

子供達は楽しんでるみたいだし、あれはあれでいいか。制服も少しくらい濡れるだろうけど、まあ俺には関係ない。

「ねえねえ、お姉ちゃん達は付き合ってるの？」

秋乃の近くで遊んでいる男の子が声の主だ。おい、そこ。ちゃんと聞こえてるぞ。

その子は……小学生だろうか。そういうことに興味を持つのも仕方がないのだろう。よし、許す。

「ほほう……そんなに私達がラブラブキャピキャピのバカップルに見えるのか？」

いや待て、何を言ってるんだアイツは。

秋乃は腕を腰に当てて、唇の両端を釣り上げながら子供達を見下ろしていた。悪魔の笑みだ、子供達が吸い寄せられていく。

「お兄ちゃんはどうなの？　好きなら押し倒しちゃえよ」

俺は驚愕した。

おいガキ、お前その言葉の意味を知ってて言ってるのか。母さんは、母親はどこだ、ちょっと話がしたい。父さんは、父親はどこだ、目を覚ましてやりたい。

「って父さん母さんが言ってた」

「親が不純異性交遊を勧めているのか!？」

やはりそうなのか、俺が異常なのか。近頃の子供達にとっては常識なのか？

そうだ。世の中の価値観は多様化しているのだ。意味はわからないけど、そういうことなのだ。こんな子供もいましたとさ。めでたしめでたし。

「翔、こっちに来てくれ」

俺がゆっくりと顔を上げると、秋乃が手を差し伸べてくれていた。でなくて、無理やり手首掴まれて立たされた。

「願望じゃなくて強制か」

「どうせ断る理由などないだろ」

その通りなんだけどね。

秋乃の手に引かれ、しゃぴしゃぴと水を掻き分けながら水場の中
心まで連れてこられた。

水面に反射している太陽がゆらゆらと眩しく、思わず目を細める。
気づくと、周りは子供達に囲まれていた。なんだなんだと見回し
ていると、秋乃がいきなり肩を組んできた。

「ふふふ、ガキ共よ、紹介しよう。コイツが私の親友、玉木潤だ！」

「玉石翔だ俺は。見え透いたボケはつまんねーよ」

秋乃は意外そうな顔をしてから、そんなものだ、と肩をすくめた。

「あはは、お姉ちゃんおもしろい」

黙れガキ！ 俺の笑いのセンスをも否定する気かつ。

まあいいや。

「というわけで、俺はこの変な姉ちゃんの……親友らしい。よろし
くね」

尻が水面につかないようにしゃがみ込み、子供達の目線に合わせ
て自己紹介をする。

子供達はみんな揃ってニヤニヤと笑っている。こちらこそ、とい
うサインなのだろうか。しかしまあ、ネガにしたらホラーだぞこの
絵は。

立ち上がった、ベンチに座っている猪守さんに目配せする。俺と秋乃は、まあそういう関係なんですよ、と。

「おい翔、変なお姉ちゃんとはなんだ。美人で可愛いピチピチの純情少女と言え！」

何かが変だ。矛盾してそうな単語が並んでる気がするぞ。

「馬鹿言えよ！ お前は子供達に嘘を教えていいと思ってるのか！」

「事実だぞ、認めろ」

「……そうか、お前は子供達を目隠しして綺麗なものだけを見せと、苦勞をさせずにぷくぷくと育て上げ、わがまま放題好き放題にさせて、挙げ句の果てには嘘までつくのか！ 社会が腐るぞ！」

「自重しろ阿呆。要するに現実を教えろと言うことなのだな？」

その通りだ、と頷く。

「では現実を教えることにしよう。私は美少女だ。苦勞もしているさ。そしてここにいる玉置優は——」

「玉石翔だっ！」

いちいちリズムが狂わせるな。面倒くさい。

秋乃は表情を変えずに続ける。

「どっちでもいいが」

よくないし。

「これは事実だ。聞け子供達よ、この玉石翔はな、ベッドの下と机の引き出しの一番上とテレビの裏側に――」

「うおおおおおおお！」

もはや反射だった。秋乃の手首を両手でしっかりと掴み、体重移動をしながら一本背負い。秋乃の体はひっくり返って水に叩きつけられた。

さらに後頭部を抑えつける。女の子には優しく？ そんなの男女差別だし。

秋乃の手足は水しぶきを上げながら必死に抵抗している。

少し啞然としていた子供達も、だんだんテンションが上がってきた。面白がって笑っている。

「わーい、押し倒した押し倒したあ」

違えよ！ どこをどう見たらそう見える！

子供達が俺と秋乃の回りを元気よく走り回っている。その景色は、まるで妖精が飛び回っているような、でなければ悪魔にかこまれているような。

そんな光景に気を取られていたからか、俺は水の中にいる秋乃の

事を一瞬忘れてしまった。

俺は油断していた。

秋乃の頭を押さえていた手が、秋乃が首をひねることですぐ外されてバランスを崩される。倒れそうになる体を水の中の両手で必死に支え、なんとか止まる。

俺のついた両手の間にいる秋乃が水の中できると回ってこちらを向いた。顔と顔の間には、手のひら一枚ぐらいの距離しかない。

俺はドキッとした。

これが恋愛感情でないことぐらい、俺にでもわかる。

秋乃が、多分笑った。

退却だ！ 体に命令したけど、それよりも早く秋乃の手が俺のわき腹を掴んだ。

「ふふふ、捕まえたぞ……」

クソッ、こんなことでやられてたまるかつ。

「離せ、馬鹿野郎！」

暴れて抵抗をするが、秋乃の手はびくともしない。

コイツ、どこからこんな握力が……

次に秋乃の両手を引き剥がそうとする。が、それも叶わなかった。

一瞬体が浮いたかと思うと、一気に視界が一回転した。

巴投げ……？

びゅう、と風を切る音を感じながら、俺は背中から水に叩きつけられた。水のしぶきが飛んでいくのが見える。

その瞬間、水場の噴水が盛大に怒号を上げた。。

勝者、白美川秋乃。ってか。……ちくしょう、ふざけんな。

叩きつけられた痛みと全身に染み渡る水の冷たさ、子供達の笑い声と水が飛び散る音。口の中は、ちょっと冷たい水の味でいっぱいだった。

最悪なストーリーで、おかしいことも面白いこともなにもなかったのに……なんでだろう、少し笑えてきた。

この感じは嫌いじゃない。けれど俺は、水の中でその表情を隠す。頬の筋肉を固めて、笑いを止める。

もちろん、秋乃に一言文句を言ってやるためだ。

十九話（後書き）

とりあえず、次話ではまた本編を進めます。もう一話この続きを書いているのですが、それはまた次のシリーズが終わってからにします。

いい加減執筆スピード上げなきゃ、と思っている今日です。頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2306p/>

プッチンプリンと俺の願い

2011年10月7日01時43分発行